

飛驒市文化財調査報告書 第15集  
江馬氏城館跡調査報告書 第8集

# 江馬氏城館跡 7・江馬氏殿遺跡

2020

飛驒市教育委員会







飛驒市文化財調査報告書 第15集  
江馬氏城館跡調査報告書 第8集

えましじょうかんあと えましとのいせき  
江馬氏城館跡 7・江馬氏殿遺跡

2020

飛驒市教育委員会



# 序

岐阜県の最北端に位置する飛騨市は、北は富山市、南東は高山市、西は白川村に接し、面積 792.31km<sup>2</sup>、内、森林が 93%を占める山間地域に、4つの町から成る自治体として、令和2年2月現在、約24,000人の人々が生活しています。

当市には、山の恵みと神通川に通じる宮川と高原川からの恩恵を背景に、数多くの遺跡が残されています。これらの遺跡は、これまでの考古学研究における重要な役割を担ってきました。その中で、市内唯一の史跡に指定されているのが神岡町に所在する江馬氏城館跡です。

昭和55年に史跡指定を受けて以降、近隣住民にご協力いただきながら現状を変更する際には常に調査を行ってまいりました。その継続した調査の成果をまとめたものが、今回の報告書です。これにより、当事業が法令に基づく調査にとどまらず、史跡が「ふるさと飛騨市」の貴重な地域資源として、市民の皆様の誇りとなり、文化財保護への関心が高まる一助になることを強く願うものです。

結びに、発掘調査の実施に対しまして深いご理解とご協力をいただいた地権者をはじめとした市民の皆様、そして、本報告書の作成も含めて多大なるご指導・ご支援を賜りました関係者の皆様に心からお礼申し上げます。

令和2年3月

岐阜県飛騨市教育委員会

教育長 沖 畑 康 子

## 例　言

- 1 本書は、岐阜県飛騨市神岡町殿に所在する史跡江馬氏城館跡下館跡及び高原諏訪城跡、江馬氏殿遺跡における試掘確認調査等の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、開発に伴うものである。調査の大半及び整理作業は、文化庁の国宝重要文化財等保存整備費補助金（市内遺跡）を得て、飛騨市教育委員会が実施した。
- 3 調査は、文化庁文化財第二課（2018年度の組織改変前は記念物課）、岐阜県環境生活部県民文化局文化伝承課（2017年度の組織改変前は岐阜県教育委員会社会教育文化課）の指導協力のもとに、調査は1995～2015（平成7～27）年度に随時、整理作業は2019（平成31／令和元）年度に実施した。
- 4 本書の執筆は、第2章第2節2及び第4章第2節は大下永、それ以外は三好清超が行った。また、編集は有限会社毛野考古学研究所富山支所に委託し、三好の監督のもと常深尚が行った。
- 5 調査における作業員雇用及び測量等の一部を、北陸航測株式会社、株式会社上智岐阜支店に委託して実施した。遺構図・出土遺物図のトレース、二次整理作業の一部を㈲毛野考古学研究所富山支所に委託して実施した。
- 6 遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して実施した。
- 7 発掘調査及び報告書の作成に当たって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である（敬称略・五十音順）。  
宇野隆夫、鹿島昌也、泉田侑希、都竹清隆、中井均、野垣好史、堀内大介、地権者各位  
江馬遺跡保存会、岐阜県文化財保護センター、殿区、富山市埋蔵文化財センター
- 8 本文中的方位は、国土座標第VII系の座標北を示している。2015年度堰堤に伴う試掘確認調査は世界測地系を使用し、それ以外は日本測地系を使用した。水準はT.P.である。  
なお、地形図は平成25年度版岐阜県共有空間データを用いて作成している。
- 9 遺物の色調は、小山正忠・竹原秀雄 1989『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。
- 10 調査記録及び出土遺物は、飛騨市教育委員会で保管している。

# 目 次

序・例言

目次

第1章 調査の経過 .....	1
第1節 調査にいたる経緯 .....	1
第2節 調査の方法と経過 .....	1
第2章 遺跡の環境 .....	3
第1節 地理的環境 .....	3
第2節 歴史的環境 .....	3
第3章 発掘調査の成果 .....	11
第1節 基本層序 .....	11
第2節 建物建設に伴う試掘確認調査 .....	11
第3節 2001年度上下水道工事に伴う試掘確認調査 .....	39
第4節 2002年度上下水道工事に伴う試掘確認調査 .....	48
第5節 2015年度砂防堰堤に伴う試掘確認調査 .....	60
第4章 下館跡周辺の空間構造 .....	63
第1節 高原諏訪城跡 .....	63
第2節 殿坂口遺跡・岩ヶ平城跡 .....	69
第5章 総括 .....	83
引用・参考文献 .....	86
写真図版・報告書抄録 .....	
奥付 .....	

## 挿図目次

第1図 遺跡及び調査位置図 .....	2	第14図 第6地点出土遺物図 .....	21
第2図 神岡町主要遺跡分布図 .....	5	第15図 第7地点遺構図 .....	23
第3図 中世城館位置図 .....	10	第16図 第7地点出土遺物図 .....	23
第4図 建物建設に伴う試掘確認調査位置図 .....	12	第17図 第8地点遺構図 .....	25
第5図 第1地点遺構図 .....	13	第18図 第8地点出土遺物図 .....	25
第6図 第2地点遺構図 .....	14	第19図 第9地点遺構図 .....	26
第7図 第3地点出土遺物図 .....	14	第20図 第9地点出土遺物図 .....	27
第8図 第3地点遺構図 .....	15	第21図 第10地点遺構図 .....	28
第9図 第4地点遺構図（1） .....	17	第22図 第11地点遺構図 .....	29
第10図 第4地点遺構図（2） .....	18	第23図 第11地点出土遺物図 .....	29
第11図 第4地点出土遺物図 .....	18	第24図 第12地点遺構図 .....	30
第12図 第5地点出土遺物図 .....	20	第25図 第12地点出土遺物図 .....	31
第13図 第6地点遺構図 .....	21	第26図 第13地点遺構図 .....	32

第27図	第14地点出土遺物図	32
第28図	第15地点出土遺物図（1）	33
第29図	第15地点出土遺物図（2）	34
第30図	第15地点出土遺物図（3）	35
第31図	上下水道工事に伴う調査位置図	40
第32図	2001年度試掘確認調査構図（1）	42
第33図	2001年度試掘確認調査構図（2）	44
第34図	2001年度試掘確認調査構図（3）	46
第35図	2001年度試掘確認調査出土遺物図	46
第36図	2002年度発掘調査平面図（1）	49
第37図	2002年度発掘調査平面図（2）	50
第38図	2002年度発掘調査平面図（3）	51
第39図	2002年度発掘調査平面図（4）	53
第40図	2002年度発掘調査断面柱状図（1）	54
第41図	2002年度発掘調査断面柱状図（2）	55
第42図	2002年度発掘調査出土遺物図	56
第43図	2002年度工事立会I地区構図	57
第44図	2002年度工事立会II地区構図	58
第45図	堰堤に伴う試掘確認調査構図	61
第46図	遺跡位置及び平面分割図	64
第47図	高原諏訪城跡構配図（1）	66
第48図	高原諏訪城跡構配図（2）	66
第49図	高原諏訪城跡構配図（3）	66
第50図	主郭地区エレベーション図	68
第51図	殿坂口遺跡・岩ヶ平城跡地区区分図	72
第52図	殿坂口遺跡・岩ヶ平城跡略測図	73
第53図	殿坂口遺跡断面位置図	75
第54図	殿坂口遺跡断面図	75
第55図	殿坂口遺跡・岩ヶ平城跡周辺旧公園成図	78
第56図	殿組地引絵図 殿坂口遺跡周辺	79
第57図	下館跡周辺の諸要素位置図	85

## 挿表目次

第1表	江馬氏城跡下館跡・高原諏訪城跡の現状変更件数一覧表	1
第2表	神岡町遺跡一覧表	4
第3表	江馬氏関連年表	7
第4表	建物建設に伴う試掘確認調査土器・陶器一覧表(1)	36
第5表	建物建設に伴う試掘確認調査土器・陶器一覧表(2)	37
第6表	建物建設に伴う試掘確認調査土器・陶器一覧表(3)	38
第7表	建物建設に伴う試掘確認調査鉄貨一覧表	38
第8表	建物建設に伴う試掘確認調査土石器・石製品一覧表	38
第9表	2001年度上下水道工事に伴う試掘確認調査一覧表(1)	47
第10表	2002年度上下水道工事に伴う調査遺跡一覧表(1)	58
第11表	2002年度上下水道工事に伴う調査遺跡一覧表(2)	59
第12表	2002年度上下水道工事に伴う調査遺物一覧表	60

## 写真図版目次

図版1	江馬氏城館跡下館跡・高原諏訪城跡、江馬氏殿遺跡、殿坂口遺跡の遠景（北西から）
図版2	江馬氏城館跡下館跡、江馬氏殿遺跡遠景（西から） 江馬氏城館跡下館跡、江馬氏殿遺跡遠景（北西から）
図版3	建物建設に伴う試掘確認調査第3地点構造完掘状況（北から） 建物建設に伴う試掘確認調査第8地点トレンチ全景（東から）
図版4	上下水道工事に伴う試掘確認調査①地区北半分構造半裁状況（南東から） 上下水道工事に伴う試掘確認調査②地区東半分（南から）
図版5	上下水道工事に伴う発掘調査1工区柱穴S P 3調査状況（南から） 上下水道工事に伴う工事立会I地区トレンチ①柱穴S P 8・9・10調査状況（西から）
図版6	堰堤に伴う試掘確認調査1トレンチ調査終了状況（西から） 堰堤に伴う試掘確認調査2トレンチ調査終了状況（東から）
図版7	土師器 瀬戸美濃焼 青磁 珠洲焼
図版8	打製石斧

# 第1章 調査の経過

## 第1節 調査にいたる経緯

**史跡江馬氏城館跡における現状変更** 史跡江馬氏城館跡下館跡・高原諏訪城跡は、岐阜県飛騨市神岡町殿他に所在する。史跡指定は1980（昭和55）年である。下館跡の指定地内には住宅地等も含まれるため、指定以降現在まで継続して現状変更対応が行われている（第1表）。現状変更の許可条件には飛騨市教育委員会（合併前は旧神岡町教育委員会、以下同。）の職員が立会を実施する旨が明記されているため、工事立会を継続して実施し、史跡保護の措置などの対応を行ってきた。

**試掘確認調査と調整** 旧神岡町教育委員会では1995（平成7）年度に専門職員を採用して以降、試掘確認調査を実施して開発行為との調整を行っている。調整は、史跡地を包含する周知の埋蔵文化財包蔵地である江馬氏殿遺跡を含めて行っている。1995年度以降現在までの建物建設対応、2000～2002年度の上下水道工事対応、2015年度の砂防堰堤対応が大きな案件であった（第1図）。

## 第2節 調査の方法と経過

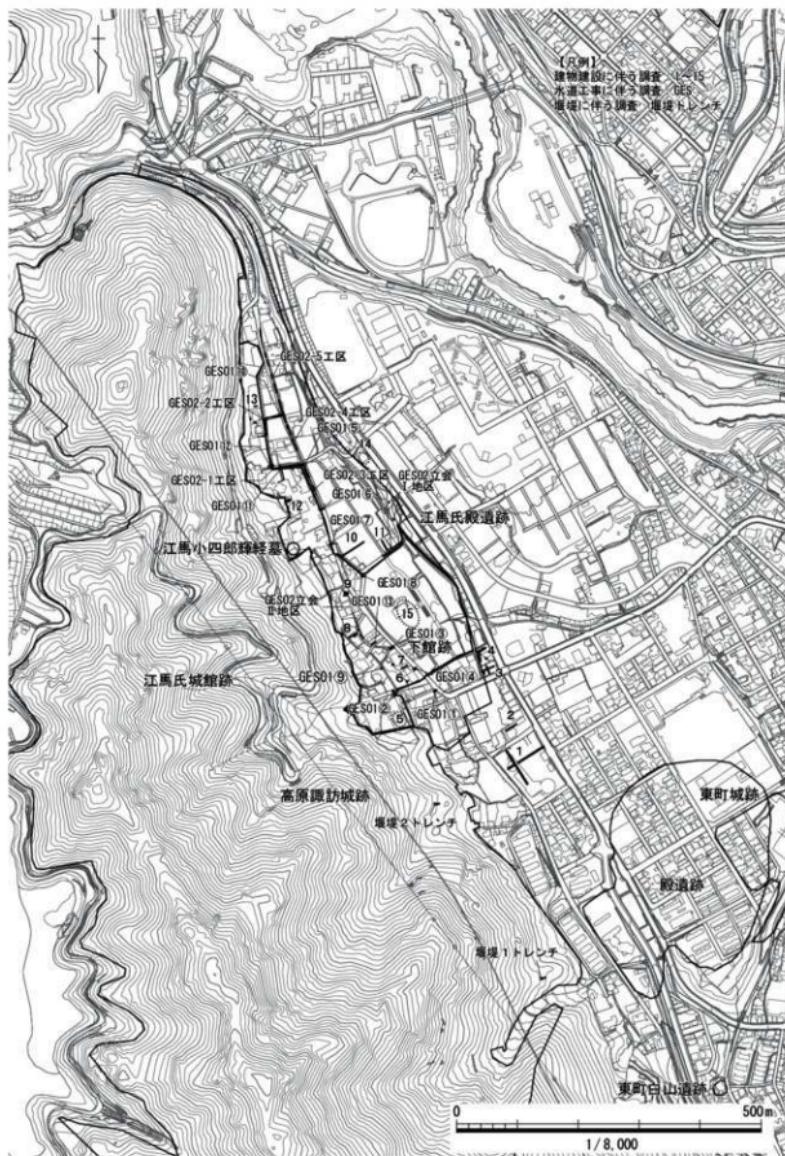
**調査の方法** 表土掘削は重機もしくは人力で、遺物包含層掘削、遺構検出及び掘削は人力で行った。遺構番号は、調査ごとに付している。遺構記号は『発掘調査のてびき』（平成22年、文化庁）に準拠した。平面図・断面図は手実測により、一部三次元測量国化システムにより作図した。記録写真は35mmカメラ（モノクロ）かデジタルカメラで撮影した。遺物は原則一点取り上げとした。

**整理等作業の経過** 一次整理作業は各調査が終了後に実施した。手書き注記とし、遺跡略号（岐阜一江馬氏城館跡：GE）・西暦下二桁（水道工事調査は先頭にSを挿入）・取り上げ番号を原則とした。

二次整理作業は、2018・2019年度に飛騨市教育委員会が実施した。遺物実測は直管で実施し、トレース・レイアウト等の作業は前毛野考古学研究所富山支所に支援業務委託した。出土遺物は、遺跡の性格を反映するものを選別して掲載した。遺物について、2020年1月23日に富山市埋蔵文化財センターの鹿島昌也氏、堀内大介氏、野垣好史氏にご指導いただいた。報告書は2019年度に印刷した。

第1表 江馬氏城館跡下館跡・高原諏訪城跡の現状変更件数一覧表

年度	現状変更件数	年度	現状変更件数	年度	現状変更件数
1980 (S55)	2	1994 (H6)	1	2008 (H20)	3
1981 (S56)	1	1995 (H7)	1	2009 (H21)	3
1982 (S57)	4	1996 (H8)	0	2010 (H22)	2
1983 (S58)	2	1997 (H9)	1	2011 (H23)	2
1984 (S59)	0	1998 (H10)	8	2012 (H24)	4
1985 (S60)	2	1999 (H11)	3	2013 (H25)	4
1986 (S61)	4	2000 (H12)	4	2014 (H26)	5
1987 (S62)	2	2001 (H13)	4	2015 (H27)	1
1988 (S63)	1	2002 (H14)	4	2016 (H28)	0
1989 (S64/H1)	0	2003 (H15)	3	2017 (H29)	3
1990 (H2)	1	2004 (H16)	4	2018 (H30)	6
1991 (H3)	1	2005 (H17)	5	2019 (H31/R1)	4
1992 (H4)	0	2006 (H18)	9		
1993 (H5)	1	2007 (H19)	5		



第1図 遺跡及び調査位置図

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境

飛騨市は岐阜県最北部に位置する。2004（平成16）年2月1日に、古川町・河合村・宮川村・神岡町が合併し誕生した。北は富山県富山市、南は高山市、西は白川村に接している。県庁所在地の岐阜市から北約150km、高山市の北約15kmに位置している。人口は約24,000人、面積は792.31km<sup>2</sup>である。市域のほとんどは山地・森林で93%を占めており、可住地域は約60km<sup>2</sup>と総面積の約7.6%である。周囲は標高3000mを越える北アルプスや飛騨山脈などの山々に囲まれ、可住地域との標高差は2600mにもなる。このように広大な面積と大きな標高差がある上に、河合・宮川・神岡は特別豪雪地帯でもある。

史跡江馬氏城館跡は飛騨市神岡町に所在する。史跡周辺は飛騨山脈とその支脈に囲まれ、乗鞍岳や槍ヶ岳、穂高岳、笠ヶ岳などの北アルプスの山々から水源を集めて流れる高原川流域に位置する。高原川は神岡町の中心部を南東から北西に貫流し、北の富山県境付近で宮川と合流し、神通川となって日本海に流れる。高原川やその支流の吉田川、山田川、跡津川、打保谷川などに沿って、形成された数階層からなる河岸段丘上に集落・耕地が点在する。山田川と高原川が合流する付近の最下段段丘上に神岡の市街地が展開している。町の周囲を1,000m級の山々がとり囲んでいるが、特に町の東部には標高2,840mの黒部五郎岳（中ノ俣岳）や、標高2,660mの北ノ俣岳（上ノ岳）といった高い山がそびえ、北の薬師岳、立山に連なる北アルプスのひとつ立山連峰を形成している。

### 第2節 歴史的環境

#### 1 神岡町の歴史的環境

神岡町の遺跡は、高原川とその支流に形成された河岸段丘に点在する（第2図、第2表）。

**縄文時代** 集落跡・散布地で21遺跡を数える。立地では、東雲遺跡（2）、麻生野遺跡（5）、石神遺跡（8）、上朝浦遺跡（22）、下小萱遺跡（33）などのように広めの河岸段丘に立地する遺跡がある一方、盆地に至るまでの狭小な河岸段丘上に立地する遺跡がある。高原川上流方面では、遊轡石神社遺跡（4）、上小萱井ノ下遺跡（23）、數河中田遺跡（37）などであり、山田川方面では、柏原遺跡（17）、堀之内遺跡（66）などである。2つのパターンが集落の性質に関わる可能性がある。

**古墳時代** 集落跡・散布地を2遺跡と、古墳を1基数える。東雲遺跡（2）、下小萱遺跡（33）においては、古墳時代前期の遺物を確認している。ともに広い河岸段丘に位置し、縄文時代との複合遺跡である。神岡町域の古墳時代遺跡は広い段丘に位置するため、神岡町域では古墳時代前期に広い敷地を求めて生活の場を移した可能性が高い。理由としては、稲作を行いやすい場所を求めてであったと推察される。なお、古墳は柏原古墳（18）のみであるが、実態は不明である。

**古代** 集落跡・散布地で9遺跡を数える。須恵器等を確認した塙野遺跡（31）、下山田遺跡（34）、梨ヶ根中垣内遺跡（51）、殿坂口遺跡（47）、佐古遺跡（30）などは、狭小な河岸段丘に縄文時代の遺跡と重なって分布する。一方で、古代瓦を採集した東雲遺跡（2）、寺林遺跡（42）は神岡町内でも広い河

岸段丘に立地する遺跡である。このように、集落跡・散布地は狭小な河岸段丘に立地し、瓦散布地は広い河岸段丘に立地するという差異が認められる。東雲遺跡・寺林遺跡が立地する河岸段丘の広さから、他と比べて大きめの集落遺跡であった可能性がうかがわれる。

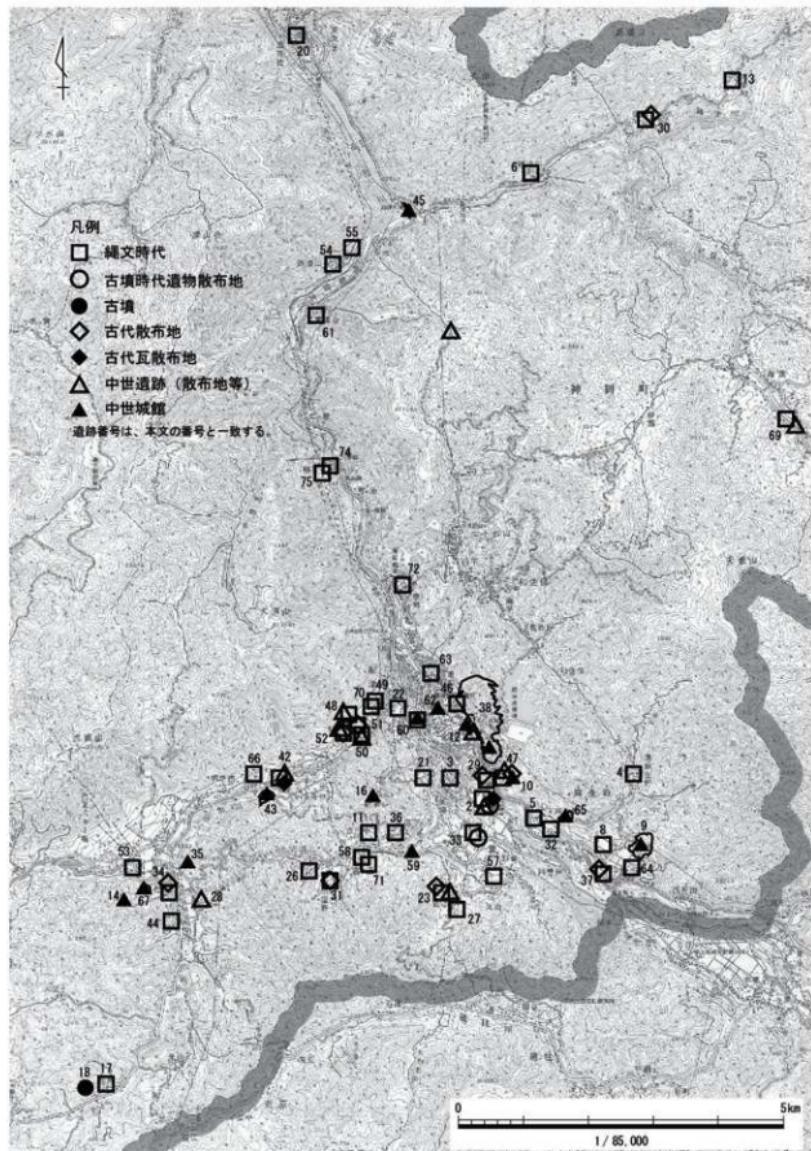
**中世** 集落跡・散布地で11遺跡、山城跡など城館跡で26遺跡を数える。下館跡(12)・高原諫訪城跡(38)・洞城跡(65)・石神城跡(9)・政元城跡(67)・寺林城跡(43)・土城跡(45)が、江馬氏城館跡として市内唯一の国史跡に指定されている。さらに町内には、韋松城跡(16)など江馬氏関連の城館跡が点在する。これらについては同節3にて詳述する。

集落跡・散布地では、寺林遺跡(42)・梨ヶ根中垣内遺跡(51)・梨ヶ根森屋遺跡(52)などがある。いずれも繩文時代との複合遺跡である。また、遺跡登録は無いが、神岡町笠割と森茂(69)でも珠洲焼の破片が知られる。このように、中世遺跡は中心盆地へ出入りする街道沿いに立地する特徴がある。

**近世** 7遺跡を数える。金森宗貞邸跡(20)・金森左京屋敷跡(19)・東町城跡(62)など金森氏の拠点に関連する遺跡がある。1582(天正10)年に江馬氏が衰退し、1585年に金森氏が飛驒に入った後に構築した遺跡と推測される。集落跡では、近世期の絵図を使った歴史地理調査で中世集落から継続して営まれたことを確認している。今回の江馬氏下館跡の発掘調査でも近世遺物を確認した。

第2表 神岡町遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	浅井田城跡城館跡 呼称地	—	—	37	数河中田遺跡	散布地	縄文・古代
2	東雲遺跡	散布地	縄文・古墳・ 古代・中世	38	高原諫訪城跡	城館跡	中世
3	東雲下野遺跡	散布地	縄文	39	谷城跡	城館跡	近世
4	道幡石神社遺跡	散布地	縄文	40	誕生石遺跡	散布地	縄文
5	麻生野遺跡	散布地	縄文	41	出水遺跡	散布地	中世
6	藤津遺跡	散布地	縄文	42	寺林遺跡	散布地	縄文
7	荒田口留番所跡	その他の遺跡	近世	43	寺林城跡	城館跡	縄文・古代・中世
8	石神遺跡	散布地	縄文	44	天の森遺跡	散布地	縄文
9	石神城跡	城館跡	中世	45	土城跡	城館跡	中世
10	岩ヶ平城跡	城館跡	中世	46	殿遺跡	散布地	縄文
11	内洞遺跡	散布地	縄文	47	殿坂口遺跡	散布地	縄文・古代・中世
12	江馬氏城館跡 下館跡／江馬氏遺跡	城館跡	中世	48	梨ヶ根中垣内遺跡	散布地	縄文・中世
13	大多和遺跡	散布地	縄文	49	梨ヶ根成道跡	散布地	縄文
14	奥政元城跡	城館跡	中世	50	梨ヶ根下打遺跡	散布地	縄文・中世
15	龍の渡し跡	その他の遺跡	近世	51	梨ヶ根中垣内遺跡	散布地	縄文・古代・中世
16	韋松城跡	城館跡	中世	52	梨ヶ根森屋遺跡	散布地	縄文・古代・中世
17	柏原遺跡	散布地	縄文	53	西遺跡	散布地	縄文
18	柏原古墳	古墳	古墳	54	西疋山遺跡	散布地	縄文
19	金森左京屋敷跡	城館跡	近世	55	西高木牧反前遺跡	散布地	縄文
20	金森宗貞邸跡	城館跡	縄文・中世・近世	56	西茂住遺跡	散布地	縄文
21	金崎下垣内遺跡	散布地	縄文	57	野首遺跡	散布地	縄文
22	上朝浦遺跡	集落跡	縄文	58	野尻遺跡	散布地	縄文
23	上小萱井下遺跡	散布地	縄文・古代・中世	59	野中城跡	城館跡	中世
24	上山田遺跡	散布地	縄文	60	八幡山城跡	散布地・城館跡	縄文・中世
25	鶴賀坊廟	その他の墓	近世	61	東彦山遺跡	散布地	縄文
26	葛谷洞遺跡	散布地	縄文・中世	62	東町城跡	城館跡	中世
27	小萱上遺跡	散布地	縄文	63	東町白山遺跡	散布地	縄文
28	金剛寺跡	社寺跡	中世	64	二坂遺跡	散布地	縄文
29	坂巣遺跡	散布地	縄文・古代	65	洞城跡	城館跡	中世
30	佐古遺跡	散布地	縄文	66	堀之内遺跡	散布地	縄文
31	塙野遺跡	集落跡	縄文・古墳	67	政元城跡	城館跡	中世
32	下麻生野遺跡	散布地	縄文	68	明智功山跡の碑	その他の墓	近世
33	下小萱遺跡	散布地	縄文・古墳	69	森茂遺跡	散布地	縄文・中世
34	下山田遺跡	散布地	縄文・古代	70	やなぎなから洞遺跡	散布地	縄文
35	下山田城跡	城館跡	中世	71	吉田なから洞遺跡	散布地	縄文
36	下吉田遺跡	散布地	縄文	72	六郎谷遺跡	散布地	縄文
				73	削石遺跡	散布地	縄文
				74	新石川市遺跡	散布地	縄文



第2図 神岡町主要遺跡分布図

## 2 江馬氏の歴史

江馬氏が支配した高原郷（現在の飛騨市神岡町・高山市上宝町付近）では、中世の館跡や山城跡の遺跡が確認でき、史料からはこのころの高原郷を江馬氏が治めていたことがわかる（第3表）。江馬氏関連の史料については、葛谷鮎彦や小島道裕の論考に詳しい。

高原郷の江馬氏は、伊豆国田方郡江馬庄（現伊豆長岡町付近）を領有していた鎌倉幕府執権北条氏の一族か、北条氏の被官である伊豆の江馬（江間）氏の一族と考えられる。13世紀中頃に江馬氏は飛騨に所領を得て高原郷に入ったとされる（葛谷 1970）。その後、南北朝の内乱を経て在地領主として成長したと推定できる。

小島は、古文書の記述から14～15世紀の江馬氏について詳細に検討している。高原郷の江馬氏が史料上に現れるのは、14世紀中葉の南北朝期のことである。初見史料は『天龍寺造営記』暦応5＝康永元年（1342）の記録である。天龍寺造営の儀礼において「江馬左近将監忠繼」が小侍所の武士として佐々木佐渡判官入道（京極高氏（導誉））の進めた馬を引いたとの記録から、江馬氏が幕府直属の武士であったことが確認できる（小島 1996・1998・2003）。また14世紀後半以降の飛騨における江馬氏について、小島は史料から明らかにしている（小島 1996・1998・2003）。

『山科家文書』1372（応安5）～1388（嘉慶2）年までの記録では、「江馬但馬四郎」「江馬能登三郎」「江馬民部少輔」の名前が確認できる。この3人の出自や系譜は明らかでないが、高原郷で伝えられる江馬氏と同族と考えられる。「江馬但馬四郎」は広瀬氏を通じて管領細川頼之から室町幕府の公務執行命令を受けており、また管領斯波義将から室町幕府の公務執行命令を受けている。「能登三郎」は山科家領飛騨国江名子（現在の高山市江名子町付近）や松橋（不明）を押領した。「江馬民部少輔」は室町幕府の公務執行命令を受けている。これらのことから、14世紀末には高原郷にいた江馬氏の一族が、室町幕府から地域を代表する武士と認識されてその公務を執行し、あるいは逆に反抗する勢力を保持していたことが分かる。また、『山科家礼記』1471（文明3）・1472（同4）年の記録では、「江馬左馬助」が室町幕府より公務執行命令を受けた他、管領細川勝元から山科家への忠誠を誓う指示を受けたことが記されている。このことから15世紀後半には幕府の有力者と強い繋がりを持ち、また認められるだけの力を持つ武士であったことがわかる。『鳥丸家文書』文明16年（1484）の記録では、「江馬三郎左衛門元経」が小八賀郷（現在の高山市丹生川町付近）の代官に任命されたことが分かり、『北野社家日記』1491（延徳3）・1492（同4）年の記録からは、「江間殿」が室町幕府奉行人松田長秀・飯尾為規から北野社領飛騨国荒木郷の回復を命じられ、以後、江馬氏が北野社領の飛騨国荒木郷の所領經營を委任されたことが分かる。このことから、江馬氏が高原川流域に留まらず現在の荒城川流域にまでその勢力を拡大し、15世紀末まで飛騨国の有力な武士として室町幕府との関係を保っていたことが分かる。

戦国時代になると動乱の中の江馬氏の活動が記されている。このころ飛騨は、甲斐の武田氏と越後の上杉氏という二大勢力の間で、双方から圧力を受けていた。江馬氏は、中地山城（現在の富山県富山市大山町）の城主になるなど、越中に進出したとされる（高岡徹 1990）。

天正10年（1582）、本能寺の変で織田信長が没すると、上杉方の江馬輝盛と織田方で飛騨南部を支配していた姉小路（三木）自綱と飛騨全域の支配権をめぐって争うに至った。決戦は両氏の領地である荒城郷八日町（現高山市国府町）において行われ（八日町合戦）、江馬輝盛が敗れて討死にし、本城である高原諏訪城も落城した。このことは飛騨市古川町太江にある寿楽寺の大般若經裏書に伝え

られている。その後も史料では江馬時政なる人物の活動が認められる。また、後の加賀藩の家老・山崎家の家臣団に関する戦功覚書である「山崎家士軍功書」には、1584～1585（天正12～13）年の間に佐々成政軍が高原郷に侵攻したと記されている。その際、江馬氏は「高原の城」を明け渡し、「岩屋堂」（現在の高山市上宝町岩井戸か）に籠もって戦うが、攻め落とされたと記されている（高岡徹1998）。どの程度の勢力を保っていたかは不明であるが、江馬氏は天正10年で完全に滅びることなく、以後も存続していたと考えられる。その後、1585（天正13）年に金森氏が飛騨に侵攻し、江馬氏は当初金森氏に付き従うが、金森氏が飛騨統一直後に一揆を起こし、滅ぼされたと伝わる。このようにして、中世の飛騨北部に雄飛した江馬氏は、近世への転換期に領主としての姿を失うことになった。

第3表 江馬氏関連年表

西暦	元号	ことがら	文献
13世紀ごろ		江馬氏が高原郷に入ったとされる。	
1342	康永1	「江馬左近特監忠繼」天龍寺造営の儀礼の際に小侍所の武士として佐々木佐渡官入道（京極高氏（尊尊））の馬を引いた。	(1)
1372	応安5	「江馬但馬四郎」廣瀬氏を通じ、管領細川頼之から、山科家領を押領した守護被官人・垣見氏を排除するよう命令を受ける。	(2)
1381	永徳1	「江馬但馬四郎」福義氏を通じ、管領細川頼之から、山科家領を押領した守護被官人・垣見氏を排除するよう命令を受ける。	(2)
1383	永徳3	「江馬能登三郎」守護被官人の垣見氏とともに山科家領飛騨国江名子・松橋を押領する。守護京極氏に排除するよう命令がお出される。	(2)
1388	嘉慶2	「江馬民部少輔」室町幕府奉行人より山科家領段階催促を停止するよう命令を受ける。	(2)
1471	文明3	「江馬左馬助」室町幕府奉行人より山科家領飛騨国岡本上下保・石浦・江名子・松橋を、姉小路氏とともに現地で治めるよう命令を受ける。	(3)
1472	文明4	「江馬左馬助」管領細川勝元に対し、幕府に忠節を尽くすと書状を出す。	(3)
1484	文明16	「江馬三郎左衛門元経」小八賀郷の代官に任命される。	(4)
1489	長享3	禅僧万里集丸、高原郷・荒木郷を訪ね、江馬氏の饗応を受ける。	(5)
1491	延徳3	「江間殿」室町幕府奉行人から北野社領飛騨国荒木郷の回復を命じられる。以後、江馬氏が北野社領の飛騨国荒木郷の所領經營を委託される。	(6)
1492	延徳4	「和専平太」江馬氏の使いとして北野社の年貢催促に対し、南院院に納めに行く旨の返答を行う。	(6)
1544	天文13	飛騨国に兵乱がおこり安国寺・千光寺が被害を受ける。	(7)
1564	永禄7	江馬輝盛と江馬時盛が対立。輝盛は三木良頼とともに上杉氏の助力を、時盛は武田氏の助力を得る。最終的に時盛が降伏する。	(8)
1582	天正10	江馬輝盛、三木良頼と荒木郷八日町で合戦に及ぶ。輝盛が討ち死し江馬氏敗走（「八日町合戦」）。直後に三木方の小島時光が高原城を攻め入り落城。	(9)
1584	天正12	江馬時政、河上用助に荒木郷の土地を給付する。	(10)
1585	天正13	羽柴秀吉の命を受けた金森長近・可重父子が飛騨に侵攻。江馬時政は当初金森氏に付き従うが、金森氏が飛騨統一直後に一揆を起こし滅ぼされたと伝わる。	

(1) 天龍寺造営記 (2) 山科家文書 (3) 山科家札記 (4) 烏丸家文書

(5) 梅花無尽藏 (6) 北野社家日記 (7) 飛騨志所載史料 (8) 座田家文書

(9) 寿楽寺大般若經第六百卷奥書 (10) 河上家文書

### 3 江馬氏関連の中世城館

#### (1) 高原諜訪城跡

神岡町殿宇保木戸平に所在する。江馬氏下館跡の東側背後、二十五山から南に向って延びる尾根の南端頂および稜線延長上、保木戸平(城山)山頂に位置する。周囲の山々の峰はいずれもこれより高く、包囲された印象をうけるが、南方は水かさの多い高原川の急流に臨んでおり、比較的攻撃しにくい位置にある。高原諜訪城の南裾において山之村道が上宝道から分岐し、山之村で鎌倉(有峰)街道と連絡する。高原諜訪城は江馬氏の本城であると伝わる。主郭は南北30m・東西16mの長方形の平場であり、その下には幅6～10mの腰曲輪がある。主郭北側尾根の延長に堅堀や堀切を設け、尾根筋からの攻撃を防ぐ。主郭の南方、直高12m下に東西の方向には山地を掘り切った長さ42m・幅18mの堀切がある。この堀切より5.5m下った所に、東西9.6m・南北20mの曲輪がある。

#### (2) 洞城跡

神岡町麻生野に所在する。『飛州志』には城主は麻生野右衛門大夫直盛と記す。この人物は1564(永禄7)年に55歳(一説には57歳)で没したとされ、築城は天文頃と考えられる。直盛の跡を継いだ慶盛が本家の輝盛と不和になり1578(天正6)8月18日夜、輝盛の軍勢に攻められ、慶盛は自害し、城も焼け落ちたと伝わる。山頂に東西42m、南北13mの長方形の主郭を設け、主郭西側に東西33m、南北14mの曲輪がある。この曲輪から南側・北側それぞれの斜面に1本ずつの堅堀を設ける。また、本丸北側には堀切を設け尾根筋の防護とする。

#### (3) 石神城跡

神岡町石神に所在する。洞城と石神城は共に高原郷と鎌倉(有峰)街道を結ぶ上宝道沿いに立地し、また二つの城の間に広がる河岸段丘面を守るように立地する。江馬時経の築城とされる。主郭は東西27m・南北19mの楕円形を呈する。東側に南北方向の堀切、西側の南北それぞれの斜面に1本ずつのが堅堀を設ける。この堅堀の西側に平場が、平場の南西端部に東西方向の堀切がある。

#### (4) 寺林城跡

神岡町寺林に所在する。玄蕃山の頂部に立地する。高原郷の主要街道である越中東街道沿いである。主郭は東西23m・南北10mの方形の平場であり、西に3段の平場が連なる。

#### (5) 政元城跡・奥政元城跡

神岡町西に所在する。高原郷の主要街道である越中東街道はこの地で巣山・十三墓峠を越える本道と、数河峠を越える脇道(数河街道)に分かれ、政元城はその分岐点の押えであったと推定できる。江馬氏の家臣吉村政元の居城とも、正本主馬の居城とも伝える。主郭は東西20m・南北10mの楕円形の平場であり、幅4～10mの腰曲輪がめぐる。西側に東西16m・南北10mの曲輪がある。その南に堀切を設け、尾根筋への防護としている。なお、西側尾根～350m登ったところに曲輪・堀切を備えた奥政元城跡が存在する。数河峠を監視する立地である。

#### (6) 土城跡

神岡町牧に所在する。高原川と跡津川の合流点の岩山である牛首城山に位置する。高原郷の主要街道である越中東街道と、鎌倉(有峰)街道を結ぶ脇街道である有峰道はこの城の麓の大字土より分岐して大多和峠を経て有峰・富山に至る。土城はその分岐点にあり、北方に備えると共に、江馬氏との関係が伝えられる越中地山城(富山県富山市大山町)との連絡にあてられたものであろう。江馬氏の家臣一ノ瀬清四郎の居城であったとも伝えられている。頂部に二段の平場がある。

#### (7) 奉松城跡

神岡町吉田・釜崎・寺林に所在する。主郭を拠点として3方向の尾根上に城郭遺構が展開する。北尾根は残存する堀切等の遺構や主要街道と自身の領地を見下ろす立地である。南東尾根は堀切と小平坦地群といった遺構があるが、他の尾根より明確な城郭遺構ではない。主郭周辺においては、高さ2～3m程度の切岸や横堀等を幾重にも巡らせる。西方向からは主郭に攻めににくい構造となる。この主郭周辺の様相は、高原諏訪城跡など他の江馬氏の山城の構造と近似している。このため、奉松城跡は江馬氏の最終段階である16世紀後半まで使用していたと推定される。また、江馬氏のほとんどの山城と直接連絡できるのは奉松城跡が唯一である。

#### (8) 東町城跡

神岡町東町に所在する。江馬氏下館跡の北方、殿段丘の段丘端部に位置する。『飛州志』によれば「江馬之御館」とある。江馬氏が武田氏に属した後、武田信玄の越中侵攻のため、その家臣山県昌景の縄張りで造り、後の金森長近の入国の際には、その家臣山田小十郎が入れ置かれたとされる。現在も石垣が残り、2018（平成30）年度の工事立会の際には堀の可能性がある遺構を確認した。

#### (9) 岩ヶ平城跡・殿坂口遺跡

神岡町殿字岩ヶ平及び字坂口に所在する。高原諏訪城跡の南側、和佐保川を挟んだ対岸に位置する。岩ヶ平城跡は山稜尾根先端に位置し、堀切により城域を区画している。その山麓の河岸段丘に殿坂口遺跡が位置する。青磁碗、珠洲甕、瀬戸美濃焼すり鉢・天目茶碗などの中世期の遺物を採取している。高原諏訪城から望むことができること、山の村道に隣接すること、出土遺物などから、江馬氏下館に関連する中世期の館または寺院跡の可能性が想定される。

#### (10) 梨打城跡

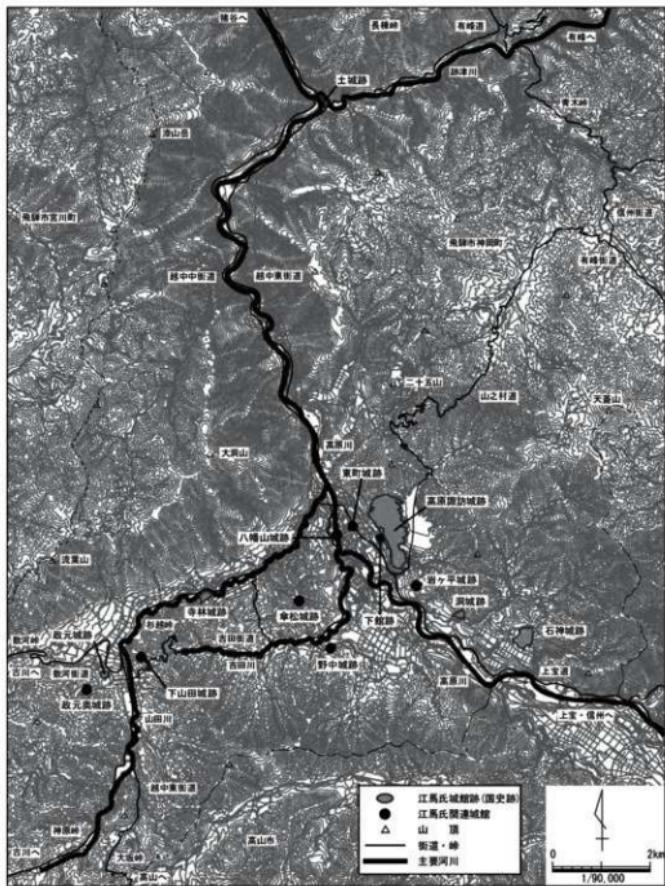
高山市国府町八日町に所在する。古川盆地を流れる宮川の支流・荒城川が東の山峠に入った、北岸の桐谷と十三墓の両峡谷に挟まれた山頂に位置する。越中東街道がこの城の東裾を抜けて大阪峠から高原郷に入り、梨打城はその守りであったと考えられる。『飛州志』には高原郷諏訪城城主江馬常陸介輝盛の持ち分と記され、江馬氏が南方を固めるために造った出城と考えられる。築城者、築城年共に不明である。天正10年（1582）の八日町合戦で江馬輝盛が姉小路（三木）自綱に破れた際、本城高原諏訪城と共に落城したと伝わる。主郭は南北36m、東西24mの不整三角形の平場であり、幅4～8mの腰曲輪がめぐる。主郭を中心に三又状に伸びる尾根上に曲輪を設け、堀切、堅堀で防御する。

#### (11) 主要街道との位置関係

江馬氏城館跡の所在する高原郷は飛騨国の最北端に位置し、越中・信濃と接していることから古くより交通の要所となっていた。中世鎌倉時代において交通上最も重要であったのは、幕府が所在する政治の中心地鎌倉との交通である。各地から鎌倉へ通じる鎌倉街道が整備されていた。飛騨のみならず、北陸諸国から鎌倉方面に向かうには、飛騨山脈を越え、信濃・甲斐に抜けるのが最も近く、飛騨の鎌倉街道は北陸諸国と鎌倉とを結ぶ道としても重要であった。この鎌倉街道の一つが越中から高原郷を抜けて信濃に至る有峰街道である。鎌倉幕府が倒れた後は飛騨・北陸諸国と信州を結ぶ道として信濃街道あるいは信州街道と呼ばれるようになった。また飛騨と越中を結ぶ街道を越中街道と呼び、主要なものは越中東街道・越中西街道の3つであった。高原郷内にはこれらの主要街道を連絡する幾つかの脇街道も通っていた。

江馬氏下館跡は、越中東街道と信濃街道（鎌倉時代は有峰街道）とを結ぶ上宝道沿いの河岸段丘上

に位置する。さらに館の南には山之村道と吉田街道の分岐点があり、これらを通じても主要街道と連絡がとれる。また江馬氏と関係がある山城は、これらの街道沿いやその分岐点など交通上の重要地に位置している。高原郷内にも下山田城跡・野中城跡等が築かれた。戦国時代以降になると、江馬氏は複雑な情勢の中で古川盆地を拠点としていた姉小路氏（16世紀中期以降は三木氏）としばしば対立する。山城が各地区に築かれた背景には、越中方面や南飛驒方面的街道の出入りを監視する必要に迫られたためと考えられる。軍事・商業の両面において大切な意味をもつ交通路を掌握することが、高原郷を支配する上で重要な意味を持っていたのであろう。



第3図 中世城館位置図

## 第3章 発掘調査の成果

### 第1節 基本層序

層序は、2009年度まで実施していた下館跡の調査成果に準じ、上層より表土、土地改良土、旧耕作土、鉄分堆積土、下館基盤土、地山に大別した。

第1層表土は、現生活面であり、宅地、耕地、道路などに関わる土層である。

第2層土地改良土は、1970年代に実施された土地改良の際の客土である。

第3層旧耕作土は、近世以降から1970年代の土地改良工事までの耕作土である。カドミ汚染土等とも表記されていた。

第4層鉄分堆積土である。旧耕作土の最下層に堆積する鉄分層である。

第5層下館基盤土である。中世期の基盤層と考えられる黒褐色粘質土である。下館跡の位置する段丘一帯で確認できる。

第6層地山である。この地域一帯の基盤層である。しまりがよい黄橙色砂礫土である。

### 第2節 建物建設に伴う試掘確認調査

#### 1 調査概要

史跡指定地での建物建設に伴う現状変更判断のために、また史跡を包含する埋蔵文化財包蔵地の江馬氏殿遺跡での開発との調整のために、下館跡周辺で試掘確認調査を実施している。ここでは、15ヶ所の調査成果について詳述したい（第4図）。

#### 2 第1地点（第5図）

調査日 1998（平成10）年5月13・14日

**調査対象地とトレーニング設定** 調査対象地は、下館跡と同一段丘の北辺にあたる。かつては耕作地であり、その後社宅地として利用されてきた。社宅造成時に縄文土器が出土したという話もあるが、一帯の社宅建設は戦前から行われており、また建て替えも数回行われていることもあり、出土時期や地点などの詳細は不明である。

今回の調査では、調査対象地に対してほぼ十字となるようなトレーニングを幅2mで設定した。

**土層と遺構** 大きく上層から、社宅に伴う現代の土層、旧耕作土、山土、下館跡基盤土を確認した。断面Bの9層と断面Cの5層は他所で中世の遺構が確認できる下館跡基盤土であり、調査対象地の中央から東側（山側）にかけて認められる。しかしながら、当該地では断面で遺構の確認はなかった。

**遺物** 遺物の出土はなかった。

**所見** 今回の調査対象地は江馬氏殿遺跡の範囲外であると考えられる。

#### 3 第2地点（第6図）

調査日 1996（平成8）年9月28日



第4図 建物建設に伴う試掘確認調査位置図

**調査対象地とトレンチ設定** 調査対象地は、下館跡と同一段丘の北辺にあたる。住宅予定地を調査対象地とし、東西20m×南北2mのトレンチを設定した。

**土層と遺構** 土層の堆積は、上層より第1層耕作土、第2層床土、第3～11層旧耕作土、第12・13層鉄分堆積土、第14・15層下館基盤土であった。第14・15層は他所で中世の遺構が確認できる下館基盤土である。しかしながら、当該地では断面で遺構の確認はなかった。

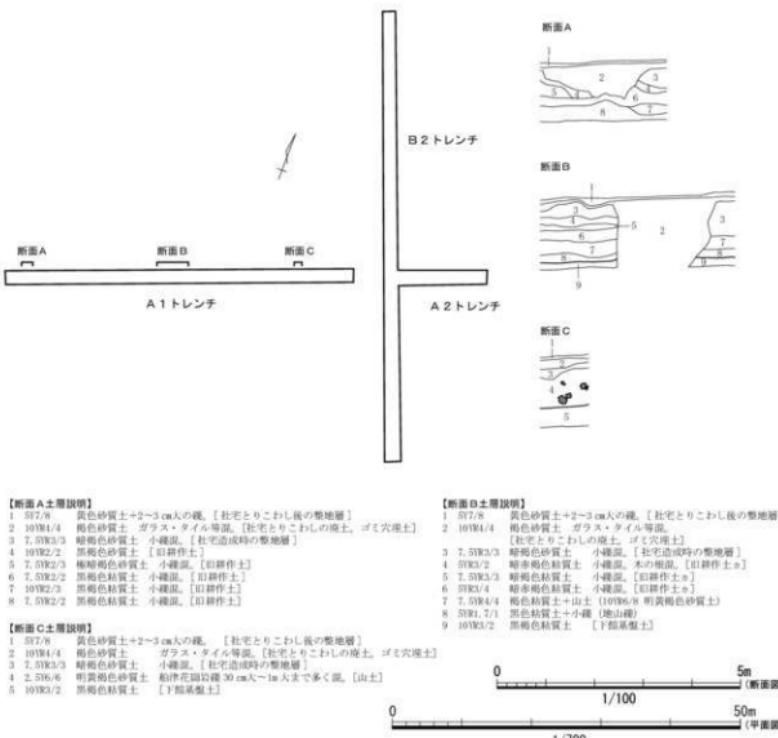
**遺物** 遺物の出土はなかった。

**所見** 今回の調査対象地は江馬氏殿遺跡の範囲外であると考えられる。

#### 4 第3地点（第7・8図）

調査日 2008（平成20）年6月17・18日

**調査対象地とトレンチ設定** 史跡指定地隣接地のアパート新築工事予定地を調査対象地とし、東西22m×南北1m、南北13m×東西1mの十字トレンチを設定し、さらに南北4.5m×東西1mの追



第5図 第1地点遺構図

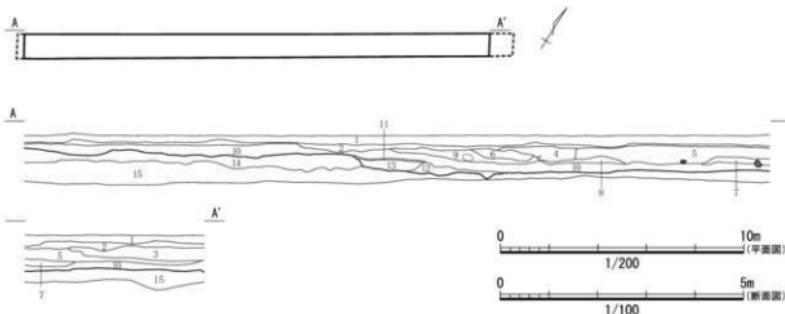
加トレンチを掘削した。

**土層と遺構** 土層の堆積は、上層より第1層現代の造成土、第2層耕作土、第3～6層旧耕作土、第7層造成土、第8層柱穴埋土、第9層下館基盤土、第10層地山であった。

遺構は第9層下館基盤土から掘り込まれる柱穴9基を確認した。調査範囲の北東側でまとまって確認し、中世期の可能性が想定された。

**遺物** 第5層旧耕作土より瀬戸美濃焼2点(1・2)、第2層耕作土より近世陶器1点(3)が出土し、全て図示した。1は瀬戸美濃焼天目茶碗である。体部が直線的に開き、口唇部がくびれ、口縁端部は外反して丸くおさめる。内外面に褐色の鉄釉を施す。大窯第4段階に属するものと考えられる。2は、瀬戸美濃焼瓶類の体部破片である。外面に灰釉が一部認められる。胎土は気泡を含み、密である。色調は灰黄色を呈する。3は近世陶器すり鉢の体部破片である。内面に8条一単位のすり目を施す。内外面に灰赤色の鉄釉を施す。胎土は気泡を含み、密である。瀬戸美濃産と考えられる。

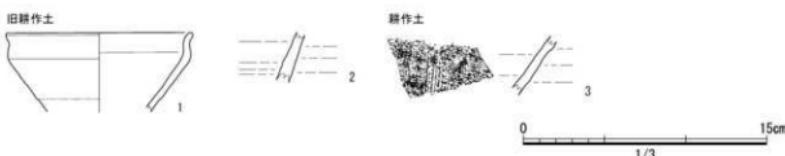
**所見** 今回の工事では中世期の可能性がある柱穴9基を敷地北東部で確認した。しかし、遺構は敷地の一隅に集中するため、その部分で掘削する際に工事立会を行うよう調整した。同年8月20日に工事立会を実施し、掘削が旧耕作土までにおさまる状況を確認した。



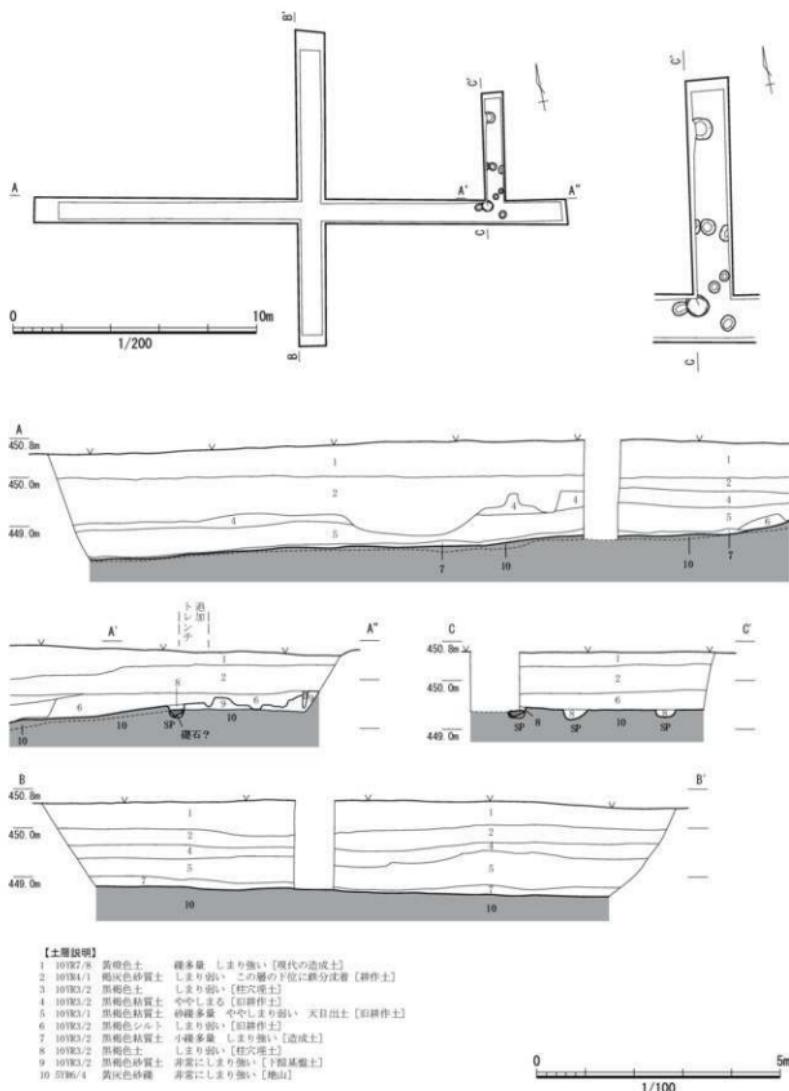
#### 【土層説明】

- |           |                     |            |  |
|-----------|---------------------|------------|--|
| 1 10W2/4  | 暗褐色粘質土 【現耕作土】       | 10.7.5W4/4 | 褐色土 鉄分の抽出がみられる。                              |
| 2 10W7/8  | 黄褐色砂質土 松子粗(%) [風土]  | 11.5W3/4   | 灰オリーブ粘質土                                     |
| 3 10W3/2  | 黒褐色土                | 12.7.5W3/4 | 暗褐色土 底面じり。鉄分の抽出がみられる。                        |
| 4 2.5W3/2 | 黒褐色土 ブロック状の塊になっている。 | 13.10W4/2  | 灰褐色土 底面じり。鉄分の抽出がみられる。                        |
| 5 10W2/2  | ・ 黄褐色土              | 14.7.8W2/3 | 暗褐色粘質土 粘性強し。【下細基盤土】                          |
| 6 2.5W3/3 | ・ 塗抹層               | 15.10W3/4  | 暗褐色粘土 → 10W6/8 明黄褐色粘土 白色の5mm程の砂粒が混じる。【下細基盤土】 |
| 7 10W3/3  | 暗褐色土                |            |  |
| 8 2.5W3/3 | 暗褐色土                |            |  |
| 9 2.5W3/3 | 暗オリーブ褐色土 底・根面じり。    |            |  |

第6図 第2地点遺構図



第7図 第3地点出土遺物図



第8図 第3地点遺構図

## 5 第4地点（第9～11図）

調査日 1995（平成7）年5月20日～6月3日

**調査対象地とトレント** 調査対象地は、史跡指定地の北西側に位置し、江馬氏殿遺跡の範囲内である。建物建設予定地を調査対象地とし、南北15m×東西2m及び東西12m×南北2mのL字トレントと、南北2.2m×東西1.7mのトレントを設定した。

**土層と遺構** 土層の堆積は、上層より第1層耕作土、第2層土地改良土、第3層カドミニウム汚染土、第4層鉄分堆積土、第5・6層近世造成土、第7・8層野窯埋土、第9層井戸埋土、第10・11層下館基盤土、第12層地山であった。トレント内では、第10・11層下館基盤土及び第12層地山の多くが近世造成土により削平された状況を確認した。部分的に確認した第10～12層の断面で遺構の確認はなかった。また、引き続き実施された1995（平成7）年7月17日以降の工事立会においても、遺構の確認はなかった。

**遺物** 59点出土した。第10層下館基盤土直上で縄文土器2点が出土し、1点図示した。4は直線的に開く口縁の直下から条線を施す。縄文時代中期のものと考えられる。

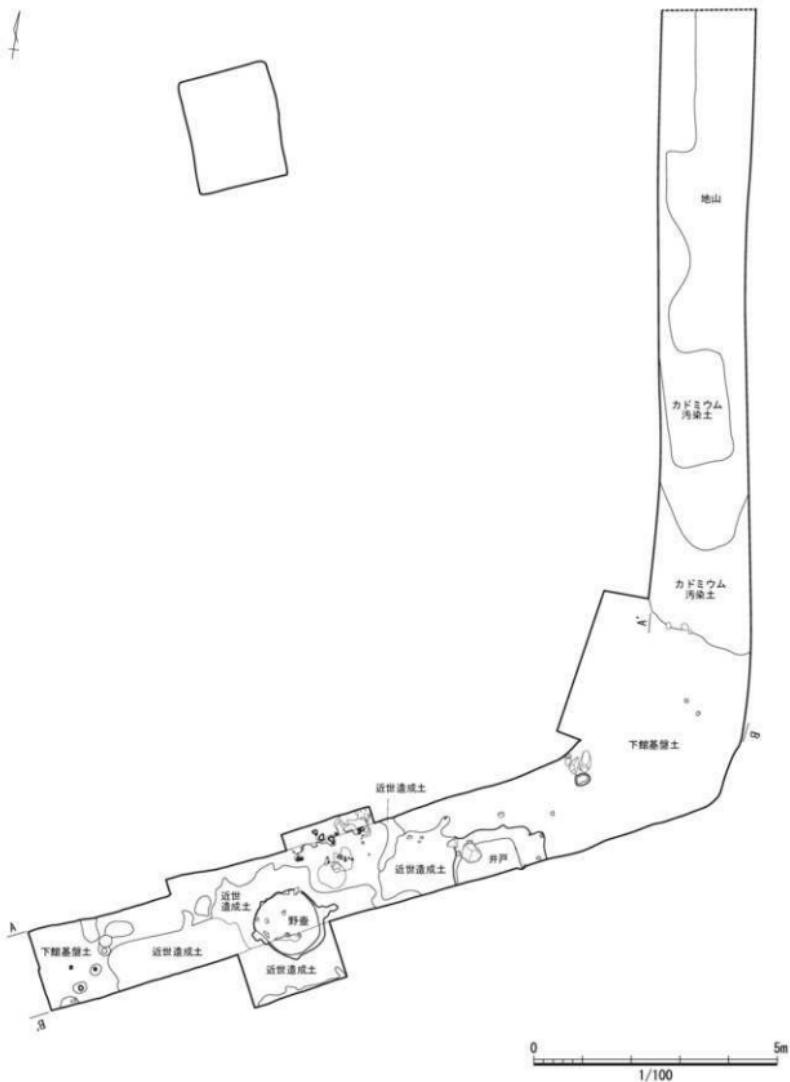
第7・8層野窯埋土からは珠洲焼1点、古銭2点、近代陶磁器3点、合計6点が出土し、珠洲焼1点、古銭2点を図示した。5は珠洲焼甕の胴部破片である。野窯床面直上で出土した。外面には平行叩き痕、内面には当て具痕が残る。6・7は寛永通宝であり、初鑄年は1636年である。

第4層鉄分堆積土からは土師器1点、珠洲焼1点、近世陶器1点が出土し、全て図示した。8は土師器皿である。口縁部に一段のナデを有し、口縁端部がゆるく外反するため、T-2類である。9は珠洲焼甕の口縁部破片である。口縁端部外面が剥離している。10は近世陶器瓶である。外面に黒褐色の鉄釉を施す。

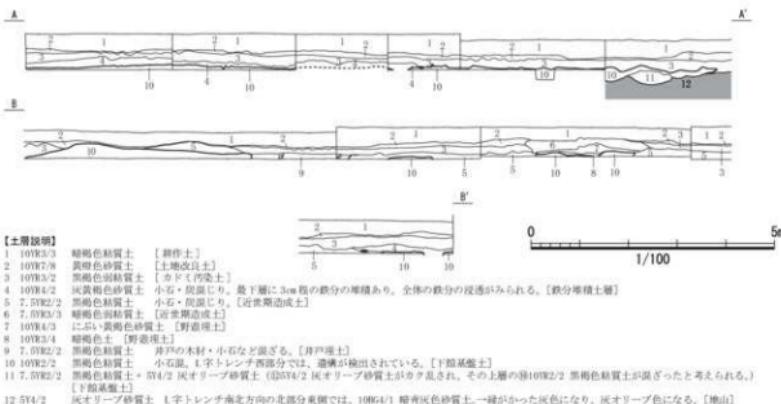
第3層カドミニウム汚染土からは、土師器1点、瀬戸美濃焼1点、山茶碗1点、珠洲焼4点、白磁1点、近世陶器19点、近世磁器6点、近代陶磁器4点、古銭1点、砥石1点、不明陶磁器1点、合計40点が出土し、21点図示した。

11は土師器皿である。内面にナデ調整を施して外面は未調整であるため、T-6類かT-7類である。12は瀬戸美濃焼平碗の体部破片である。内外面にぶい黄色の灰釉を施す。13は山茶碗である。器壁が薄く、口唇部がくびれ、外反気味に開く。内外面にロクロナデ調整痕が残り、内外面にまだら状に自然釉がかかる。胎土は密であり、色調は灰白色を呈する。東濃型第8～9型式のものと考えられる。14・15は珠洲焼である。14はすり鉢である。水平の口縁端面に波状文を施し、断面形状は三角形を呈するため、珠洲V期のものと考えられる。15は甕の口縁部破片である。外面に平行叩き痕、内面に当て具痕が残る。

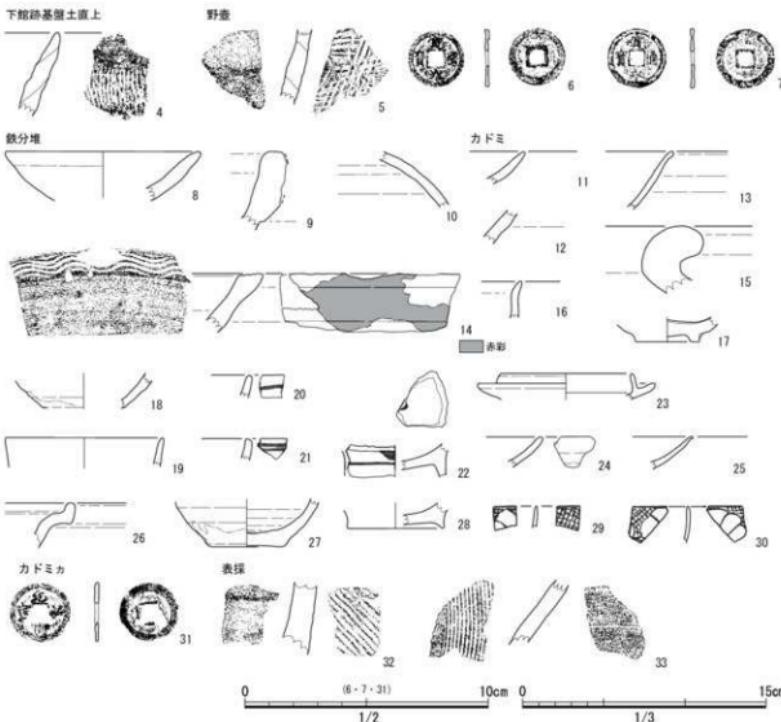
16～22は近世陶器碗である。16～19は灰色系の胎土から瀬戸美濃産と考えられる。16は天目茶碗である。口唇部がくびれ、口縁端部は外反して丸くおさめる。内外面に黒色の鉄釉を施す。17は丸碗の底部破片である。内外面に黒褐色の鉄釉を施す。高台の作りが荒いため、ここでは天目茶碗ではなく丸碗と判断した。18は丸碗の体部破片である。内外面にぶい赤褐色の鉄釉を施す。外面に釉溜りがあり、作りが雑なため天目茶碗ではなく丸碗と判断した。19は内外面に灰釉を施す。口径が10cm未満のため小碗と分類した。20は外面に鉄絵が施される碗である。唐津I期のもので、17世紀前半ごろのものと考えられる。21・22は染付である。陶胎染付であるため、中国産のもの可能性がある。21は染付の発色から漳洲窯のものの可能性も想定される。



第9図 第4地点造構図（1）



第10図 第4地点遺構図(2)



第11図 第4地点出土遺物図

23～25は近世陶器皿である。23は内外面に煤が少し付着し、灯芯を置いた痕跡が残るため、灯明皿と考えられる。瀬戸美濃産である。24は灰白色の灰釉を施した皿である。胎土は密で灰白色を呈することから瀬戸美濃産と考えられる。25は内面に緑灰色の瑠璃釉を施す。唐津焼の可能性がある。

26は近世陶器すり鉢の口縁部片である。一旦水平に折れた後、端部がほぼ直立する。瀬戸美濃産登窯製品である。27は近世陶器壺瓶類の底部破片である。内面にロクロナデの痕跡がよく残り、底部外面に回転糸切り痕が残る。内外面にぶい褐色の鉄釉を施す。内面のロクロナデの残りと全体にかかった施釉から、器種は広口壺か水指の可能性が高いと考えられる。

28～30は近世磁器碗である。28は体部内面の丸みから碗の底部破片と考えたが、高台が厚く、大皿のような器形も想定される。29・30は花弁と格子を施した伊万里焼である。

31は元佑通宝である。初鋤年は1086年である。

第1層耕作土からは近世陶器1点が出土し、現地表でも珠洲焼1点、近世陶器3点、近世磁器1点、不明陶磁器2点、合計7点が出土した。32は珠洲焼甕の破片である。外面には平行叩き痕、内面には当て具痕が残る。33は近世陶器すり鉢である。内外面に鉄釉を施し、内面にすり目を施す。

**所見** 今回の調査対象地では、中世期の生活面が削平を受けている状況を確認した。しかし、中世遺物が確認できたため、中世期には下館にかかる何らかの施設があり、近世以降も宅地等として活用されたことが分かった。

## 6 第5地点（第12図）

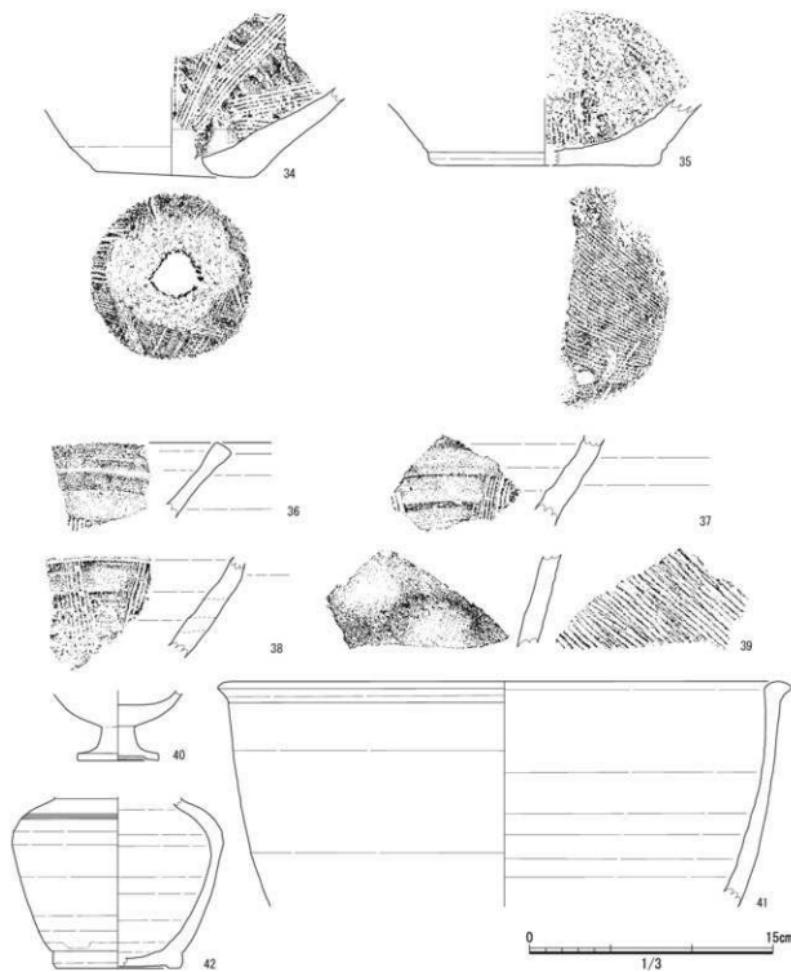
### 調査日 一

**調査対象地とトレーンチ設定** 史跡指定地内の集落北端、下館跡の北東に位置する古刹瑞岸寺において、境内地より採集された遺物の寄贈を受けた。

### 土層と遺構 一

**遺物** 寄贈遺物は珠洲焼6点、近世陶器3点であり、全て図示した。34～39は珠洲焼である。34・35はすり鉢の底部破片である。34は底部に外面からの敲打による穿孔がある。祭祀に関わる行為の可能性がある。36はすり鉢の口縁部破片である。口縁端面が外傾し、断面形が方形を呈する。珠洲IV期のものと考えられる。37・38はすり鉢の体部破片である。39は甕の胴部破片である。外面に平行叩き痕、内面に当て具痕が残る。40～42は近世陶器である。40は小型の高杯である。内外面に明オリーブ灰色の灰釉を施す。41は練鉢である。内外面に灰白色の灰釉を施す。40・41は瀬戸美濃産である。42は壺の胴部から底部の破片である。外面胴部下半にはロクロケズリを施す。外面に明黄褐色の灰釉を施す。

**所見** 今回の調査対象地は、これまでの史料調査により17世紀末には寺院地であったことが判明している。下館から見ると鬼門の位置に位置することから寺院としては中世期までさかのぼる可能性も想定されていた（神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室1997）。今回確認した遺物も、中世から近世にかけてのものであるため、これまでの所見と整合する成果が得られたものと考えられる。



第12図 第5地点出土遺物図

## 7 第6地点（第13・14図）

調査日 2005（平成17）年6月22日

調査対象地とトレンチ設定 史跡指定地内の個人住宅において、宅地拡張計画に伴う切土計画地を調査対象地とし、東西3.5m×南北1mのトレンチを設定した。

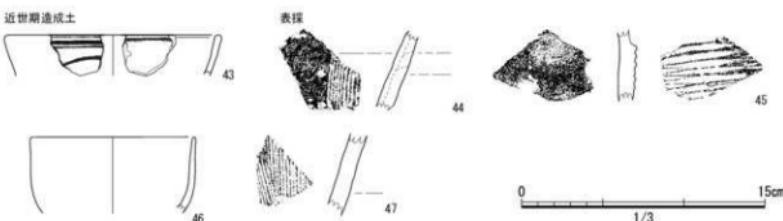
土層と遺構 土層の堆積は、上層より第1層表土、第2層石垣の裏込め土、第3～5層近年の住宅建築に伴う敷地造成土、第6～10層近世期の一帯の造成土であることを確認した。中世遺構の確認はなかった。

遺物 遺物は8点出土した。第4層から近世陶器1点が出土した。43は碗である。陶胎であり内外面に染付を施す。中国漳洲窯のものの可能性がある。他には、第3層から近現代陶器1点、第5層からプラスチック1点が出土した。また、地表面で珠洲焼2点、近世陶器3点を採集し、珠洲焼2点、近世陶器2点を図示した。44・45は珠洲焼である。44はすり鉢の体部破片、45は甕の胴部破片である。46・47は近世陶器である。46は内外面に浅黄色を呈する灰釉を施す碗である。浅黄橙色を呈し、気泡を含む胎土から、瀬戸美濃産登窯製品のものと考えられる。47は内外面に褐灰色を呈する鉄釉を施すすり鉢である。褐灰色を呈し、気泡を含む胎土から、瀬戸美濃産登窯製品と考えられる。

所見 今回の調査対象地は、これまでの史料調査により17世紀末には屋敷地であったことが判明している（神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室1997）。それ以前については、珠洲焼の採集から、館の隣接地として中世期にも生活が営まれた場であったと考えられる。しかし、第6～10層近世期の一帯の造成土を確認したことから、当該地は近世期に中世期の生活面を切り替りしながら造成された可能性が高いと想定された。



第13図 第6地点遺構図



第14図 第6地点出土遺物図

## 8 第7地点（第15・16図）

調査日 2005（平成17）年8月1～4日

**調査対象地とトレント** 史跡指定地内の個人住宅において、建て替え予定地を調査対象地として東西11.5m×南北0.8mの1トレント、切土計画地を調査対象地として東西3m×南北1mの2トレントを設定した。

**土層と遺構** 1トレントでは、上層より第1層畑の耕作土、第2層畑地造成土、第3・4層暗渠溝埋土、第5～8層近世期の敷地造成土を確認した。遺構は、第5層から掘り込む近世期以降の暗渠溝1条を確認した。2トレントでは、上層より第1層石垣の裏込め土、第2層畑の耕作土、第3層畑地造成土、第4・5層近世期の敷地造成土を確認した。遺構の確認はなかった。

これらの調査成果を受けて、同年8月26・27日に工事立会を実施し、掘削は近世期の敷地造成土までおさまることを確認した。

**遺物** 1トレントでは、第6層近世期の敷地造成土から縄文土器1点が出土した。48は縄文土器の口縁部破片である。口縁直下に沈線により工字状文を施し、口唇部に縄文を施す。縄文時代中期後葉のものと考えられる。第5層近世期の敷地造成土から近世陶器1点が出土した。第4層暗渠溝埋土からは近世陶器1点が出土した。第1・2層の畑地にわたる土層より、土師器11点、瀬戸美濃焼2点、青磁1点、珠洲焼1点、近世陶磁器10点が出土し、土師器5点、瀬戸美濃焼2点、青磁1点、近世陶器4点を図示した。

49～53は土師器皿である。49は内面に不定方向のナデ調整を施すが外面未調整であるため、T-6類と考えられる。内外面の口縁部周辺に煤が付着し、灯明皿として使用されたと考えられる。50～52は内面にナデ調整を施すが外面未調整であり、T-6類かT-7類と考えられる。53は内外面口クロナデ調整を施し、口縁部が強く外反するため、R-3類と考えられる。内外面に煤が付着し、灯明皿として使用されたと考えられる。

54・55は瀬戸美濃焼である。54は折縁皿である。外反する口縁を折り返して小突起を作出し、口縁上面にはわずかに凹む。内外面に灰釉を施すが二次被熱により光沢が失われ、浅黄色を呈する。古瀬戸後III～IV期のものと考えられる。55は直線的に開き、内面にロクロナデが見られないため直線大皿の口縁部破片と考えた。内外面に浅黄色の灰釉を施す。

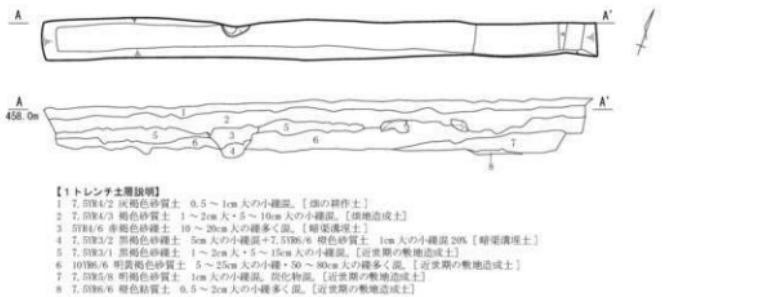
56は青磁碗である。口縁部はゆるく内湾し、端部を丸く仕上げる。龍泉窯系E類のものと考えられる。

57～60は近世陶器であり、いざれも気泡を含む胎土から瀬戸美濃焼と考えられる。57は丸碗である。直線的に立ち上がる口縁部破片であり、端部を丸く仕上げる。内外面に灰褐色の鉄釉を施す。58は皿の口縁部破片である。口縁部が緩く外反する。内外面に灰白色の灰釉を施す。59・60はすり鉢である。59は口縁端部が丸く仕上げられ、内側に突帯状に折り返される。60は口縁部の折り返しが外側であり、美濃焼の可能性がある。

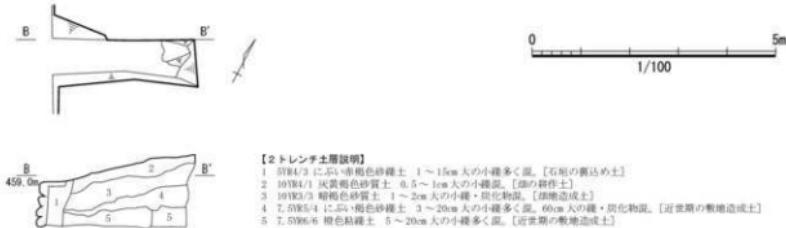
2トレントでは、第5層から近世陶器2点が出土した。第3層からは土師器2点が出土し、1点図示した。61は土師器皿である。内面に不定方向のナデ調整を施すが外面未調整であるためT-6類と考えられる。また、地表面で土師器1点を採集した。

工事立会では土師器20点、瀬戸美濃焼7点、近世陶器18点、近世磁器7点が出土し、土師器3点、瀬戸美濃焼3点、近世陶器3点を図示した。

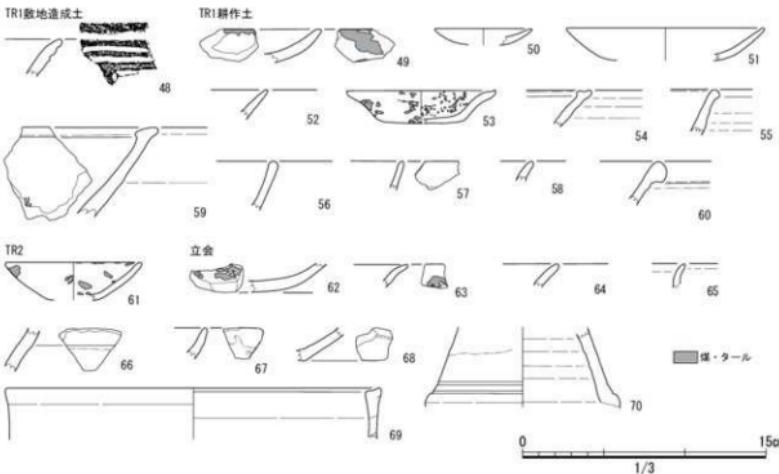
## 1 トレンチ



## 2 トレンチ



第15図 第7地点遺構図



第16図 第7地点出土遺物図

62～64は土師器皿である。62は内面にナデ調整を施すが外面未調整のため、T-6類かT-7類と考えられる。63は口縁部片であり、強く外反するためT-8類と考えられる。62は内面に、63は外面に煤が付着するため、灯明皿として使用されたと考えられる。64は口縁部片である。内外面にロクロナデ調整を施し、口縁端部外面に面取り風にヘラ調整が施されるため、R-2類と考えられる。

65～67は瀬戸美濃焼である。65は口径が小さい小天目である。口縁端部が外反する。内外面に黒色の鉄釉を施す。古瀬戸後期のものと考えられる。66は平碗の体部破片である。内外面に灰釉を施し、体部外面下半は露体である。67は丸皿の口縁部片である。内外面に灰釉を施し外面下半は露体である。

68～70は近世陶器である。68は碗の体部破片である。天目茶碗か丸碗と想定される。69は口縁端面が内傾し、やや凹む。体部は直立する。内外面に灰釉を施す。器形から筒形香炉の可能性が高いと考えられる。70は花瓶か燭台の脚部破片である。外面上半に灰釉を施し、下半と内面は露体である。いずれも胎土から瀬戸美濃産と考えられる。

**所見** 今回の調査対象地は、これまでの史料調査により17世紀末には屋敷地であったことが判明している（神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室1997）。それ以前については、土師器・青磁・瀬戸美濃焼・珠洲焼などの出土遺物から、館の隣接地として中世期にも生活が営まれた場であったと考えられる。しかし、2トレーナー第5層敷地造成土で近世陶器を確認したことから、当該地は近世期に中世期の生活面を切り盛りしながら造成された可能性が高いと想定された。

## 9 第8地点（第17・18図）

**調査日** 2000（平成12）年5月29日～6月1日

**調査対象地とトレーナー設定** 史跡指定地内の個人住宅において、増築予定地を調査対象地として東西15m×南北0.8mのトレーナーを設定した。調査対象地は下館跡の最奥部に位置する。

**土層と遺構** 土層の堆積は、上層より第1層住宅建て替えに伴う造成土、第2層住宅建て替え時に散乱した炭化物層、第3・4層前住宅の便槽抜き取り穴埋め戻し土、第5層上水道管理設時の掘り込み埋土、第6層柱穴埋土、第7～9層近世初めの宅地造成時の整地土層、第10～12層中世期の整地造成土、第13層山土の堆積、第14層山の岩盤であった。

遺構は、第12層中に南北に並ぶ疊2石を確認した。その西側にすぐ上層の第11層中に礫が散乱しており、石積みとして並んでいたものと考えられた。その約1.5m東側では第13層地山が第12層に大きく掘り込まれており、この間が堀か溝であった可能性が想定された。

ここまで確認した段階で、さらにその北側に東西5m×南北最大3mの範囲を拡張して第9層近世初めの宅地造成時の整地土層上面で検出作業を行い、便槽の抜き取り坑など、近世以降の住宅に伴う遺構を確認した。

**遺物** 第12層から土師器4点が出土し、2点図示した。71・72は土師器皿である。ともに内面にナデ調整を施すものの外面未調整であり、T-6類かT-7類と考えられる。

第11層から土師器1点、第10層から土師器1点が出土した。

第9層から土師器7点、瓦器2点、近世白磁1点が出土し、土師器3点、瓦器2点を図示した。73～75は土師器皿である。73・74は内面にナデ調整を施し、外面未調整であるため、T-6類かT-7類と考えられる。75は口縁部に横ナデを施し、端部を上方につまみ上げるため、T-2類と考えられる。76・77は瓦器の火鉢である。

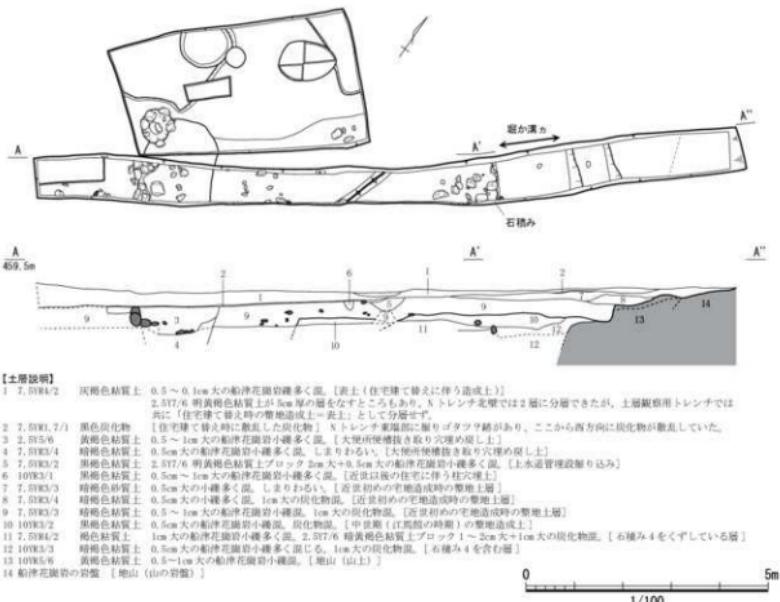
第6層から瀬戸美濃焼1点が出土した。78は天目茶碗である。口縁部がくびれ、端部は外反して丸く仕上げる。内外面に暗赤褐色の鉄釉を施す。器形から大窯第4段階のものと考えられる。

第4層から近世陶器1点が出土した。79は染付碗である。陶胎染付のため、中国漳州窯のもの可能性がある。

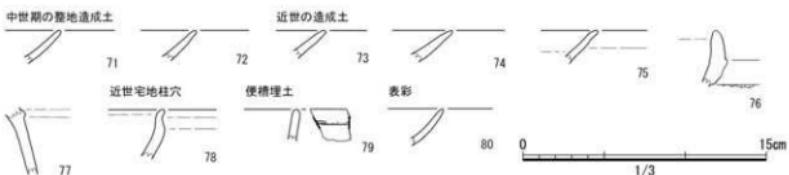
第3層から伊万里1点、近現代陶磁器2点が、第1層から伊万里1点が出土した。

地表面で土師器1点を採集した。80は土師器皿である。内面にナデ調整を施すものの、外面未調整であり、T-6類かT-7類と考えられる。

**所見** 調査対象地に南接する畠地では、3列の石積み遺構を確認している。この石積みは、南への延長が南堀新堀につながるため、東側（山側）にも堤とそれに伴う土塁等の存在が想定されていた（神岡町教育委員会 1979）。今回の調査では、第10層より下層では中世遺物しか出土しなかったため、



第17図 第8地点遺構図



第18図 第8地点出土遺物図

第10～12層を中世期の造成土と考えた。しかし、その存在を想定していた石積みは1列しか確認できなかった。今回調査の石積みについては検出レベルが458.0～458.3mであり、1978年調査での検出レベル457.5mと比べると0.5m以上のレベル差がある。このため同一造構と断定することはできなかった。

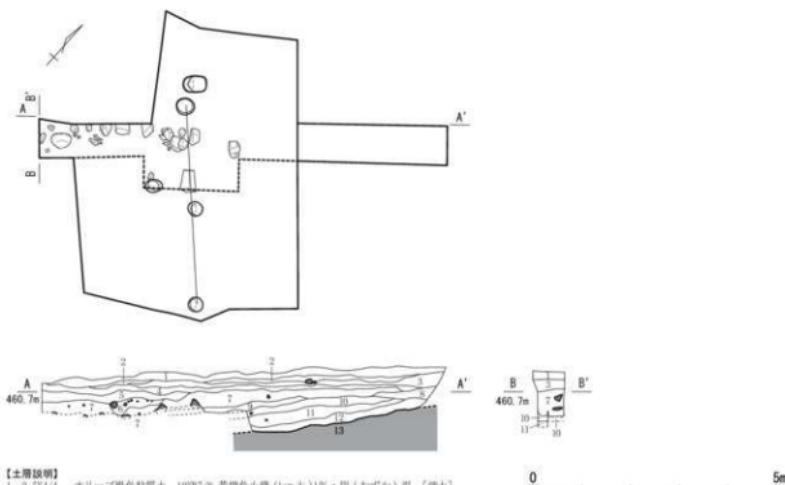
## 10 第9地点（第19・20図）

調査日 1998（平成10）年3月16～19日

調査対象地とトレンチ設定 史跡指定地内の個人住宅において、駐車場予定地を調査対象地として、東西8m×南北0.7mのトレンチを設定し、一部南北に0.6m拡幅した。調査対象地は東側が山であり、西に向かって緩やかに傾斜する緩斜面を平坦にして現状畠地となっている。

土層と造構 土層の堆積は、上層より第1・2層畑の耕作土、第3・4層旧耕作土、第5～10層は近現代の敷地造成土、第11・12層は無遺物の堆積土層、第13層が地山である。第9層で礫の散布が認められたが、第13層上面で造構の確認はなかった。

ここまで確認した段階で、東西4.5m×南北5.5mの範囲を第9層近現代の敷地造成土上面で拡張した。当初のトレンチで検出した礫群の広がりは認められなかった。新たに柱穴5基を確認し、そのうち3基は1.8m間隔で並ぶ。



### 【土層説明】

1. 2. SY4/4 オリーブ褐色粘質土。10cm×8cm 黄褐色小礫(1cm大)1%。炭(わげか)混。【耕土】
2. SY4/5 黄褐色粘質土。0.3～5cmの小礫。【耕土】
3. SY4/3 黒褐色粘質土。0.5～3cmの小礫。【耕作土】
4. 10YR4/3 黒褐色粘質土。0.5～1cm 大の小礫多く混。【耕作土】
5. 7. SY4/3 黒褐色粘質土。0.5～0.8cm 大の小礫混。【近現代の敷地造成土】
6. 7. SY4/3/2 黒褐色砂質土。10～15cm 大の礫混。【近現代の敷地造成土】
7. 7. SY4/3/4 緑褐色粘質土。10～30cm 大の礫。0.7～1cm 大の小礫多く混。【近現代の敷地造成土】
8. 10YR4/3 にいわ 黄褐色粘質土。【近現代の敷地造成土】
9. 10YR5/6 黄褐色粘質土。0.5～1cm 大の小礫混。【近現代の敷地造成土】
10. 10YR5/5 黄褐色粘質土。5cm×5cmの小礫多く混。【近現代の敷地造成土】
11. 10YR5/5 黄褐色粘質土。10cm×10cm 明黄色砂 10% (ヒカリシラバロック块に入る) 10cm 大の礫混。【堆積土】
12. 2. SY4/2/1 半黒色粘質土。1cm 大の小礫・0.5cm 大の礫混。【堆積土】
13. 10YR2/6 明黄色褐色砂質土。砂に近い。粒が大きく(0.3～0.5cm大) ダラダラ・ガサガサしている。【地山】

第19図 第9地点造構図

**遺物** 第10層からアルミ片、第7層から打製石斧3点とタイル片、第3層から瀬戸美濃焼、第1～3層のうちから近現代陶磁器とビニール片が出土し、打製石斧3点と瀬戸美濃焼1点を図示した。81～83は打製石斧である。81は裏面に自然面が残る。82は刃部に線状痕がよく残る。83は刃部と基部に欠損がある。84は瀬戸美濃焼すり鉢の口縁部破片である。口縁が上方に延び端部を丸く仕上げる。内外面に鋸歯を施す。器形から大窯第1段階のものと考えられる。

**所見** 当該地には数十年前まで炭焼き窯があったとのことで、礫群及び柱穴は近現代の炭焼き窯に伴うものと考えられた。

### 11 第10地点（第21図）

調査日 2007（平成19）年4月25～27日

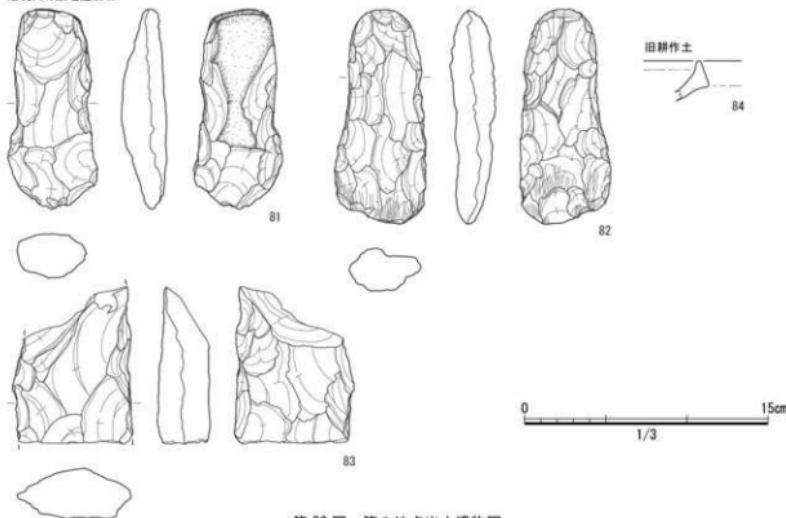
**調査対象地とトレーニング設定** 史跡指定地に隣接する江馬氏殿遺跡内の水田において、建物新築に伴う工事予定地を調査対象地として、東西40m×南北1mのトレーニングを設定した。

**土層と遺構** 土層の堆積は、上層より第1層耕作土、第2層埋立土、第3・4層旧耕作土、第5層敷地造成土、第6層遺構（SX）埋土、第7層遺構（土坑）埋土、第8層下館基盤土、第9層遺構（柱穴）埋土、第10層地山であった。遺構は、柱穴9基、土坑3基、不明遺構2基を確認した。第8層から掘り込む遺構と、第10層から掘り込む遺構があり、前者が中世期、後者がそれ以前のものと考えられた。第8層下館基盤土は、トレーニング東側では耕地造成時に削平を受けている状況を確認した。

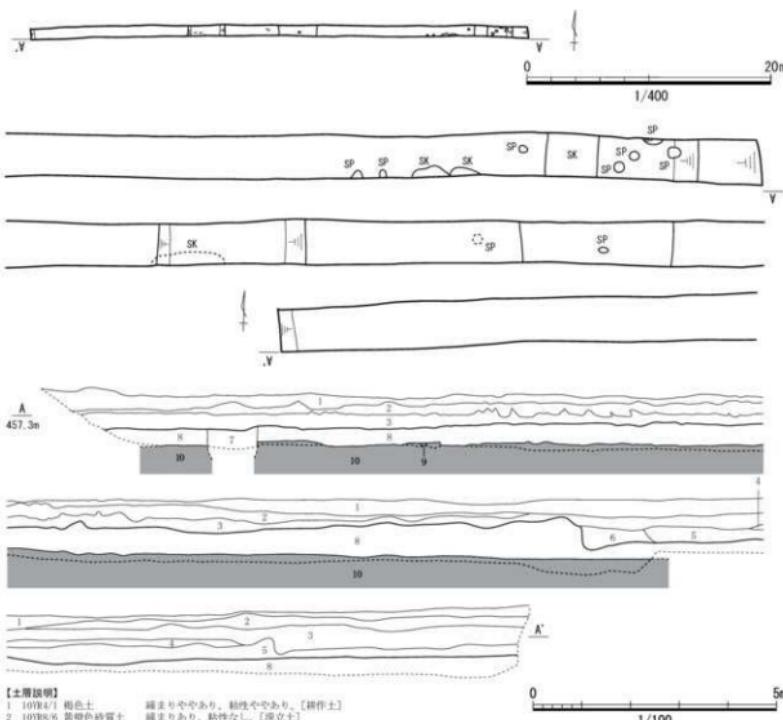
**遺物** 遺物の出土はなかった。

**所見** 今回の調査対象地は下館跡に南接し、中世遺構を確認したことから、館の隣接地として中世期に生活の営みがあったものと考えられる。

近現代の敷地造成土



第20図 第9地点出土遺物図



第21図 第10地点遺構図

## 12 第11地点（第22・23図）

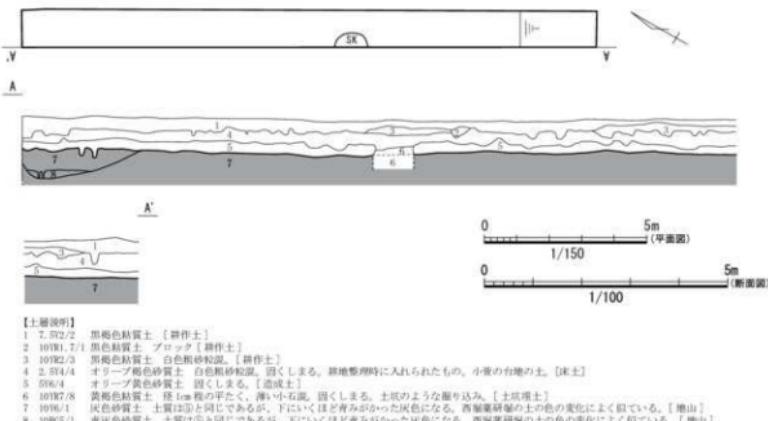
調査日 1995（平成7）年11月6～10日

調査対象地とトレーンチ設定 調査対象地は、史跡指定地に南接する畠地である。調査対象地に南北17m×東西1mのトレーンチを設定した。

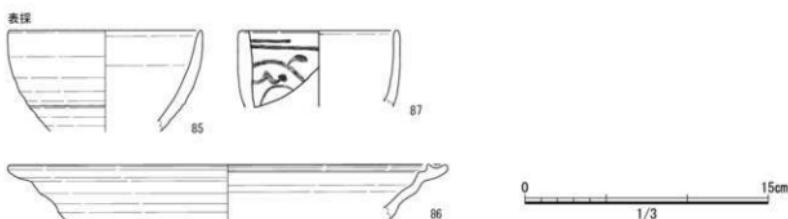
土層と遺構 土層の堆積は、上層より第1～3層耕作土、第4層床土、第5層造成土、第6層土坑埋土、第7・8層地山であった。

遺構は第5層から掘り込む土坑1基を確認したが、時期は不明である。

遺物 遺物は出土しなかったが、当該地でかつて採集された遺物3点の借用を受けた。85は瀬戸美濃焼の天目茶碗である。体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部は直立し、端部が尖る。内外面に鉄釉を施す。器形から古瀬戸後I期のものと考えられる。86は瀬戸美濃焼折縁深皿である。口縁部を外折して内側に折り返し、端面中央よりやや内側に小突起を設ける。内外面に灰釉を施すが、二次被熱



第22図 第11地点遺構図



第23図 第11地点出土遺物図

により光沢を失っている。器形より古瀬戸後III期のものと考えられる。87は近世陶器碗である。外面に鉄絵を施す。

**所見** 今回の調査対象地は下館跡に南接し、中世遺物が採集されていることから、館の隣接地として中世期に生活の営みがあったものと考えられる。

### 13 第12地点（第24・25図）

調査日 2003（平成15）年12月1～4日

**調査対象地とトレーンチ設定** 史跡指定地内の個人住宅に南接する畠地である。切土計画地を調査対象地として、東西11m×南北2mのトレーンチを設定した。

**土層と遺構** 土層の堆積は、上層より第1層畠の耕作土、第2層斜面の表土、第3・4層は敷地西端の石積みの裏込め土、第5層は石積みに伴う造成土、第6・7層は敷地造成土、第8～10層は山土の堆積土層であった。第6層からナイロンビニールが出土し、一帯は近現代期に造成されたものと判断された。第8層上面において検出作業を行ったが、遺構の確認はなかった。

**遺物** 第7層から不明遺物1点が出土した。第6層からは土師器8点、瀬戸美濃焼6点、瓦器1点、

近世陶器5点、近現代遺物3点が出土し、土師器5点、瀬戸美濃焼5点、近世陶器1点を図示した。

88～92は土師器皿である。88は内面に不定方向のナデ調整を施すが外面未調整であるため、T-6類と考えられる。89・90は内面にナデ調整を施すが外面未調整のため、T-6類かT-7類と考えられる。88・89は内外面に煤が付着し、灯明皿として使用したと考えられる。91は口縁部を横ナデにより強く外反させる。T-8類と考えられる。92は口縁部に一段の横ナデを施す。T-5類と考えられる。

93～97は瀬戸美濃焼である。93・94は天目茶碗である。93は体部が直線的に立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。古瀬戸後IV期のものと考えられる。94は口縁部がやや外反する。古瀬戸後IV期のものと考えられる。95・96は平碗である。95は口縁部が短くくびれ、古瀬戸後III～IV期のものと考えられる。96は口縁部が外反する。97は御皿である。口縁内面に小突起を有し、体部内面に御目を持つ。98は近世陶器碗である。内外面に灰白色の灰釉を施す。

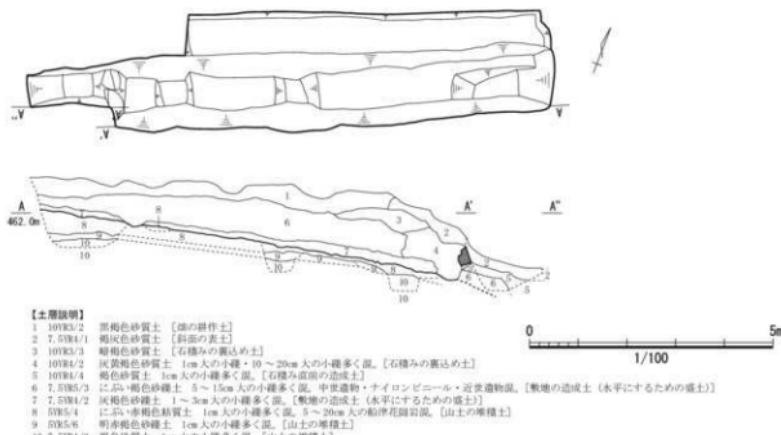
第2層からは瀬戸美濃焼1点、珠洲焼1点が出土した。第1層からは近世陶磁器1点が出土した。また、地表面で土師器7点、瀬戸美濃焼2点、珠洲焼1点、近世陶磁器15点、不明遺物2点を採集し、土師器3点、瀬戸美濃焼1点、珠洲焼1点を図示した。

99～101は土師器皿である。99は口縁部に一段の横ナデを施し、T-2類と考えられる。100・101は内面にナデ調整を施すが外面未調整のため、T-6類かT-7類と考えられる。

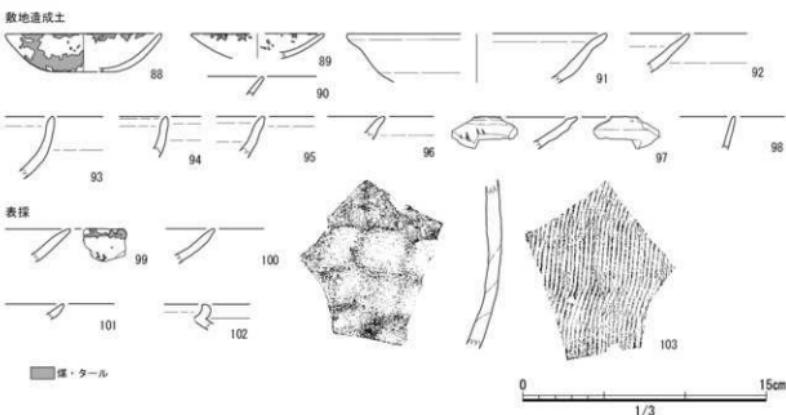
102は瀬戸美濃焼の香炉と考えられる口縁部片である。頭部がくびれ、口縁部が外反する。口縁内面はナデにより回む。ここでは器形より香炉とした。

103は珠洲焼甕の胴部破片である。外面には平行叩き痕、内面には当て具痕が残る。

**所見** 今回の調査対象地では、敷地を平坦に造成するために山側（東側）の土を切って造成した土層第6・7層が認められた。そこから中世遺物が出土したため、中世期の生活の中心は、今回の調査地より東側（山側）と考えられる。



第24図 第12地点遺構図



第25図 第12地点出土遺物図

## 14 第13地点（第26図）

調査日 1998（平成10）年9月17日

**調査対象地とトレンチ設定** 史跡指定地内の個人住宅において、建て替え予定地を調査対象地として、東西4m×南北0.8mの1トレンチ、南北4m×東西0.8mの2トレンチ、東西5m×南北0.8mの3トレンチを設定した。調査対象地は現状畠地であるが、以前は宅地と水田であった。

**土層と遺構** 1トレンチの土層堆積は、上層より第1・2層現耕作土、第3層土地改良土、第4～8層旧耕作土、第9層石積みの裏込め土、第10層下館基盤土、第11層地山であった。第9層で確認した石積みは、かつての宅地と水田との間にあったもので、畠地にする際に埋められたものであった。第10・11層において遺構の確認はなかった。

2トレンチの土層堆積は、上層より第1層現耕作土、第2層土地改良土、第3層旧耕作土、第4層下館基盤土、第5層地山であった。第4・5層の平断面で遺構の確認はなかった。

3トレンチの土層堆積は、上層より第1層現耕作土、第2層土地改良土、第3層旧耕作土、第4層土坑埋土、第5層旧耕作土、第6層下館基盤土、第7層地山であった。第4層の土坑は土地改良前の農作業に伴うものと考えられる。第6・7層での遺構の確認はなかった。

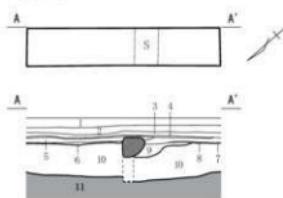
**遺物** 1トレンチで第7層から近現代磁器1点が出土した。2・3トレンチでは遺物の確認はなかった。  
**所見** いずれのトレンチでも下館基盤土及び地山において中世遺構は確認できなかった。また中世遺物の出土もなかった。1トレンチでは第10層下館基盤土を掘り込んで石積みを確認していることもあり、中世期の生活面は削平により失われている可能性が高いと考えられた。

## 15 第14地点（第27図）

調査日 1995（平成7）年7月7日

**調査対象地とトレンチ設定** 調査対象地は、下館跡西側の段丘崖下である。建物建設に伴う工事立会を実施した。

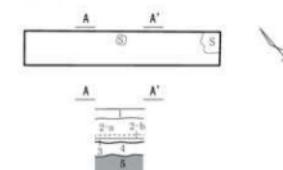
## 1トレンチ



## 【1トレンチ土層説明】

- 1 10YR4/4 黒褐色粘質土。【現耕作土】
- 2 2. 5YR4/7 明黄褐色粘土。【現耕作土】
- 3 2. 5Y7/8 黄色砂質土。【土地改良土】
- 4 2. 5Y7/1 黑褐色粘質土。【現耕作土】
- 5 淩5/6 黄オリーブ色粘質土。小礫・黄色粒多く混。最下層に鉄分堆積。【旧耕作土】
- 6 10YR8/2 明褐色粘土。【現耕作土の堆積】
- 7 10YR8/3 黑褐色粘質土。【旧耕作土】
- 8 10YR8/2 黑褐色粘質土。【鉄分堆積】
- 9 10YR2/2 黑褐色粘質土。10YR4/2(灰)黄色砂質土ブロック5cm大・小礫多く混。【石積み造成時の盛り込みと埋め土】
- 10 5YR2/1 黑褐色粘質土。白色粒。10YR2/3 黑褐色砂質土ブロック西端部下面にのみあり。【下館基盤土】
- 11 淩5/3 黄オリーブ砂質土。白色粒混。【地山】

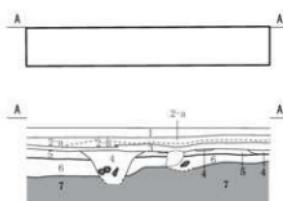
## 2トレンチ



## 【2トレンチ土層説明】

- 1 10YR3/2 黑褐色砂質土。灰・小礫混。【現耕作土】
- 2a 10YR8/8 灰褐色砂質土。【土地改良土】
- 2b 10YR8/8 黄褐色砂質土。【土地改良土】
- 3 10YR3/3 錆褐色砂質土。小礫混。幾々層に鉄分堆積(所々)。【旧耕作土】
- 4 10YR2/2 黑褐色粘質土。白色粒・1cmの大・小礫混。【下館基盤土】
- 5 5Y5/3 黄オリーブ砂質土。白色粒混。【地山】

## 3トレンチ



## 【3トレンチ土層説明】

- 1 10YR4/4 黒褐色粘質土。【現耕作土】
- 2a 10YR6/8 明黄褐色粘土。【土地改良土】
- 2b 10YR8/8 黄褐色砂質土。【土地改良土】
- 3 10YR3/3 錆褐色砂質土。小礫混。幾々層に鉄分堆積(所々)。【旧耕作土】
- 4 5Y6/4 オリーブ黄色砂質土。10Y6/2(灰)オリーブ色砂質土。(地盤) 土塊内でブロックになっている。種と共に入っている。【上地盤】
- 5 5YR2/2 黑褐色粘質土。T.5YR 黃褐色砂質土ブロック・小礫・鉄分混。【旧耕作土】
- 6 10YR2/2 黑褐色粘質土。白色粒・小礫混。【下館基盤土】
- 7 5Y5/3 黄オリーブ砂質土。白色粘土。【地山】

0 5m  
1/100

第26図 第13地点遺構図



0 15cm  
1/3

第27図 第14地点出土遺物図

**土層と遺構** 遺構の確認はなかったものの、下館跡でも見られる黒褐色土と同質のものを確認した。

**遺物** 土師器皿1点が出土した。104は土師器皿である。内面に不定方向のナデを施すが外側未調整のため、T-6類と考えられる。内外面に煤が付着し、灯明皿として使用されたと考えられる。

**所見** 遺構の確認がなく、異なる段丘となるため、当該地は江馬氏殿遺跡の範囲外と考えられる。

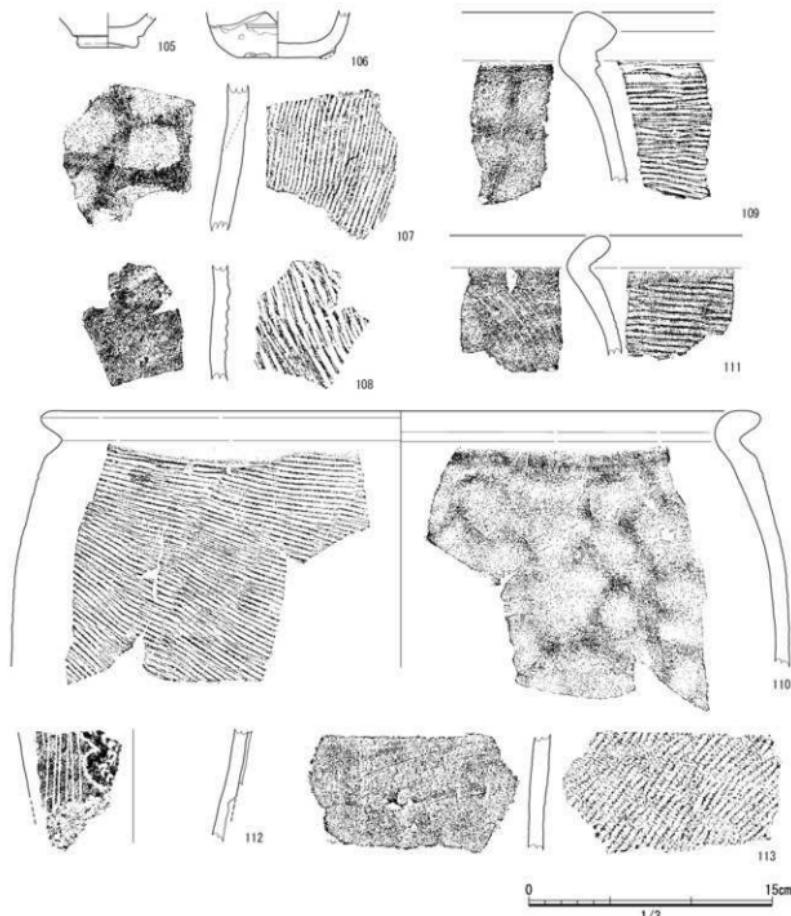
## 16 第15地点（第28～30図）

調査日 —

調査対象地とトレンチ設定 —

**土層と遺構** 下館跡において、かつて耕作地であった際に採集された資料を、2名の方から寄贈された。下館跡を考える上で重要な資料と考え、ここで紹介したい。

**遺物** 遺物は、一人の方は縄文土器4点、打製石斧20点、珠洲焼10点、瀬戸美濃焼2点、近世陶器2点であった。もう一人の方は、打製石斧2点、瀬戸美濃焼1点、珠洲焼17点、八尾焼1点、近世陶磁器2点であった。



第28図 第15地点出土遺物図（1）

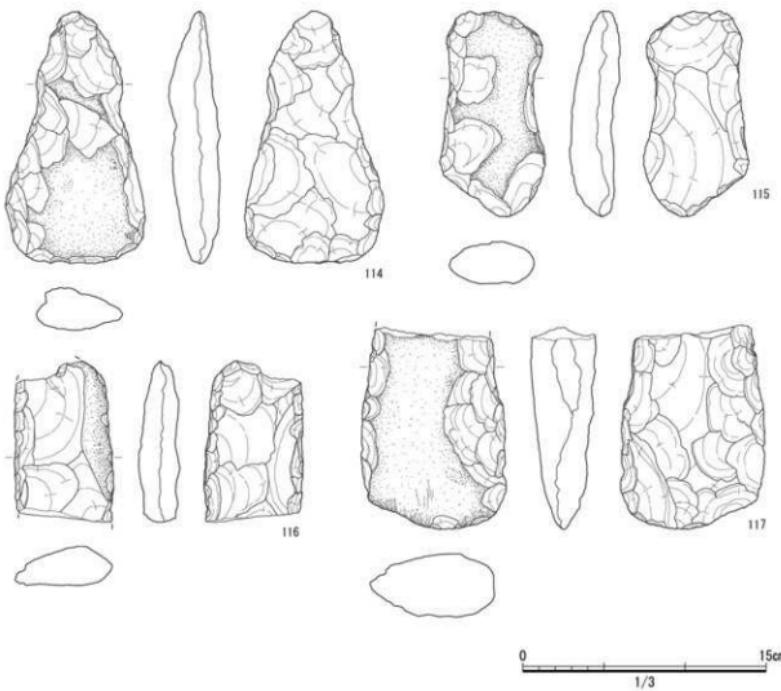
105・106は瀬戸美濃焼である。105は天目茶碗の底部破片である。内面に黒褐色の鉄釉を施す。106は壺瓶類の底部破片である。外面に灰釉を施す。

107～111は珠洲焼甕である。107・108は胴部破片であり、外面には平行叩き痕が残る。109～111は口縁部片である。109は口縁部が短く「く」の字状に屈曲し、端部断面は四角形を呈する。珠洲IV期のものと考えられる。110・111は口縁部が短く「く」の字状に屈曲し、端部が丸みを持つ。珠洲III期のものと考えられる。

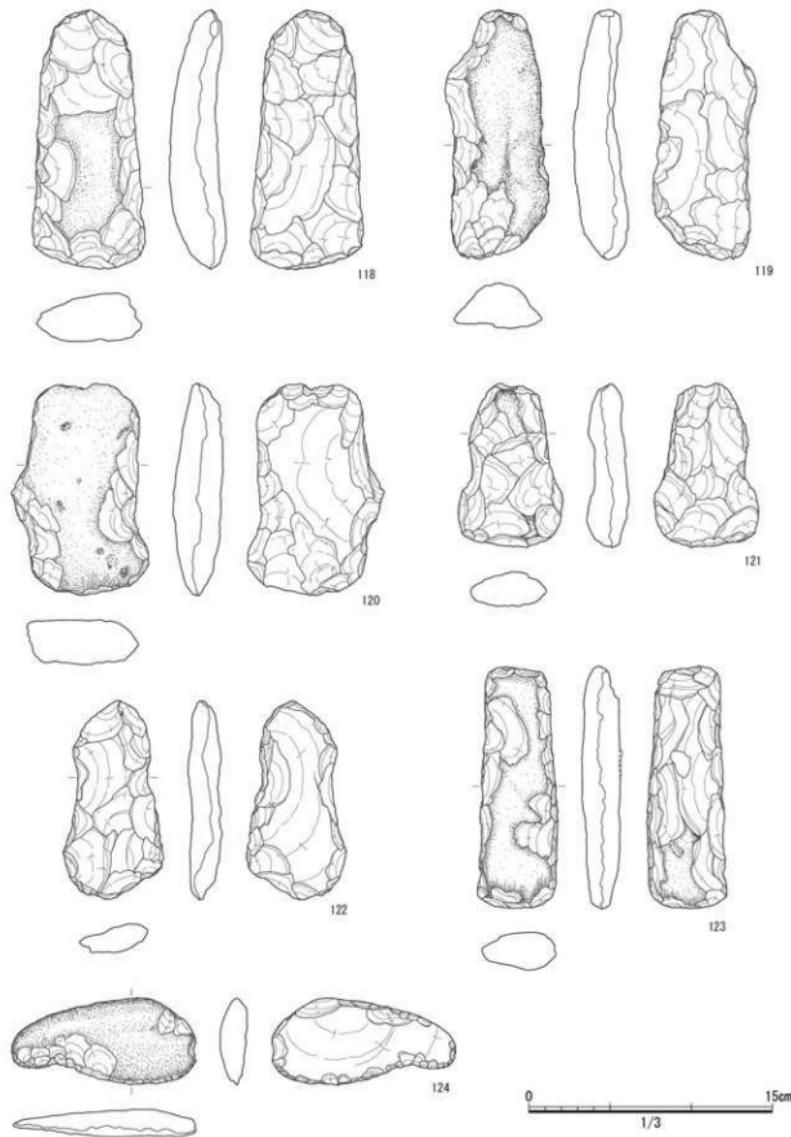
112・113は縄文土器である。112は波状隆帯に沿って半截竹管状工具による刺突を施す。地文条線である。縄文時代中期のものと考えられる。113は地文を縄文L Rとする。

114～123は打製石斧、124は横刃形石器である。

**所見** 遺物には、縄文時代、中世、近世のものが含まれる。下館跡には断続的に人々の生活が営まれていたものと考えられる。



第29図 第15地点出土遺物図（2）



第30図 第15地点出土遺物図（3）

第4表 建物建設に伴う試掘確認調査土器・陶磁器一覧表（1）

造物 番号	地 点 名	層位	種類	分類	部位	法量 (cm、括弧内は推定)			色調			備考(成形・文様等)	種 別	固 定
						口径	底径	器高	内面	外面	断面			
1 3	旧耕作土	廻戸美濃	天日茶碗	口縁部	(11.0)	—	—	褐色	灰白色	灰白色	灰白色	内秀出鉢輪 大葉文4段階	7 -	-
2 3	旧耕作土	廻戸美濃	瓶	体部	—	—	—	灰白色 2.5V7/1	灰白色 2.5V5/4	灰黄色 2.5V7/2	灰黄色 2.5V5/4	外面部鉢輪 内外面クロナデ	7 -	-
3 2	耕作土	近世陶器	すり鉢	体部	—	—	—	赤褐色 2.5V7/2	赤褐色 2.5V7/2	赤褐色 2.5V7/2	赤褐色 2.5V7/2	内面に墨を一單位とする寸り目	7 -	-
4 4	下部堅基 盤上部上	圓文土器	深鉢	口縁部	—	—	—	浅黄褐色 7.5V6/6	浅黄褐色 7.5V6/6	浅黄褐色 7.5V6/6	浅黄褐色 7.5V6/6	外面部鏡面下に無文帶。その下に柔麗	11 -	-
5 4	野邊	珠洲	便	胴部	—	—	—	灰色 5V7/1	灰色 5V7/1	灰色 5V7/1	灰色 5V7/1	外面部打叩き目 内面にて其概	11 -	-
6 4	段分堆	土師器	瓶	口縁～ 体部	(12.0)	—	—	灰白色 7.5V8/2	灰白色 10V8/2	灰白色 7.5V8/2	灰白色 7.5V8/2	内外面ナデ T-2型	11 7	-
7 4	段分堆	珠洲	便	胴部	—	—	—	灰色 5V7/1	灰色 5V7/1	灰色 5V7/1	灰色 5V7/1	外面部欠損	11 -	-
8 4	段分堆	近世陶器	瓶	胴部	—	—	—	灰色 5V6/1	灰色 7.5V6/2	灰色 5V6/1	灰色 5V6/1	内外面クロナデ	11 -	-
9 4	カドミ	土師器	瓶	口縁部	—	—	—	浅黄褐色 10V8/3	浅黄褐色 10V8/3	浅黄褐色 10V8/3	浅黄褐色 10V8/3	内面ナデ、外面部調整 T-6.7型	11 -	-
10 4	カドミ	廻戸美濃	平皿	体部	—	—	—	灰白色 2.5V6/3	灰白色 2.5V6/3	灰白色 2.5V6/3	灰白色 2.5V6/3	内外面鉢輪、質入	11 -	-
11 4	カドミ	山茶園	瓶	口縁部	—	—	—	灰白色 BY5/2	灰白色 BY5/2	灰白色 BY5/2	灰白色 BY5/2	内外面自然釉付着、束型盤8-9型式	11 7	-
12 4	カドミ	珠洲	すり鉢	口縁部	—	—	—	黄褐色 2.5V6/1	黄褐色 2.5V6/1	黄褐色 2.5V6/1	黄褐色 2.5V6/1	外面部彩绘	11 -	-
13 4	カドミ	珠洲	便	胴部	—	—	—	灰色 5V6/1	灰色 5V6/1	灰色 5V6/1	灰色 5V6/1	口唇部に波状文、Y型	11 7	-
14 4	カドミ	珠洲	便	口縁部	—	—	—	灰色 5V6/1	灰色 10V7/1	灰色 10V7/1	灰色 10V7/1	強く外反	11 7	-
15 4	カドミ	近世陶器	天日茶碗	口縁部	—	—	—	黑色 5V2/1	黑色 5V2/1	黑色 5V2/1	黑色 5V2/1	内秀出鉢輪 廻戸美濃産	11 -	-
16 4	カドミ	近世陶器	丸瓶	底部	—	(4.0)	—	黑褐色 10V2/3	黑褐色 10V2/3	黑褐色 10V2/3	黑褐色 10V2/3	内秀出鉢輪 廻戸美濃産	11 -	-
17 4	カドミ	近世陶器	丸瓶	体部	—	—	—	品目不明 5V6/3	品目不明 5V6/3	品目不明 5V6/3	品目不明 5V6/3	内秀出鉢輪 廻戸美濃産	11 -	-
18 4	カドミ	近世陶器	丸瓶	底部	—	—	—	品目不明 5V6/2	品目不明 5V6/2	品目不明 5V6/2	品目不明 5V6/2	内秀出鉢輪 廻戸美濃産	11 -	-
19 4	カドミ	近世陶器	小瓶	口縁部	(9.0)	—	—	灰白色 5V7/1	灰白色 5V7/1	灰白色 5V7/1	灰白色 5V7/1	内秀出鉢輪、質入 廻戸美濃産	11 -	-
20 4	カドミ	近世陶器	瓶	口縁部	—	—	—	暗黄褐色 2.5V5/2	暗黄褐色 2.5V5/2	暗黄褐色 2.5V5/2	暗黄褐色 2.5V5/2	外面部鉢輪、質入 鐘形、17e前半頃	11 -	-
21 4	カドミ	近世陶器	瓶	口縁部	—	—	—	灰白色 10V7/1	灰白色 10V7/1	灰白色 10V7/1	灰白色 10V7/1	陶筋染付、中国漆油窓	11 -	-
22 4	カドミ	近世陶器	瓶	底部	—	—	—	浅黄色 2.5V7/3	浅黄色 2.5V7/3	浅黄色 2.5V7/3	浅黄色 2.5V7/3	陶筋染付、中国漆カ	11 -	-
23 4	カドミ	近世陶器	灯明瓶	口縁部	(8.0)	—	—	黑褐色 7.5V8/2	黑褐色 7.5V8/2	黑褐色 7.5V8/2	黑褐色 7.5V8/2	内外面にスルサレ付 灯芯の痕跡あり、廻戸美濃産	11 -	-
24 4	カドミ	近世陶器	瓶	口縁部	—	—	—	灰白色 5V8/1	灰白色 5V8/1	灰白色 5V8/1	灰白色 5V8/1	内秀出鉢輪、質入 廻戸美濃産	11 -	-
25 4	カドミ	近世陶器	瓶	口縁部	—	—	—	綠褐色 5V6/1	綠褐色 5V6/1	綠褐色 5V6/1	綠褐色 5V6/1	内秀出鉢輪 唐津焼風	11 -	-
26 4	カドミ	近世陶器	すり鉢	口縁部	—	—	—	黑褐色 7.5V6/2	黑褐色 7.5V6/2	黑褐色 7.5V6/2	黑褐色 7.5V6/2	内秀出鉢輪 廻戸美濃産	11 -	-
27 4	カドミ	近世陶器	瓶	底部	—	4.6	—	品目不明 5V6/4	品目不明 5V6/4	品目不明 5V6/4	品目不明 5V6/4	底部自然彫切り瓶、扇中廻戸椎n	11 -	-
28 4	カドミ	近世罐	曲	底部	—	(6.0)	—	灰白色 2.5V6/1	灰白色 2.5V6/1	灰白色 2.5V6/1	灰白色 2.5V6/1	内秀出鉢輪、質入	11 -	-
29 4	カドミ	近世罐	曲	口縁部	—	—	—	灰白色 10V8/1	灰白色 10V8/1	灰白色 10V8/1	灰白色 10V8/1	内秀出鉢輪 伊万里焼	11 -	-
30 4	カドミ	近世罐	曲	口縁部	—	—	—	刷毛リーフ紋 5G7/1	刷毛リーフ紋 5G7/1	刷毛リーフ紋 5G7/1	刷毛リーフ紋 5G7/1	内秀出鉢輪 伊万里焼	11 -	-
32 4	表振	珠洲	便	胴部	—	—	—	暗灰色 2.5V6/1	暗灰色 2.5V6/1	暗灰色 2.5V6/1	暗灰色 2.5V6/1	外面部打叩き 内面にて其概	11 -	-
33 4	表振	近世陶器	すり鉢	体部	—	—	—	暗黄褐色 2.5V3/2	暗黄褐色 2.5V3/2	暗黄褐色 2.5V3/2	暗黄褐色 2.5V3/2	内面部在地に「条の沈線」 内面ナデ目、外面部鉢輪、廻戸美濃産	11 -	-
34 5	表振	珠洲	すり鉢	底部	—	10.0	—	灰色 5V6/1	灰色 10V6/1	灰色 10V6/1	灰色 10V6/1	内面打叩き止静止切り、内面6条1単位のナデ 目、底部中央に外面部から釦打による穿孔	12 7	-
35 5	表振	珠洲	すり鉢	底部	—	(14.0)	—	灰黄色 2.5V6/2	灰黄色 2.5V6/2	灰黄色 2.5V6/2	灰黄色 2.5V6/2	底部打叩き止静止切り瓶 内面ナデ目	12 -	-
36 5	表振	珠洲	すり鉢	口縁部	—	—	—	灰色 BY5/1	灰色 BY5/1	灰色 BY5/1	灰色 BY5/1	内面ナデ目 後削痕	12 -	-
37 5	表振	珠洲	すり鉢	体部	—	—	—	黄褐色 2.5V6/1	黄褐色 2.5V6/1	黄褐色 2.5V6/1	黄褐色 2.5V6/1	内面ナデ目	12 -	-
38 5	表振	珠洲	すり鉢	体部	—	—	—	灰白色 7.5V7/1	灰白色 7.5V7/1	灰白色 7.5V7/1	灰白色 7.5V7/1	内面ナデ目	12 -	-
39 5	表振	珠洲	便	胴部	—	—	—	灰色 N5/0	灰色 N5/0	灰色 N5/0	灰色 N5/0	外面部打叩き瓶 内面にて其概	12 -	-
40 5	表振	近世陶器	杯	杯～鋤部	—	(5.0)	—	刷毛リーフ紋 5G7/1	刷毛リーフ紋 5G7/1	刷毛リーフ紋 5G7/1	刷毛リーフ紋 5G7/1	内秀出鉢輪、廻戸美濃産	12 -	-
41 5	表振	近世陶器	瓶	口縁～ 体部	(35.2)	—	—	灰黄色 2.5V7/2	灰白色 2.5V6/9	灰白色 2.5V6/9	灰白色 2.5V6/9	内秀出鉢輪、質入、廻戸美濃産	12 -	-
42 5	表振	近世陶器	蓋	胴～底部	—	(8.0)	—	淡黄色 2.5V6/4	淡黄色 2.5V7/6	淡黄色 2.5V7/6	淡黄色 2.5V7/6	外面部クロケズリ、瓶頭部3条の沈線	12 -	-
43 6	近世期 造成土	近世陶器	曲	口縁部	(13.0)	—	—	灰白色 7.5V7/1	灰白色 7.5V7/1	灰白色 7.5V7/1	灰白色 7.5V7/1	陶筋染付、中国漆油窓	14 -	-
44 6	表振	珠洲	すり鉢	体部	—	—	—	黄褐色 2.5V6/1	黄褐色 2.5V6/2	黄褐色 2.5V6/2	黄褐色 2.5V6/2	内面ナデ目	14 -	-

第5表 建物建設に伴う試掘確認調査土器・陶磁器一覧表（2）

遺物 番号	地 点 名	層位	種別	分類	部位	法量 (cm. 案内では性定)			色調			備考(成形・文様等)	種 別	固 度
						口径	底径	高さ	内面	外面	断面			
45	6	表授	灰陶	甕	胴部	-	-	-	灰色 37.5/1	灰褐色 107R8/1	灰褐色 107R8/2	外面平行印き	14	
46	6	表授	近世陶器	瓶	口縁～ 体部	(10.0)	-	-	浅黄色 2.5Y7/3	浅黄色 S7/3	浅黄色 107R8/2	内面底灰錆 漸干底漬底	14	
47	6	表授	近世陶器	すり鉢	体部	-	-	-	褐灰色 37.4/1	褐灰色 S7/1	浅黄色 107R8/4	内面下口 内面底鉄錆、漸干底漬底	14	
48	7	TE1 昭和陶	圓文	深鉢	口縁部	-	-	-	に5-6薄色 7.5Y8E/4	に5-6褐色 7.5Y8E/4	外側白線底下に沈錆による工字状文 口縁部に銀文記。中期後葉	16		
49	7	TE1 耕作土	土師器	皿	口縁部	-	-	-	浅黄褐色 7.5Y8E/4	灰褐色 7.5Y8E/2	灰褐色 7.5Y8E/2	内面底灰錆 内面ナダ定方向、外面未調整	16	7
50	7	TE1 耕作土	土師器	皿	口縁部	(6.0)	-	-	に5-6薄色 7.5Y8E/4	に5-6薄色 7.5Y8E/4	に5-6薄色 107R7/2	内面ナダ調整、外面未調整	16	
51	7	TE1 耕作土	土師器	皿	口縁部	(12.2)	-	-	灰黄褐色 30Y8E/2	灰黄褐色 107R8/2	灰黄褐色 107R8/2	T-6.7類	16	
52	7	TE1 耕作土	土師器	皿	口縁部	-	-	-	に5-6薄色 107R7/3	に5-6薄色 107R7/3	に5-6薄色 107R7/3	内面ナダ調整、外面未調整	16	
53	7	TE1 耕作土	土師器	皿	口縁～ 底部	(9.2) (5.0)	2.0	-	褐色 7.5Y8E/2	褐色 7.5Y8E/2	褐色 7.5Y8E/2	内面ロクナダ、E-3類 内面底保付帯	16	7
54	7	TE1 耕作土	漸干底	口縁部	-	-	-	浅黄色 2.5Y7/3	浅黄色 2.5Y7/3	浅黄色 2.5Y7/2	内面底灰錆、二次液熱	16		
55	7	TE1 耕作土	漸干底	口縁部	-	-	-	浅黄色 2.5Y7/4	浅黄色 2.5Y7/4	灰褐色 107R8/2	内面底灰錆、細貫入、口縫外反・厚肥	16		
56	7	TE1 耕作土	青磁	瓶	口縁部	-	-	-	灰土7-8色 107W/2	灰土7-8色 107W/2	白色 107W/2	内面底施錆 能透系茶飴色	16	7
57	7	TE1 耕作土	近世陶器	丸瓶	口縁部	-	-	-	灰褐色 7.5Y8E/2	灰褐色 7.5Y8E/2	灰褐色 107R7/2	内面底鉄錆、漸干底漬底	16	
58	7	TE1 耕作土	近世陶器	皿	口縁部	-	-	-	灰白色 S7/1	灰白色 S7/1	灰白色 2.5Y7/1	内面底灰錆、貫入、漸干底漬底	16	
59	7	TE1 耕作土	近世陶器	すり鉢	口縁部	-	-	-	黑色 M4/0	黑色 M4/0	黑色 107R7/2	内面ナダ 内面底鉄錆、漸干底漬底	16	
60	7	TE1 耕作土	近世陶器	すり鉢	口縁部	-	-	-	灰褐色 7.5Y7/2	灰褐色 7.5Y7/2	灰褐色 7.5Y7/2	内面底鉄錆、漸干底漬底	16	
61	7	TE2	土師器	皿	口縁部	(0.4) (3.0)	-	-	灰褐色 107R6/2	灰褐色 107R6/2	灰褐色 107R6/2	内面ナダ 内面底保付帯	16	7
62	7	立合	土師器	皿	体～底部	-	-	-	浅黄褐色 107R8/3	浅黄褐色 107R8/3	浅黄褐色 107R8/3	T-6.7類、内面底保付帯	16	
63	7	立合	土師器	皿	口縁部	-	-	-	浅黄色 2.5Y8/2	浅黄色 2.5Y8/2	灰褐色 107R6/2	内面底構ナダ 内面底保付帯	16	
64	7	立合	土師器	皿	口縁部	-	-	-	浅黄褐色 107R8/3	浅黄褐色 107R8/3	浅黄褐色 107R8/2	内面底構ナダ T-6.7類	16	
65	7	立合	漸干底	小天口	口縁部	-	-	-	黑色 2.5Y7/2	黑色 2.5Y7/2	灰褐色 107R6/2	内面ナダ 古漬け後期	16	
66	7	立合	漸干底	平盤	胴部	-	-	-	浅黄褐色 107R6/2	浅黄褐色 107R6/2	浅黄褐色 107R6/2	内面底灰錆	16	
67	7	立合	漸干底	丸皿	口縁部	-	-	-	浅黄色 2.5Y8/2	浅黄色 2.5Y8/2	灰褐色 107R6/2	内面底灰錆、貫入	16	
68	7	立合	近世陶器	碗	胴部	-	-	-	黑色 S7/2	黑色 S7/2	灰褐色 S7/1	内面底鉄錆、漸干底漬底	16	
69	7	立合	近世陶器	形彌母子 合	口縁部	(23.0)	-	-	オリーブ色 S7/6/3	オリーブ色 S7/6/3	灰褐色 S7/5	内面底灰錆、細貫入 漸干底漬底	16	
70	7	立合	近世陶器	花瓶 or 壺	脚部	-	-	-	に5-6薄色 7.5Y7/2	に5-6薄色 7.5Y7/2	灰褐色 107R7/2	外側水袖、貫入	16	
71	8	中世期 造成土	土師器	皿	口縁部	-	-	-	浅黄褐色 107R8/3	浅黄褐色 107R8/3	浅黄褐色 107R8/3	内面ナダ	18	
72	8	中世期 造成土	土師器	皿	口縁部	-	-	-	浅黄褐色 107R8/3	浅黄褐色 107R8/3	浅黄褐色 107R8/3	内面ナダ、外面未調整	18	
73	8	近世期 造成土	土師器	皿	口縁部	-	-	-	浅黄褐色 107R8/3	浅黄褐色 107R8/3	浅黄褐色 107R8/2	T-6.7類	18	
74	8	近世期 造成土	土師器	皿	口縁部	-	-	-	に5-6薄色 107R7/4	に5-6薄色 107R7/4	灰褐色 107R7/4	内面ナダ、外面未調整	18	
75	8	近世期 造成土	土師器	皿	口縁部	-	-	-	浅黄褐色 107R8/3	浅黄褐色 107R8/3	浅黄褐色 107R8/3	内面ナダ、外面未調整	18	
76	8	近世期 造成土	瓦器	火鉢	体部	-	-	-	黑褐色 2.5Y3/1	黑褐色 2.5Y3/1	褐灰色 107R8/4	内面ナダ	18	
77	8	近世期 造成土	瓦器	火鉢	体部	-	-	-	黄灰色 2.5Y5/1	黄灰色 2.5Y5/1	黄灰色 2.5Y5/1	内面ナダ 構方向の突端	18	
78	8	近世期 造成土	漸干底	火鉢	脚部	-	-	-	暗赤褐色 S7X3/3	暗赤褐色 S7X3/3	暗赤褐色 S7X3/3	内面ナダ 構方向の突端	18	
79	8	便用	近世陶器	瓶	口縁部	-	-	-	灰オリーブ色 107R7/2	灰オリーブ色 107R7/2	灰色 7.5Y6/2	陶胎塗付、中国漢文款	18	
80	8	表授	土師器	皿	口縁部	-	-	-	に5-6薄色 107R7/2	に5-6薄色 107R7/2	灰褐色 107R6/2	内面ナダ、外面未調整	18	
81	9	日耕作土	漸干底	すり鉢	口縁部	-	-	-	褐灰色 107R4/1	褐灰色 107R4/1	褐灰色 107R4/1	内面底鉄錆 大崩落1段階	20	
85	11	借用	漸干底	大口茶碗	口縁～ 体部	(16.0)	-	-	-	-	-	内面底鉄錆、口縁部内面端部から2cm下までの練錆は剥離びの黒、占漬皮後1期	23	
86	11	借用	漸干底	折腰深皿	口縁部	(27.0)	-	-	-	-	-	内面底灰錆、二次液熱 占漬皮後重ね	23	
87	11	借用	近世陶器	瓶	口縁～ 体部	(10.0)	-	-	-	-	-	内面乳白色明神輪、鉢底 内面底鉄錆	23	
88	12	表授	土師器	皿	口縁～ 底部	(9.0) (4.4) 2.4	30.00	浅黄褐色 107R8/3	浅黄褐色 107R8/2	浅黄褐色 107R8/2	内面ナダ 内面底鉄錆、T-6類	25	7	

第6表 建物建設に伴う試掘確認調査土器・陶磁器一覧表（3）

遺物番号	地点	層位	種類	分類	部位	法量 (cm、括弧内は推定)			色調			備考(成形・文様等)	排 出 版	固 定	
						口径	進深	器高	内面		外面	内面	断面		
									内面	外面	内面				
89 12	敷地造土	土師器	瓶	口縁部	(8.2)	-	-	-	浅黄褐色 10787/3	にら・黃褐色 10787/2	灰白色 10788/2	内面ナデ、外面部濃 T-6、輪、内外面甕付着	25	-	
90 12	敷地造土	土師器	瓶	口縁部	-	-	-	-	浅黄褐色 10788/4	浅黄褐色 10788/3	浅黄褐色 10788/4	内面ナデ、外面部濃 T-6、輪	25	-	
91 12	敷地造土	土師器	瓶	口縫一 体部	(16.0)	-	-	-	浅黄褐色 7.598/3	浅黄褐色 7.598/2	浅黄褐色 7.598/3	内面ナデ、外面部濃 T-6、輪	25	-	
92 12	敷地造土	土師器	瓶	口縫部	-	-	-	-	浅黄褐色 7.598/3	浅黄褐色 7.598/2	浅黄褐色 7.598/3	内面ナデ T-6、輪	25	7	
93 12	敷地造土	漆戸美濃 天日茶碗	口縫一 体部	-	-	-	-	-	黒板地 2.53/3	黒色 10787/1	灰白色 10787/2	内面部濃 古漬戸灰~IV期	25	-	
94 12	敷地造土	漆戸美濃 天日茶碗	口縫部	-	-	-	-	-	黒板地 5.56/4	黒色 N2.0	灰白色 10786/2	内面部濃 古漬戸灰~IV期	25	-	
95 12	敷地造土	漆戸美濃 平皿	口縫部	-	-	-	-	-	浅黄褐色 2.597/3	にら・黃褐色 2.598/4	浅黄色 2.597/4	内面部濃、貫入 T-6、輪	25	-	
96 12	敷地造土	漆戸美濃 平皿	口縫部	-	-	-	-	-	灰白色 5.57/2	灰白色 5.57/2	灰白色 5.57/2	内面部濃 T-6、輪	25	-	
97 12	敷地造土	漆戸美濃 甜組	口縫一 体部	-	-	-	-	-	にら・黃褐色 10787/4	浅黄褐色 10787/3	にら・黃褐色 10787/3	内面5条の印跡あり 内面部濃に炭化施錆	25	-	
98 12	敷地造土	近世陶器	瓶	口縫部	-	-	-	-	灰白色 7.577/1	灰白色 7.577/2	灰白色 7.577/1	内面部濃、貫入 T-6、輪	25	-	
99 12	表探	土師器	瓶	口縫部	-	-	-	-	灰白色 7.598/2	灰白色 7.598/2	灰白色 7.598/2	内面部濃 T-6、輪	25	-	
100 12	表探	土師器	瓶	口縫部	-	-	-	-	黒褐色 10783/2	黒褐色 10782/2	黒褐色 10783/2	内面部濃 T-6、輪	25	-	
101 12	表探	土師器	瓶	口縫部	-	-	-	-	浅黄褐色 7.598/4	浅黄褐色 7.598/4	浅黄褐色 7.598/4	内面5条の印跡あり 内面部濃 T-6、輪	25	-	
102 12	表探	漆戸美濃 香呑	口縫部	-	-	-	-	-	オリーブ色 5.56/1	灰白色 5.56/1	灰白色 5.56/1	内面部濃 T-6、輪	25	-	
103 12	表探	床面	便	脚部	-	-	-	-	灰色 5.56/1	灰色 7.555/3	灰褐色 10786/2	外面部平凹き 内面当て具痕	25	-	
104 14	黒褐色土	土師器	瓶	口縫一 体部	(13.0)	(8.0)	-	-	浅黄褐色 2.598/3	にら・黃褐色 10782/3	浅黄色 2.598/3	外面部コササギ、保付着、 内面エナメル、保付着、T-6輪	27	7	
105 15	表探	漆戸美濃 天日茶碗	底部	-	3.8	-	-	-	黒褐色 5.572/1	灰褐色 5.572/2	灰褐色 5.572/2	内面部濃 古漬戸	28	-	
106 15	表探	漆戸美濃 並組	底部	-	5.0	-	-	-	灰白色 10787/1	灰白色 10787/1	灰白色 10787/1	外面部灰 底面凹窓あり	28	7	
107 15	表探	床面	便	脚部	-	-	-	-	灰色 N5.0	灰色 7.555/1	灰色 7.555/1	外面部平凹き 内面当て具痕	28	-	
108 15	表探	床面	便	脚部	-	-	-	-	灰白色 N7.0	灰白色 N6.0	灰白色 N6.0	外面部凹窓 内面ナデ	28	-	
109 15	表探	床面	便	口縫部	-	-	-	-	灰色 10787/1	灰色 10787/1	灰色 10787/1	外面部平凹き 内面当て具痕、底面凹窓あり	28	-	
110 15	表探	床面	便	口縫部	(44.2)	-	-	-	モザイク灰 5057/1	モザイク灰 5057/1	モザイク灰 5057/1	外面部モザイク灰 底面凹窓あり	28	7	
111 15	表探	床面	便	口縫部	-	-	-	-	灰色 10787/1	灰色 10787/1	灰色 10787/1	外面部平凹き 内面当て具痕	28	-	
112 15	表探	調文	深鉢	脚部	-	-	-	-	灰褐色 10787/2	灰褐色 10786/4	灰褐色 10786/4	外面部灰 内面に保付着	28	-	
113 15	表探	調文	深鉢	脚部	-	-	-	-	褐色 5.577/6	褐色 10787/4	褐色 2.597/2	外面部灰 内面ナデ	28	-	

第7表 建物建設に伴う試掘確認調査錢貨一覧表

遺物番号	地點	層位	分類	部位	法量 (cm、括弧内は推定)			付着物	備考	排 出 版	固 定	
					長さ	幅	厚さ	重さ(g)				
6 4	野庭	銅錢	-	-	2.3	2.3	-	2.7	-	見本通字、孔径0.6mm四方、縫あり	11	-
7 4	野庭	銅錢	-	-	2.4	2.4	-	2.6	-	見本通字、孔径0.55mm四方、縫あり	11	-
21 4	カドミウム	銅錢	丸穴通	-	2.4	2.4	-	1.5	-	元古通字、縫あり	11	-

第8表 建物建設に伴う試掘確認調査石器・石製品一覧表

遺物番号	地點	層位	分類	部位	法量 (cm、括弧内は推定)			石材	使用痕	装着痕	付着物	磨打痕	自然面	転用	備考	排 出 版	固 定
					長さ	幅	厚さ										
81 9	石製石斧	完形	-	-	12.3	5.5	2.8	192.1	細石成岩	刃面摩耗	有	無	有	有	無	無	近縁形。
82 9	石製石斧	完形	-	-	13.1	5.6	2.8	196.5	細石成岩	土つわ板	無	タール	無	有	無	無	近縁形。
83 9	石製石斧	裏・刃頭欠損	残	-	7.4	3.3	2.3	279.3	泥岩	無	無	無	無	有	無	無	無
114 15	石製石斧	完形	-	-	15.5	8.6	3.1	412.6	細石成岩	無	有	無	有	有	無	無	無
115 15	石製石斧	万部欠損	複数	9.9	6.1	2.5	179.7	砂岩	無	無	無	無	有	有	無	無	無
116 15	石製石斧	萬・刀頭欠損	複数	12.6	5.5	2.1	297.9	安山岩	有	有	無	無	有	有	無	無	無
117 15	石製石斧	完形	-	-	15.9	6.9	3.5	454.5	安山岩	土つわ板	無	無	有	有	無	無	近縁形。
118 15	石製石斧	完形	-	-	15.3	6.4	3.4	345.7	細石成岩	無	無	無	無	有	無	無	無
119 15	石製石斧	完形	-	-	13.0	6.4	3.1	414.0	安山岩	土つわ板	有	無	有	有	無	無	近縁形。
120 15	石製石斧	完形	-	-	10.1	6.5	2.6	163.1	安山岩	無	無	無	無	有	無	無	無
121 15	石製石斧	完形	-	-	12.2	6.2	2.1	157.3	安山岩	有	無	無	無	有	無	無	無
122 15	石製石斧	完形	-	-	14.8	4.9	2.4	256.2	泥岩	土つわ板	有	コクリー	有	有	無	無	近縁形、工事中に発見したコンクリートらしい。
123 15	石製石斧	完形	-	-	11.2	5.3	1.6	115.0	細石成岩	無	無	無	無	有	無	無	無

### 第3節 2001年度上下水道工事に伴う試掘確認調査

#### 1 調査概要

2001(平成13)年8月27日～11月7日にかけて、江馬氏城館跡の史跡指定地内と、史跡を包含する埋蔵文化財包蔵地である江馬氏殿遺跡において、上下水道本管を埋設する計画が立ち上がり、その影響を把握するため13ヶ所で試掘確認調査を実施した(第31図)。なお、調査時の遺跡略号は「GES01」としている。

#### 2 ①地区(第32図)

調査日 2001(平成13)年8月27日

調査対象地とトレーンチ設定 送水ポンプ室予定地の南側隣接地において、東西3m×南北2mのトレーンチを設定した。

**土層と遺構** 土層の堆積は、上層より第1層道路造成時の基礎、第2層近世以降の造成土、第3・4層山の自然堆積土であった。第3層上面で遺構の確認はなかった。

**遺物** 第2層から近世陶磁器が1点出土した。また、近現代陶磁器2点を採集した。

**所見** 調査対象地は、下館の中心から見ると北辺に当たる。調査前の聞き取りで、かつて「水口」と呼ばれていたと分かった。このため、下館跡の所在する段丘に水を供給した場であったことを想定していたが、今回は中世期の遺構を確認することができなかった。

#### 3 ②地区(第32図)

調査日 2001(平成13)年9月4日

調査対象地とトレーンチ設定 下館跡の北東に位置する加茂若宮神社参道中腹において、南北5m×東西2mのトレーンチを設定した。

**土層と遺構** 土層の堆積は、上層より第1層舷山水道管を埋めた道路の造成土、第2層道路造成土であった。遺構の確認はなかった。

**遺物** 第2層より近世陶磁器2点、第1層よりガラス片1点、近世陶器甕1点が出土した。

**所見** 調査地は旧地形が谷地形である。谷を埋めて道路を造成したことが分かり、中世期の生活面を確認することはできなかった。

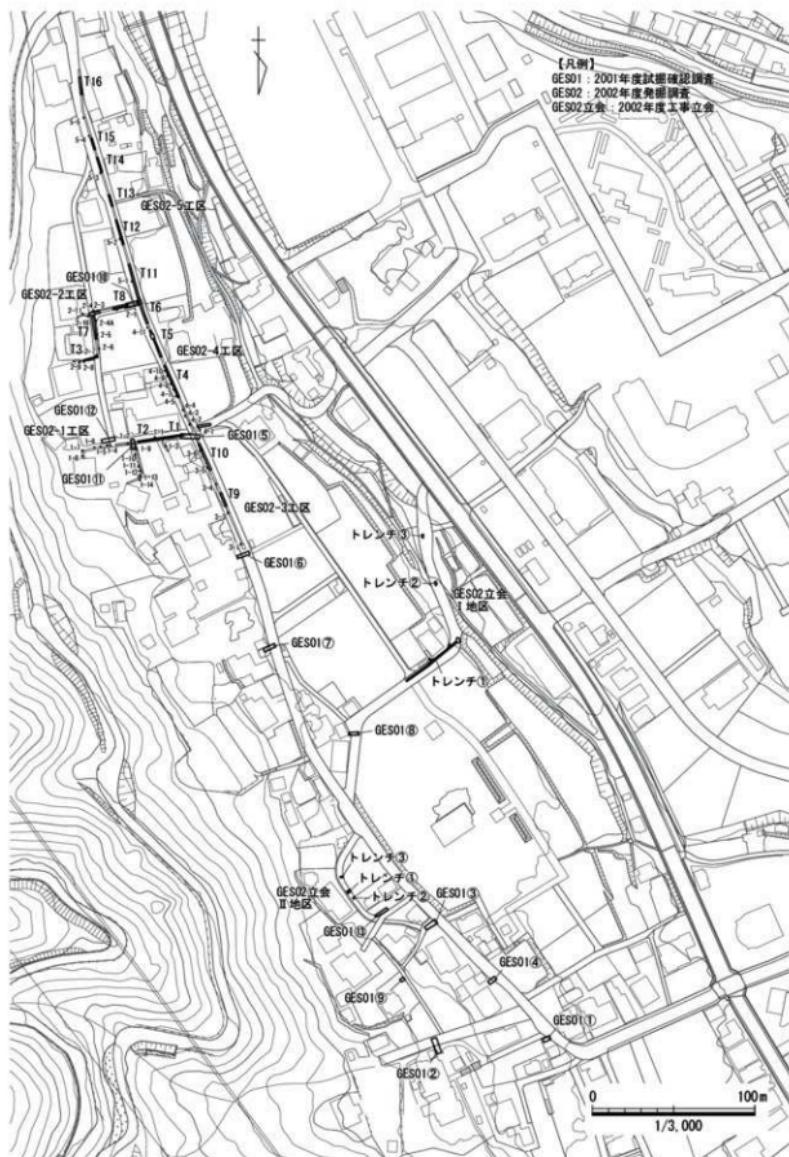
#### 4 ③地区(第32・35図)

調査日 2001(平成13)年9月12～17日

調査対象地とトレーンチ設定 下館東端部の半円形部分において、東西13m×南北2mのトレーンチを設定した。2本の水路によってトレーンチが分断されるため、市道東側の最も長い中央のトレーンチをI地区、西端の市道下のトレーンチをII地区、東端のトレーンチをIII地区とした。

**土層と遺構** 土層の堆積は、上層より第1～3層道路造成土、第4層道路造成前まで機能していた水路の裏込め土、第5層かつての水路の基盤土、第6・7層旧水田の床土、第8・9層山の自然堆積土であった。第8・9層で遺構の確認はなかった。

**遺物** 第7層から土師器3点、瀬戸美濃焼1点が出土した。125・126は土師器皿である。125は内外



第31図 上下水道工事に伴う調査位置図

面にロクロナデ調整を施し、R-2類と考えられる。126は内面にナデ調整を施すが外未調整のため、T-6類かT-7類と考えられる。第5層から近世磁器2点、第4層から近代陶器1点、ビニール片1点が出土した。また瀬戸美濃焼1点を地表面で採集した。127は瀬戸美濃焼直線大皿である。口縁部が若干内湾し、端部は方形を呈する。古瀬戸後期のものと考えられる。

**所見** 調査地は、堀で囲まれた館中心部の東端、一番奥にあたる場所である。調査地に近い畑地では1978年度調査で3列の石積み遺構を確認し、これが南堀と北堀とを結ぶと想定されていた（神岡町教育委員会1979）。このため、今回の調査目的として石積み遺構の延長を確認したかったが、検出することはできなかった。堀や石積み遺構は、今回の調査地より東側（山側）を巡っている可能性が想定される。

#### 5 ④地区（第32図）

調査日 2001（平成13）年9月18日

**調査対象地とトレンチ設定** 下館跡の北東隣接地において、東西5m×南北2mのトレンチを設定した。トレンチは、水路によって東側の宅地側と、西側の市道側に分断される。

**土層と遺構** 土層の堆積は、第1層道路造成土、第2層宅地造成土、第3層自然堆積土であった。第3層は東側（山側）から西に向かって傾斜しており、湧水もある。このため、自然堆積土層と判断したが、遺構の確認はなかった。また、遺物の出土もなかった。宅地側では便槽壁やかつての水路のコンクリート壁などにより自然堆積土層まで掘削することができなかった。

**遺物** 遺物の確認はなかった。

**所見** 今回の調査地は下館跡から見て北東の館背後に当たり、中世期に生活が営まれた場と想定されたものの、中世遺構・遺物を確認することができなかった。

#### 6 ⑤地区（第32図）

調査日 2001（平成13）年9月19・20日

**調査対象地とトレンチ設定** 下館跡と同一段丘の東辺において、東西6m×南北2mのトレンチを設定した。水路によってトレンチが分断されるため、水路より東側をI地区、西側をII地区とした。

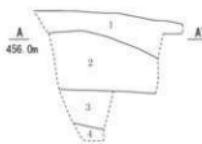
**土層と遺構** 土層の堆積は、上層より第1層道路造成土、第2層かつての用水埋土、第3層旧水田の床土、第4・5層遺構埋土、第6層下館基盤土、第7層地山であった。

遺構は、第6層下館基盤土上面から掘り込む柱穴6基、土坑2基を確認した。I地区の遺構は柱穴SP1～5・土坑SX7であり、II地区の遺構は柱穴SP6・土坑SX8とした。

**遺物** 土坑SX8より瀬戸美濃焼1点、第3層旧水田の床土より近世陶磁器2点、第1層道路造成土より近世磁器1点が出土した。細片であり図示できる遺物はなかった。

**所見** 今回の調査では、現地表下約1.3mで下館基盤土を確認し、そこから掘り込む柱穴・土坑を確認した。遺構埋土の土質が、柱穴SP2・3及び土坑SX7・8の一群と、柱穴SP1・4～6の一群に二分される。これらは時期差を示している可能性がある。土坑SX8から瀬戸美濃焼が出土したことより、SP2・3及びSX7・8は中世期の遺構と考えられた。これらから、段丘の東辺にも館に属する人々が生活していたものと想定された。

## ①地区



## 【①地区土層説明】

- 1 31R6/3 棕色砂質土 5～8cmの大繊混。【道路造成時の基礎】  
2 7, 5YR5/1 黄褐色粘質土 7, 5YR7/5 黄褐色粘質土30%全分に混。  
10YR2/5 黑色粘質土10%混。5～40cm大の大繊混。  
【近世以降の造成土】  
3 7, 5YR2/8 黄褐色砂質土 5～20cm大の大繊混。【山の自然堆積土】  
4 7, 5YR1, 7/1 黑色粘質土 10YR7/8 黄褐色粘質土。5～10cm大の大繊混。【山の自然堆積土】

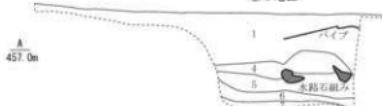
## ②地区



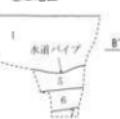
## 【②地区土層説明】

- 1 2, 5Y3/1 黑褐色粘質土 10YR2/6 明黄褐色砂質土40%混。全体に5～20cm大の大繊混。  
【道路造成土】  
2 7, 5YR7/8 黄褐色砂質土 7, 5YR5/6 明褐色砂質土30%混。全体に2～40cm大の大繊混。  
【道路造成土】

## ③地区



## ③Ⅰ地区



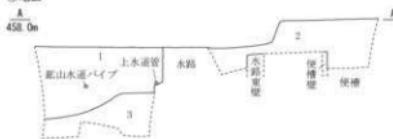
## ③Ⅱ地区



## 【③地区土層説明】

- 1 7, 5YR4/1 黄褐色粘質土 1～5cmの大繊混。10YR5/4 にぶい黄褐色砂質土(5～20cm大の大繊混)30%混。  
10YR2/2 黑褐色粘質土(2～5cm大の繊混)シグレート面)20%混。7, 5YR8/6 黄褐色粘質土10%混。全体的に液化物混。【道路造成土】  
2 10YR2/2 黑褐色粘質土 1～7cmの大繊混。【道路造成土】  
3 7, 5YR5/1 明褐色粘質土 0.5～7cmの大繊混。液化物混。【道路造成土】  
4 10YR4/2 黄褐色粘質土 7, 5YR4/4 棕色砂質土30%混。【道路造成時の木路裏込み土】  
5 10YR5/1 黄褐色粘質土 1～3cmの大繊混。液化物混。【道路造成時の木路裏込み土】  
6 10YR3/2 黄褐色粘質土 1～5cmの大繊混。液化物混。【田の床土】  
7 10YR7/4 にぶい黄褐色砂質土 1～3cmの大繊混。中世遺物出土。【田の床土】  
8 10YR8/8 黄褐色砂質土 1～25cmの大繊混。【山の自然堆積土】  
9 10YR4/4 黄褐色粘質土 1～3cmの大繊混。【山の自然堆積土】

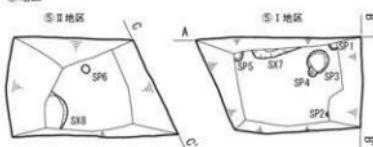
## ④地区



## 【④地区土層説明】

- 1 10YR3/1 黑褐色粘質土 0.5～5cmの大繊混。  
2, 5Y7/4 代黄色砂質土(3～5cm大の大繊混)30%混。  
10YR7/8 黄褐色粘質土(3～5cm大の大繊混)10%混。  
【道路造成土】  
2 10YR4/2 黄褐色粘質土 【宅地造成土】  
3 7, 5YR5/8 明褐色砂質土 5～20cm大の大繊混。【山の自然堆積土】

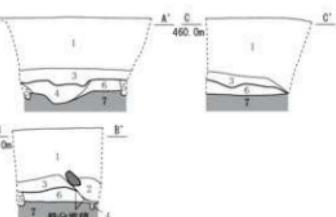
## ⑤地区



## ⑤Ⅰ地区

## ⑤Ⅱ地区

## C'



## 【⑤地区土層説明】

- 1 7, 5YR5/2 黄褐色粘質土 5cmの大繊混。7, 5YR6/6 棕色砂質土(液化物混)30%混。  
10YR7/6 明黄褐色砂質土20%混。全体的に5cm分厚。  
【道路造成時の川底込み土】  
2 7, 5YR6/6 混黄褐色砂質土 5cmの大繊混。液化物混。【田の床土】  
3 10YR2/1 黑褐色粘質土 2, 5YR6/6 黑褐色粘質土(液化物混)30%混。液化物混。【田の床土】  
4 10YR1, 7/7 黑褐色粘質土 2, 5YR6/6 黑褐色粘質土(液化物混)30%混。液化物混。【田の床土】  
5 2, 5YR3/1 黑褐色粘質土 7, 5YR6/6 黄褐色粘質土-NW/灰白色粘質土。【SP1・SP4～6 埋土】  
6 10YR3/1 黑褐色粘質土 NW/灰白色粘質土。【下盤基盤土】  
7 2, 5YR6/6 明黄褐色土 NW/灰白色粘質土。【山地】

第32図 2001年度試掘確認調査構図（1）

## 7 ⑥地区（第33図）

調査日 2001（平成13）年9月26日

調査対象地とトレンチ設定 下館跡より南方に所在する殿圓城寺において、敷地内に東西2m×南北2mのトレンチをI地区として、市道に東西3m×南北2mのトレンチをII地区として設定した。

土層と遺構 土層の堆積は、上層より第1層道路及び宅地造成土、第2・3層下館基盤土、第4層地山であった。平面面で遺構の確認はなかった。

遺物 第1層から近世陶器・ガラス片などが出土した。

所見 今回の調査地では、寺院地としての利用が中世に遡る可能性を想定していたが、中世遺構・遺物の確認はなかった。しかしながら、現地表下1.9mで下館基盤土を確認したため、周辺に遺構が広がる可能性も想定できる。

## 8 ⑦地区（第33図）

調査日 2001（平成13）年10月9日

調査対象地とトレンチ設定 下館跡の南東背後において、東西7m×南北2mのトレンチを設定した。

土層と遺構 土層の堆積は、上層より第1層畑の耕作土、第2層道路造成土、第3層旧耕作土、第4層床土、第5・6層旧耕地造成土であった。中世遺構の確認はなかった。

遺物 第6層旧耕地造成土からビニール片が出土した。

所見 今回の調査地は、聞き取りにより水田を埋めて畑地にしたことが判明している。第6層よりビニールが出土したため、周囲一帯の水田を造成する際に埋めた土層と判断した。これより下層に中世遺構が存在する可能性もあるが、調査掘削では確認することができなかつた。

## 9 ⑧地区（第33図）

調査日 2001（平成13）年8月29日

調査対象地とトレンチ設定 下館跡の東側隣接道路において、南北5m×東西2mのトレンチを設定した。

土層と遺構 土層の堆積は、上層より第1層道路造成土、第2層石組み暗渠埋土、第3層道路造成の際の埋土、第4層旧耕作土か床土、第5・6層床土であった。遺構の確認はなかった。

遺物 遺物の確認はなかつた。

所見 調査地では、1996年度の電磁気探査で、現地表下2.5mで小さな溝状遺構の存在を示唆していたため、その存在も想定された（神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室1997）。しかし、調査掘削では想定レベルまで掘り下げることがなかつたため、さらに下層に遺構が存在する可能性がある。

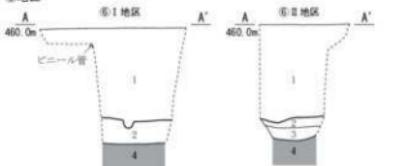
## 10 ⑨地区（第33図）

調査日 2001（平成13）年10月15・16日

調査対象地とトレンチ設定 下館跡の北側山麓部において、東西3.5m×南北2mのトレンチを設定した。

土層と遺構 土層の堆積は、第1層道路造成土、第2層畑の造成土、第3層道路及び畑の造成土、第

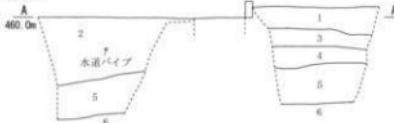
## ⑥地区



## 【⑥地区土層説明】

- 1 7.518/2 黒褐色粘質土 1～5cm 大の縫隙・60cm 大の縫隙。炭化物混入。
- 2 7.518/4 黄褐色砂質土 (2～8cm の縫隙) 40%混入。
- 3 7.518/3 黒褐色粘質土 (下部基盤土)
- 4 2.518/6 明黄色粘土 白色粒含。【地山】

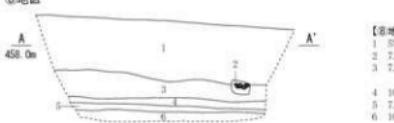
## ⑦地区



## 【⑦地区土層説明】

- 1 2.518/6 明黄色粘質土 炭化物・堆山ブロック混入。
- 2 10Y8E/4 に5-5 黄褐色砂質土 (しまり悪い) 40%混入。  
【堆山の堆土】
- 2 7.518/2 黑褐色粘質土 (下部基盤土)
- 3 5.518/6 黄褐色砂質土 (3～15cm 大の縫隙) 30%混入。  
【道路造成土】
- 3 10Y8E/1 黑褐色粘質土 1cm 大の縫隙。
- 3 10Y8E/1 黑褐色粘質土 (1cm 大の縫隙) 40%混入。全体に炭化物混入。  
【松葉作土】
- 4 7.518/4 成形用粘質土 7.518/6 黄褐色粘土混入。  
1～5cm 大の縫隙。炭化物混入。【床土】
- 5 7.518/5 に5-5 黄褐色砂質土 1cm 大の縫隙。
- 10Y8E/1 黑褐色砂質土 (1～3cm 大の縫隙) 20%混入。  
全体に炭化物混入。【田耕地造成土】
- 6 7.518E/6 砂質粘土 1cm 大の縫隙・炭化物混入。【田耕地造成土】

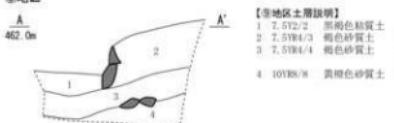
## ⑧地区



## 【⑧地区土層説明】

- 1 7.517/1 灰褐色粘質土 2.517/8 黄褐色 10%混。炭化物混入。【道路造成土】
- 2 7.518/6 紅褐色粘質土 2 7.518/6 黄褐色 10%混。炭化物混入。【道路造成時の堆込み土】
- 3 7.518/6 紅褐色粘質土 10Y8E/2 黑褐色粘質土 5cm 大の縫隙。5～20cm 大の縫隙。  
【道路造成時の堆込み土】
- 4 10Y8E/1 黑褐色粘質土 2～15cm 大の縫隙。炭化物・コンクリート片混入。【道路造成土】
- 5 7.518/2 黑褐色粘質土 2～8cm 大の縫隙。炭化物混入。【堆山の堆土】
- 6 10Y8E/6 明黄色粘質土 3～8cm 大の縫隙。炭化物混入。【床土】

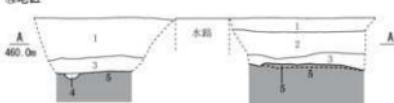
## ⑨地区



## 【⑨地区土層説明】

- 1 7.512/2 黑褐色粘質土 2 7.517/8 黄褐色 10%混。炭化物・コンクリート片混入。【道路造成土】
- 2 7.518/4 紅褐色粘質土 2～8cm 大の縫隙。炭化物混入。【堆山の堆土】
- 3 7.518/4 紅褐色粘質土 10Y8E/2 黑褐色粘質土 5cm 大の縫隙。5～20cm 大の縫隙。  
【道路造成時の堆込み土】
- 4 10Y8E/8 黄褐色粘質土 2～15cm 大の縫隙。炭化物・コンクリート片混入。【道路造成土】
- 5 7.518/2 黑褐色粘質土 2～8cm 大の縫隙。炭化物混入。【床土】
- 6 10Y8E/6 明黄色粘質土 1～4cm 大の縫隙。【山の自然堆積土】

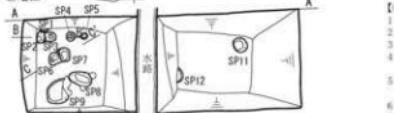
## ⑩地区



## 【⑩地区土層説明】

- 1 2.517/1 黄褐色砂質土 5～20cm 大の縫隙。5Y8E/1 黄白色砂質土 (5cm 大の縫隙) 40%混入。  
【堆山の堆土】
- 2 10Y8E/1 黑褐色粘質土 10Y8E/1 黑褐色粘質土 (5cm 大の縫隙) 20%混入。  
【道路造成土】
- 3 10Y8E/1 黑褐色粘質土 白色粘土。木片・炭化物混入。【床土】
- 4 2.517/4 黑褐色粘質土 7.518/5 明黄色の木の根混入。堆山ブロック混入。  
【田舎造成の木の根】
- 5 2.518/6 明黄色粘土 白色粒含。【地山】

## ⑪地区



## 【⑪地区土層説明】

- 1 7.518/2 黑褐色粘質土 1cm 大の縫隙。【道路造成土】
- 2 10Y8E/1 灰褐色粘質土 1cm 大の縫隙。【田舎作時に露出した泥板を埋めた土】
- 3 2.517/4 黄褐色粘質土 白色粘土。【田舎の堆土】
- 4 10Y8E/7 明黄色粘質土 5～30cm 大の縫隙。  
【道路造成前の用水路を埋めた砂】
- 5 10Y8E/2 黑褐色粘質土 白色粒含。鉄分多く堆積。  
【田舎造成時に用水路を埋めた堆土】
- 6 7.518/3 黑褐色粘質土 0.5cm 大の縫隙。【堆山土】
- 7 10Y8E/1 黑褐色粘質土 白色粘土。【田耕地】
- 8 7.518/2 黑褐色粘質土 白色粘土。【下部基盤土】
- 9 2.518/6 明黄色粘質土 白色粘土。【地山】

## 【住地SP-2・3 土層説明】

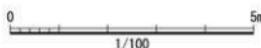
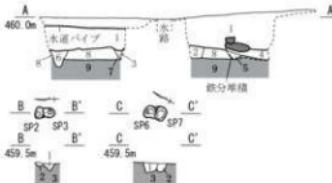
- 1 10Y8E/2 黑褐色粘質土 白色粒含。
- 2 10Y8E/3 黑褐色粘質土 白色粒含。
- 3 2.518/6 明黄色粘質土 白色粒含。【地山】

## 【住地SP-7 土層説明】

- 1 7.518/1 黑褐色粘質土 堆山ブロック混入。

- 2 7.518/1 黑褐色粘質土 2.518/3 黄褐色粘土。白色粒含。【地山】

- 3 2.518/6 明黄色粘質土 白色粘土。【地山】



第33図 2001年度試掘確認調査遺構図（2）

4層山の自然堆積土であった。第4層の平断面で遺構の確認はなかった。

**遺物** 第3層よりガラス片1点、第1層より現代遺物1点が出土した。

**所見** これらのことより、当該地に遺構が広がる可能性は低いと考えられた。

## 11 ⑩地区（第33図）

調査日 2001（平成13）年10月3日

**調査対象地とトレンチ設定** 下館跡と同一段丘の南東辺において、東西7m×南北2mのトレンチを設定した。

**土層と遺構** 土層の堆積は、上層より第1層道路造成土、第2層旧耕作土、第3層床土、第4層木の根による擾乱、第5層地山であった。地山上面での遺構の確認はなかった。

**遺物** 遺物の確認はなかった。

**所見** 今回の調査地では遺構の確認はなかった。しかし、近隣の⑤地区での遺構検出面である地山が安定した状況で残っていた。このため、周辺区域での工事の際には注意が必要である。

## 12 ⑪地区（第33・35図）

調査日 2001（平成13）年10月18・19日

**調査対象地とトレンチ設定** 下館跡と同一段丘の南東辺において、南北5.5m×東西2mのトレンチを設定した。トレンチは水路で分断される。

**土層と遺構** 土層の堆積は、上層より第1層道路造成土、第2層旧水田耕作時に沼田の底に敷いた木板の造成土、第3層旧水田に関わる杭理土、第4層かつての用水路埋土、第5層かつての用水路基盤土、第6・7層遺構埋土、第8層下館基盤土、第9層地山であった。

遺構検出は第8層上面で行ったが、下館基盤土と遺構埋土の土質が近似しており平面では検出作業が困難であった。このため、第9層地山上面で遺構を検出した。遺構は下館基盤土から掘り込む柱穴12基を確認した。

**遺物** 第8層より縄文土器1点、第6層柱穴SP1埋土より縄文土器1点、柱穴SP7より土師器1点、柱穴SP8より土師器2点が出土した。128は柱穴SP7より出土した土師器皿である。内面にナデ調整を施すものの外側未調整であり、T-6類かT-7類と考えられる。

**所見** 今回の調査地では、現地表下60cmで下館基盤土を確認し、90cmで地山を確認した。中世期の遺構と遺物を確認したため、周辺区域での工事掘削が遺構面に及ぶ際には、調整が必要である。

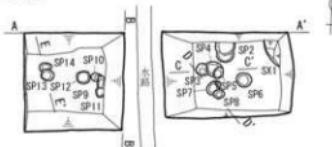
## 13 ⑫地区（第34・35図）

調査日 2001（平成13）年11月5～7日

**調査対象地とトレンチ設定** 下館跡と同一段丘の南東辺において、南北5.5m×東西2mのトレンチを設定した。トレンチは水路で分断される。

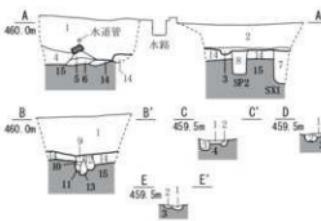
**土層と遺構** 土層の堆積は、上層より第1層道路造成土、第2層畑の造成土、第3層旧水田の下層の鉄分堆積土、第4層かつての用水路埋土、第5・6層かつての用水路基盤土、第7～13層遺構埋土、第14層下館基盤土、第15層地山であった。遺構検出は第14層上面で行ったが、下館基盤土と遺構埋土の土質が近似しており平面では検出作業が困難であった。このため、第15層地山上面で遺構を

## ①地区



## 【住地区 土層説明】

- 1 101R4/1 海灰色砂質土 6cm 大の礫混。【道路造成土】
- 2 101R4/2 黄褐色砂質土 1cm 大の礫混。101R6/2 黄褐色砂質土 (1cm 大の礫混) 30%混。【他の耕作土】
- 3 51R6/8 棕色粘質土 【他の底に堆積した耕作土】
- 4 101R6/6 明黄色砂質土 【道路造成前の用水の川底】
- 5 101R4/4 海灰色砂質土 1cm 大の礫混。【道路造成前の用水の底盤土】
- 6 101R6/4 にぶい黄褐色砂質土 【道路造成前の用水の底盤土】
- 7 2. 51V4/1 黄灰褐色砂質土 地山ブロック・1cm 大の礫混。101T/7 白灰色砂質土 (地山) [地山]



## 【住地区 SP1 ~ 5 土層説明】

1. 51R3/1 黑褐色粘質土 白色粘含。地山ブロック・炭化物。
2. 51R2/1 黑褐色粘質土 白色粘含。
- 3 101R2/2 黑褐色粘質土 地山ブロック层。
4. 2. 51R6/6 黄褐色砂質土 白色粘含。【地山】

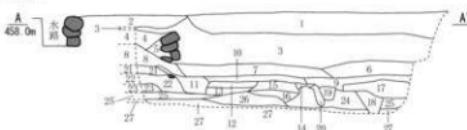
## 【住地区 SP7 ~ 8 土層説明】

1. 7. 51R2/1 黑褐色粘質土 白色粘含。
2. 101R2/1 黑褐色粘質土 地山ブロック层。
- 3 101R2/2 黑褐色粘質土 白色粘含。【地山】

## 【住地区 SP13 ~ 14 土層説明】

- 1 101R3/2 黑褐色粘質土 地山ブロック层。
2. 7. 51R2/2 黑褐色粘質土 地山ブロック层。101R4/3 にぶい黄褐色砂質土 30%混。
3. 2. 51R6/8 黄褐色砂質土 白色粘含。【地山】

## ②地区



## 【住地区 南壁土層説明】

1. 7. 51R1/7/1 黑褐色粘質土 【他の耕作土】
2. 51R/1 黑褐色砂質土 3 ~ 5cm 大の礫混。【道路造成土】
3. 101R4/1 海灰色砂質土 3 ~ 5cm 大の礫混。【辺縁・船を運めた土】
4. 101R5/8 黄褐色砂質土 0.5 ~ 1cm 大の礫混。【かづての石積みの裏込め】
5. 101R6/3 にぶい黄褐色砂質土 0.5 ~ 1cm 大の礫混。【かづての石積みの裏込め】
6. 101R4/1 海灰色砂質土 0.5 ~ 10cm 大の礫混。101R7/6 明黄色 20%混。【かづての食の底盤土】
7. 101R2/1 黑褐色粘質土 地山ブロック層。【かづての食の底盤土】
8. 101R2/2 黑褐色粘質土 地に耕作用。【かづての食の底盤土】
9. 51R1/1 海灰色砂質土 近江鉄筋解く堆積。【鉄分堆積土】
10. 51R3/8 黄褐色砂質土 全体に鉄分堆積。【近世の造出土】
11. 101R6/1 海灰色砂質土 全体に鉄分堆積。【近世の造出土】
12. 7. 51R4/2 黄褐色砂質土 1 ~ 7cm 大の礫混。【近世の造出土】
13. 7. 51R4/4 海灰色粘質土 1cm 大の礫・炭化物混。【近世の造出土】
14. 7. 51R5/2 黄褐色砂質土 前々に鉄分浸透。【近世の造出土】
15. 7. 51R5/2 海灰色砂質土 1cm 大の礫混。全体に鉄分浸透。【近世の造出土】
16. 7. 51R4/6 海灰色砂質土 1 ~ 8cm 大の礫混。全体に鉄分浸透。【近世の造出土】
17. 7. 51R5/4 黄褐色砂質土 鉄分浸透。【近世の造出土】
18. 7. 51R5/4 黄褐色砂質土 1 ~ 5cm 大の礫混。【SP1 地盤】
19. 101R3/1 黑褐色粘質土 1cm 大の礫・炭化物混。【SP2 地盤】
20. 101R4/1 海灰色砂質土 3cm 大の礫・炭化物混。【SP3 地盤】
21. 101R7/6 明黄色砂質土 2 ~ 5cm 大の礫混。【近世の整地造成土】
22. 101R5/3 にぶい黄褐色砂質土 1 ~ 8cm 大の礫混。【近世の整地造成土】
23. 7. 51R7/6 黄褐色砂質土 1 ~ 3cm 大の礫混。【近世の整地造成土】
24. 7. 51R7/1 黑褐色粘質土 1 ~ 5cm 大の礫・炭化物混。【近世の整地造成土】
25. 7. 51R7/3 黄褐色砂質土 2cm 大の礫混。【近世の整地造成土】
26. 7. 51R7/9 黄褐色砂質土 1 ~ 5cm 大の礫・炭化物混。【近世の整地造成土】
27. 7. 51R5/4 にぶい黄褐色砂質土 1 ~ 3cm 大の礫・炭化物混。【近世の整地造成土】

第34図 2001年度試掘確認調査構図(3)

## ③地区



## ②地区



0 5m  
1/100

0 15cm  
1/3

第35図 2001年度試掘確認調査出土遺物図

検出した。遺構は、下館基盤土から掘り込む柱穴13基SP1～13、土坑1基SX1を確認した。柱穴の並びなどは調査区が狭小のため検討できなかったが、遺構が密集する状況を確認することができた。

**遺物** 第8層柱穴SP2埋土より土師器4点、柱穴SP8より土師器1点、第4層より現代遺物1点、第2層より近現代陶磁器2点が出土した。129・130は柱穴SP2より出土した土師器皿である。ともに内面にナデ調整を施すものの外側未調整であり、T-6類かT-7類と考えられる。

**所見** 今回の調査地では、現地表下60cmで下館基盤土を確認し、90cmで地山を確認した。中世期の遺構と遺物を確認したため、周辺区域での工事の際は掘削が及ぶ可能性があり、調整が必要である。

#### 14 ⑬地区（第34・35図）

調査日 2001（平成13）年10月22～24日

**調査対象地とトレーンチ設定** 館東端部の半円形部分において、東西6.5m×南北2mのトレーンチを設定した。

**土層と遺構** 土層の堆積は、上層より第1層畑の耕作土、第2層道路造成土、第3層周辺一帯の造成土、第4層かつての道の造成土、第5層かつての石積みの裏込め土、第6・7層かつての蔵の基盤土、第8層かつての道の造成土、第9・10層鉄分堆積土、第11～17層近世の造成土、第18～20層柱穴埋土、第21～27層近世期の整地造成土であった。第24～27層は炭化物が混じるため人為的な造成土と考えた。第24・25層から近世遺構である柱穴が掘り込まれた、同時期に造成されたと考えられる。

**遺物** 第18層柱穴埋土より近世磁器、第8層より近世陶器、第5層より土師器が出土した。131は土師器皿である。体部が屈曲気味に立ち上がる器形から、T-4類と考えられる。

**所見** 今回の調査地は下館の範囲内であるが、中世期の遺構を確認することができなかった。1994年度調査の館内の遺構検出レベルが455.4m、3トレーンチでの遺物包含層検出レベルが455.8mに対し、調査掘削でのトレーンチ底面レベルは456.2mであった。このため、中世期の遺構面はさらに下層に存在する可能性がある。

第9表 2001年度上下水道工事に伴う試掘確認調査遺物一覧表

遺物番号	地点名	層位	種別	分類	部位	法量 (cm、括弧内は推定)			色調			備考(成形・文様等)	堆積	因縁
						口径	底径	高さ	内面	外側	断面			
125	GES01	-	土師器	瓶	口縁部	(11.0)	-	-	浅黄色 2.518/3	浅黄色 2.518/3	浅黄色 2.518/3	内面ロクロナデ R-2類	35	7
126	GES01	-	土師器	瓶	口縁部	-	-	-	灰白色 10188/2	浅黄色 10188/2	浅黄色 10188/2	内面ナデ、外側未調整 T-6.7類	35	-
127	GES01	-	戸戸美濃 直線大皿	口縁部	-	-	-	-	浅黄色 2.517/4	浅黄色 2.517/3	浅黄色 2.517/2	内面直線 古戸戸後期	35	-
128	GES01	-	土師器	瓶	口縁部	-	-	-	浅黄色 2.518/3	浅黄色 2.517/2	浅黄色 2.517/2	内面ナデ、外側未調整 T-6.7類	35	-
129	GES01	-	土師器	瓶	口縁部	-	-	-	浅黄色 2.518/3	浅黄色 2.518/3	浅灰色 2.518/2	内面ナデ、外側未調整 T-6.7類	35	-
130	GES01	-	土師器	瓶	口縁部	-	-	-	にぶい褐色 7.5187/3	にぶい褐色 7.5187/3	にぶい褐色 7.5186/3	内面ナデ、外側未調整 T-6.7類	35	-
131	GES01	-	土師器	瓶	口縁部	-	-	-	にぶい褐色 10187/3	浅黄色 10187/3	浅黄色 10187/3	内面ナデ、口縁近く立ち上がる T-4類	35	-

## 第4節 2002年度上下水道工事に伴う発掘調査

### 1 調査の概要

本調査は、神岡町殿地内における上下水道管敷設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。旧神岡町水道課が、下館跡周辺で実施する上下水道管敷設工事計画地において2001年度に試掘確認調査を行った結果、工事該当部分に遺跡の存在を確認した。このため、上下水道管敷設工事と同時並行で、2002(平成14)年10月4日～11月27日までの間、延べ25日間にわたって発掘調査を実施した。

調査は市道殿2号線道路敷内を中心に、農道殿6号線道路敷内の一部を含みつつ、本管敷設部分、及び一部宅内配管が必要な個人所有地内において実施した(第3図)。

調査面積は合計584m<sup>2</sup>である。水道管敷設工事と並行して調査を実施したため、調査区の名称を工事名称とあわせて1～5工区とした。

調査では、遺構(柱穴、溝、土坑等)、遺物(中世～近代陶磁器類)を検出し、記録保存を行った。なお、調査時の遺跡略号は「GES02」としている。

### 2 調査の成果

#### (1) 層位(第40・41図)

層位は各調査区壁を観察した。今回の調査区は一部個人宅内を除いては、ほとんどが道路敷内であり、上部から表層路盤層、下館基盤土、地山の3層に分かれる。

道路の構造上、表層の厚さはほぼ均一であるが、傾斜地に造成された道路であり、勾配緩和工法として船津花崗岩を敷き詰めている。そのため、今回の調査区では比較的勾配のある西北部では表層路盤層に厚みがあり、東南部へ向かうにつれて薄くなっている。

また、個人宅内については、敷設位置が畑地の場合は上層に耕土、その下に畑地の旧耕土または水田耕土であった。宅地造成された中を通過する場合は、道路路盤層もしくは宅地造成土、その下層に水田耕土が見られた。

#### (2) 遺構(第36～39図、第10・11表)

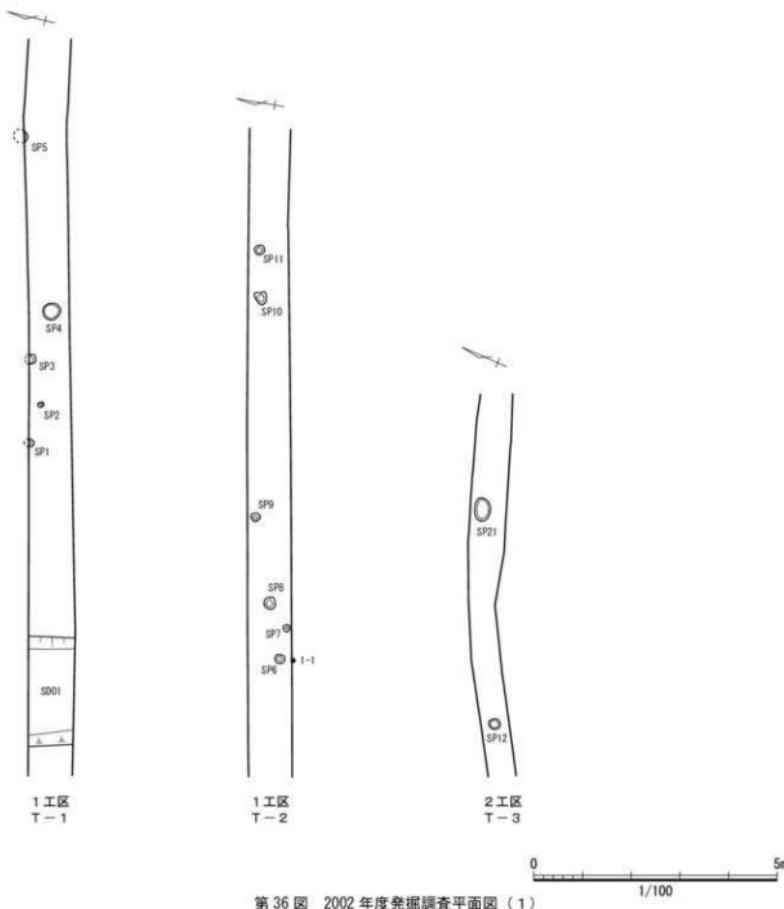
##### 柱穴

合計63基を検出した。形状別では円形35基、楕円形13基、半円形15基となる。

工区別では、第1工区で合計11基、第2工区では10基、第3工区からは7基、第4工区では13基、第5工区からは22基を検出した。

これを調査区の面積を元にした密度順に見ると、第1工区では11基/96m<sup>2</sup>で8.7m<sup>2</sup>に1基、第2工区は10基/74m<sup>2</sup>で7.4m<sup>2</sup>に1基、第3工区は7基/69m<sup>2</sup>で9.9m<sup>2</sup>に1基、第4工区は80基/80m<sup>2</sup>で1.0m<sup>2</sup>に1基、第5工区は22基/265m<sup>2</sup>で12.0m<sup>2</sup>に1基となる。最も密度が高いのは第4工区であり、最も薄いのは第5工区となる。

柱穴形状ごとに規模の大きいものをみると、円形最大は第4工区で確認した柱穴SP35であり、直径35cmを測る(第38図)。楕円形最大は、第2工区で検出した柱穴SP21であり、長径46cm、短径30cmを測る(第36図)。半円形最大は、第2工区で検出した柱穴SP17であり、長径40cm、短径30cmを測る(第37図)。

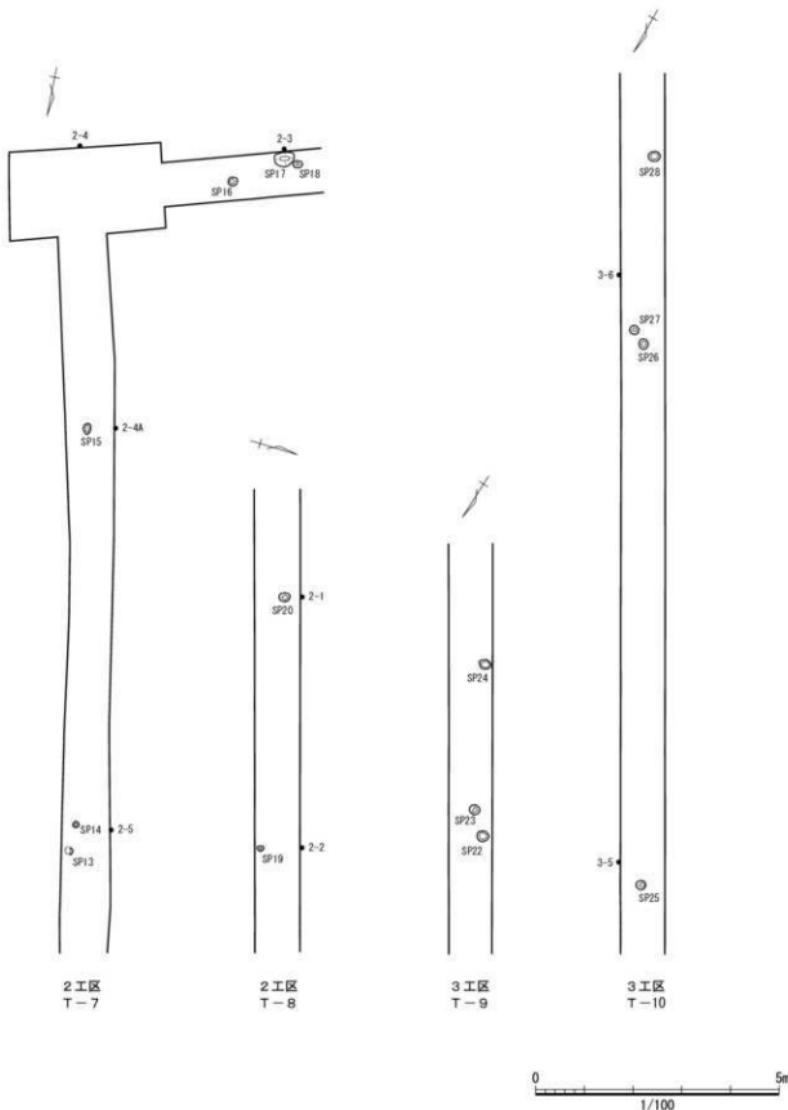


第36図 2002年度発掘調査平面図(1)

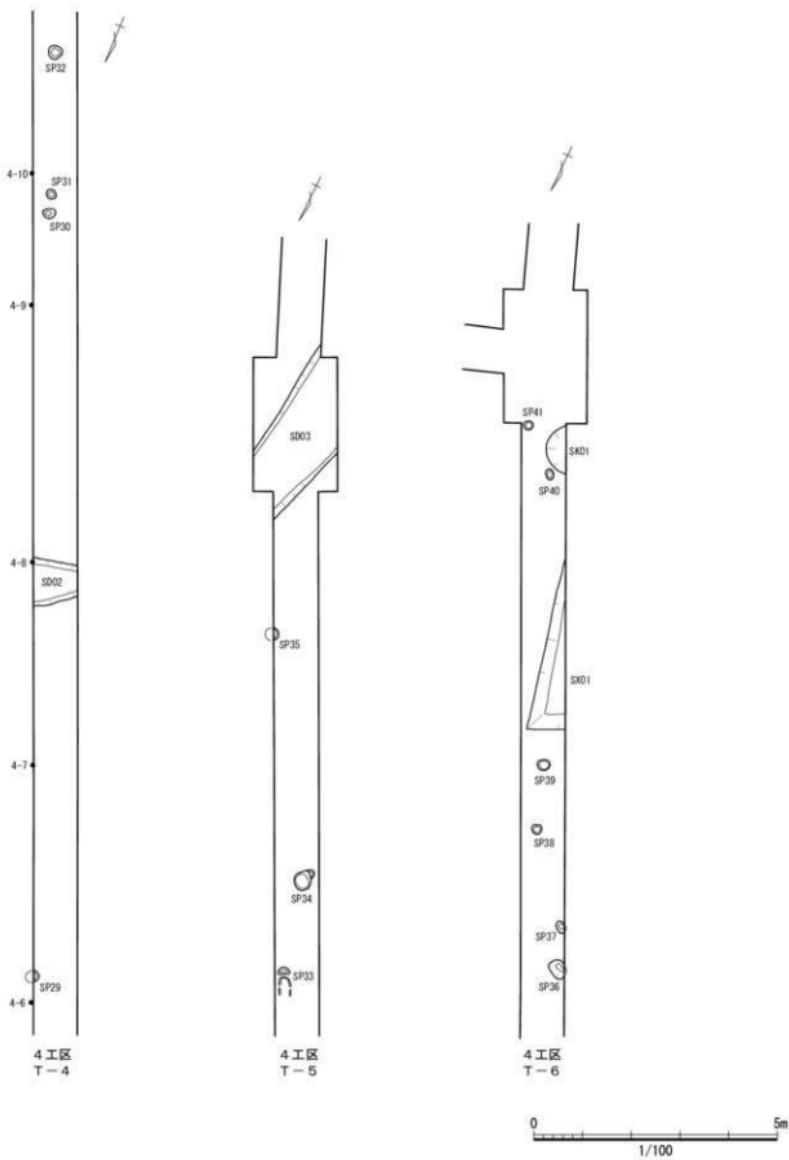
全体の規模では 40 cm 台 3 基、30 cm 台 5 基、20 cm 台 27 基、10 cm 台 22 基、10 cm 未満 1 基、計測業不可能による数値未詳のもの 2 基となる。最も多いのは 20 cm 台であり、これは下館跡の柱穴規模と同様の傾向を示す。

形状では SP51, SP53, SP55 が特徴的である。柱穴 SP51・SP53 は共に円形である。SP51 は径 32 cm であり、SP53 は 35 cm の直径を持つ。共に西北西に掘り下げた堀方を持つことから、柱根が斜めに埋め込まれていた可能性がある。

SP55 は SP53 に隣接し、長径 44 cm × 短径 30 cm、深さ 17 cm を測る。柱穴の底部に、長径 20 cm × 短径 15 cm、深さ 16 cm のビットが存在する。半蔵による確認は実施できなかつたため、本来一体の掘り方のものであったか、あるいは時期が異なる大小 2 基のビットであるかは不明である。



第37図 2002年度発掘調査平面図（2）



第38図 2002年度発掘調査平面図（3）

**溝** 今回の調査ではSD01～04の4基を検出した。いずれも調査区外へのびる。

SD01は第1工区で検出した。規模は、調査区北壁際で上端幅2.25m、下端幅1.75m、南壁際で上端幅2.18m、下端幅1.65mを測る。

SD02は第4工区で検出した。調査区北東壁際で上端幅1.0m、下端幅0.75m、南西壁際で上端幅0.62m、下端幅0.37mを測る。深さは35cmを測る。

SD03は第4工区で検出した。規模は、調査区北東壁際で上端幅1.48m、下端幅1.15m、南西壁際で上端幅2.25m、下端幅1.87mを測る。

SD04は第5工区で検出した。規模は、調査区北東壁際で上端幅0.5m、南西壁際の上端幅0.48mを測る。両方の下端については擾乱されており、計測することは出来なかった。深さは25cmを測る。

**土坑** 第4工区の南東隅、第5工区との境界に近い部分の南西壁際で検出した。

SK01は第4工区で検出した。検出部分の形状は半円形で、径96cmを測る。遺構は南西方向の調査区外へ延びる。

**不明遺構** SX01は第4工区で検出した。前述のSK01の約1.7m南東方向に位置する。検出部分の形状は直角三角形を呈しており、斜辺の南西壁面際では上端幅3.55m、下端幅2.33mを測る。遺構は南西方向の調査区外へと延びる。

### (3) 遺物（第42図）

遺物については第1～3・5工区において近現代の土層より34点を確認した。ほとんどが小片であり、接合するものはなかった。また、年代や産地が特定できないものもある。

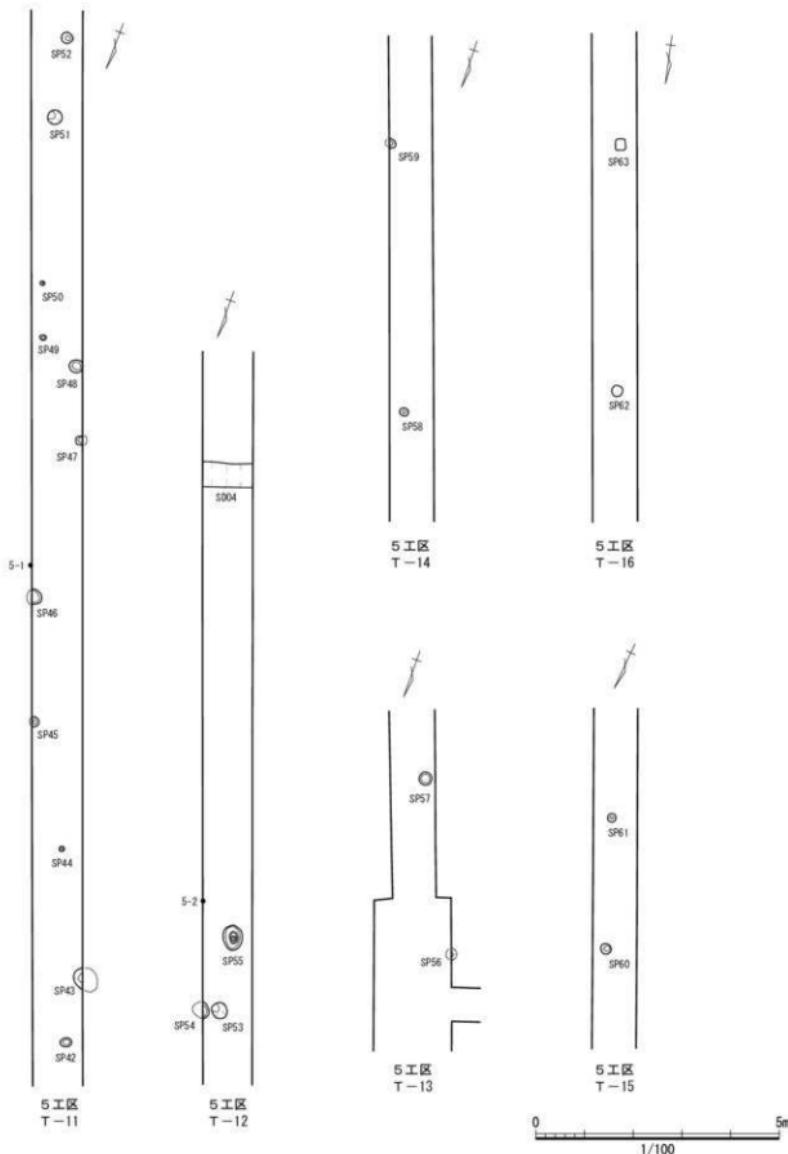
時代別では中世8点、近世12点、近代19点、器種としては瀬戸美濃焼、珠洲焼、中国製陶磁器、伊万里焼等である。

第1工区出土遺物では、土師器1点、瀬戸美濃焼1点、珠洲焼1点、近世陶器1点を図示した。132は土師器皿である。ナデにより口縁部を外反させるため、T-8類と考えられる。133は瀬戸美濃焼すり鉢である。内外面に錆袖を施す。内面の摩滅が著しい。134は珠洲焼甕の胴部破片である。外面に平行叩きの痕跡が残る。135は近世陶器鉢である。内外面に鉄袖を施す。

第2工区出土遺物では、瀬戸美濃焼1点、近世磁器2点を図示した。136は瀬戸美濃焼壺瓶類である。内面底部に釉薬がかかる状況から、広口瓶子のような器形が想定される。底部外面に釉薬が残る状況からは、意図的に塗られた可能性も想定される。137・138は近世磁器である。137は碗、138はそば猪口である。ともに内外面に染付を施す。細かな黒色粒がわずかに混じる胎土より、伊万里焼と考えられる。

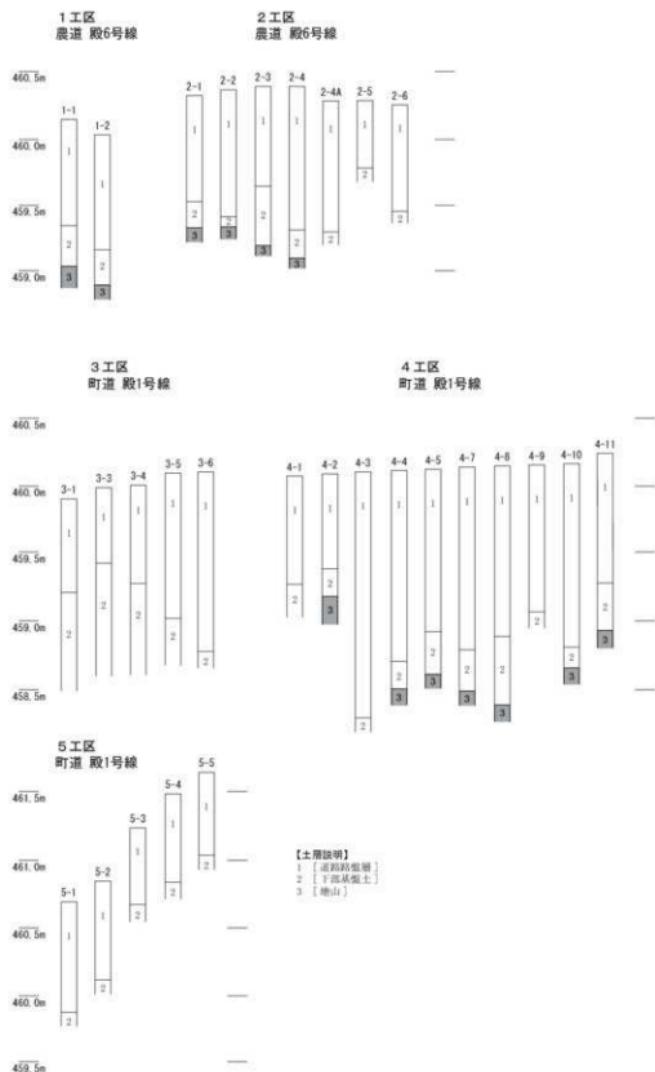
第3工区出土遺物では、近世陶器1点を図示した。139は近世陶器の壺瓶類である。内面に錆袖、外面に緑袖を施す。細かな貫入がみられ、底部外面には3文字とみられる墨書があるが、文字列の中央あたりで割れており、残存状況からは判読困難である。

擾乱層より出土した近世磁器2点・近世陶器2点を図示する。140は近世磁器碗である。全体に透明釉がかかり染付が厚く施される。染付の釉薬が厚く塗られる特徴からは瀬戸美濃焼の可能性が想定される。141は近世磁器皿である。全体に透明釉がかかり、内外面に染付が施される。胎土より瀬戸美濃焼の可能性がある。142・143は近世陶器すり鉢である。142は底部破片であり、内面にすり目が施される。143は口縁部片であり、内面にすり目がある。ともに瀬戸美濃焼の可能性がある。



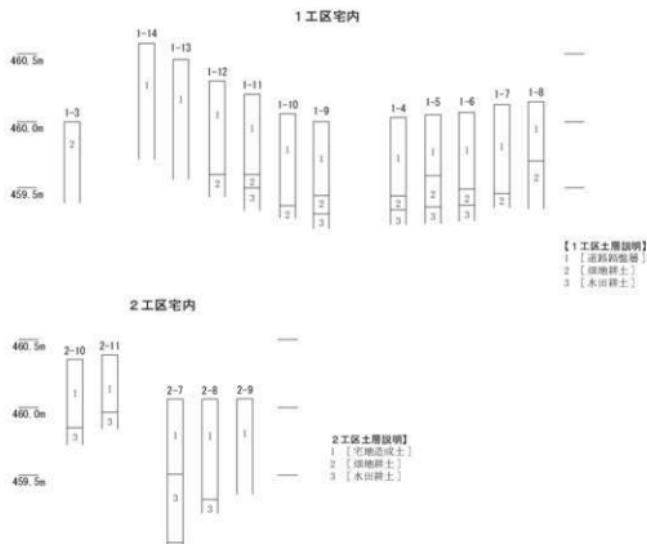
第39図 2002年度発掘調査平面図(4)

## 道路敷内調査区



第40図 2002年度発掘調査断面柱状図（1）

## 宅地内調査区



第41図 2002年度発掘調査断面柱状図(2)

## 3 2002年度上下水道工事に伴う工事立会I地区（第43図）

調査日 2002(平成14)年9月19・20日、11月13・22・25日

調査対象地とトレーニチ設定 下館跡に南接する市道における江馬氏殿遺跡の範囲内において、上下水道管理設の際に地山より深く掘削するため、工事立会により記録保存を行った。

土層と遺構 下館跡史跡指定地の南側外郭ラインに沿った東西方向のトレーニチ①、段丘崖の中腹位置のトレーニチ②及び③において、遺構の有無を確認した。

土層は、上層より、第1層道路造成土、第2層地山であった。第2層地山上面で遺構検出作業を行った。トレーニチ①においては、下館跡と同一段丘で柱穴10基、南端で確認した段丘崖の崖下で柱穴2基、合計12基の遺構を確認した。トレーニチ②及び③では遺構の確認はなかった。

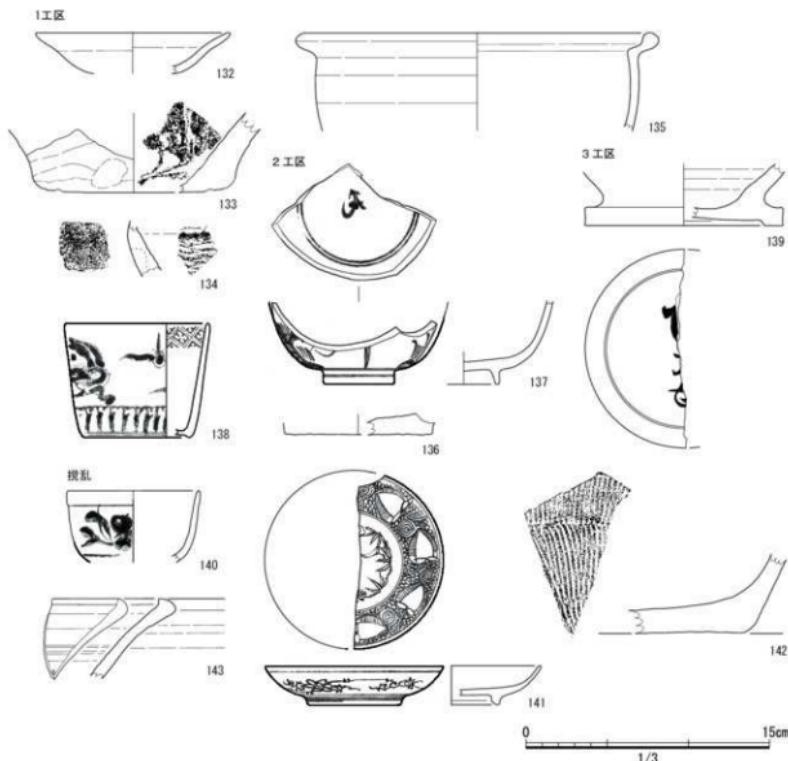
遺物 遺物の確認はなかった。

所見 今回の工事立会では、下館跡と同一段丘では柱穴遺構を多く確認したものの、南側の下位段丘に向かって遺構密度が薄くなる状況を確認した。

## 4 2002年度上下水道工事に伴う工事立会II地区（第44図）

調査日 2002(平成14)年9月25・26日

調査対象地とトレーニチ設定 下館跡東側の半円形部分の道路において、工事掘削の際に近世期の石組



第42図 2002年度発掘調査出土遺物図

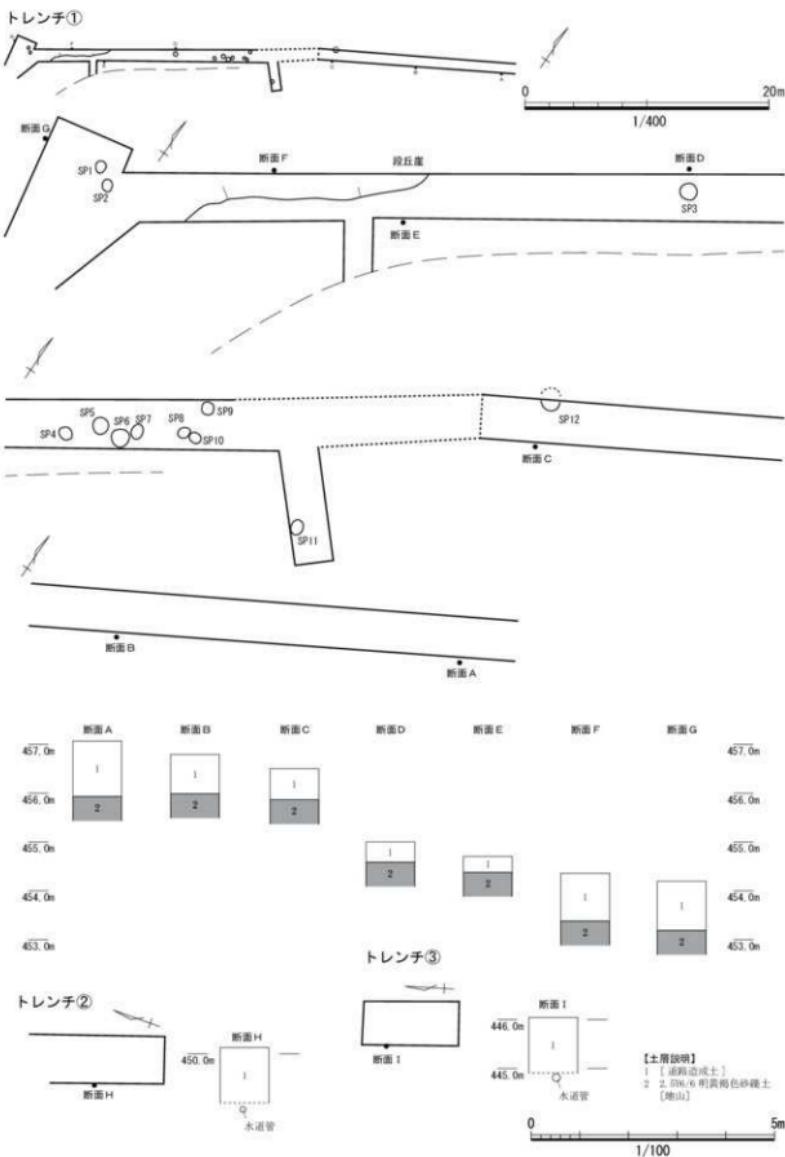
みを確認した。このため、3か所で石積み位置を平面図に落とし込む作業等を行った。中央をトレンチ①、北側をトレンチ②、南側をトレンチ③とした。

**土層と遺構** 土層の堆積は、上層より、第1層アスファルト、第2層現況道路造成土、第3層水田を埋め立てた造成土、第4層近世石組み裏込め土であった。

遺構はトレンチ①の平断面で近世石組みを確認した。このため、トレンチ②及び③において石組みの天端の検出を行い、石積みが道路下に埋まっている状況を確認した。

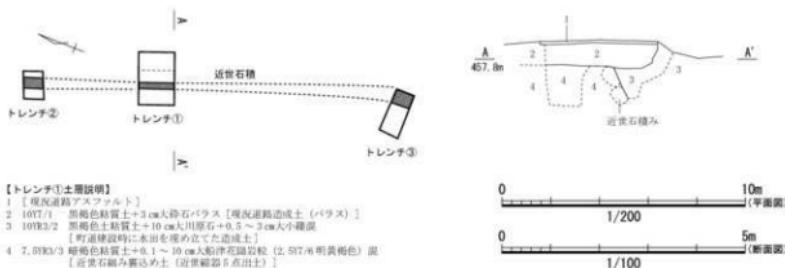
**遺物** 第4層近世石組み裏込め土より近世磁器5点が出土した。

**所見** 今回の調査対象地は、下館跡内の東端に位置する山麓である。そこで石積みを検出し、裏込め土からの出土遺物より近世期のものだと判明した。さらに調査地東側では建物建設に伴う調査第8地点において、一帯が近世期に敷地造成されたことが判明している。このため、この石積みは、造成の際に東から西への緩斜面に平坦地を確保するための盛り土の土留め用に近世期に造られたものと考えられる。



第43図 2002年度工事立会I地区遺構図

このように当該地は立地から中世期に生活が営まれた場であったことは間違いないが、近世期の盛り土の土留め用石積みを確認した。中世遺構は、近世盛り土の下層に残存している可能性が想定される。



第44図 2002年度工事立会II地区遺構図

第10表 2002年度上下水道工事に伴う調査遺構一覧表(1)

工区	NO	平面形	SP 長径 SD 最大幅 cm		SP 短径 SD 最小幅 cm		深さcm (下端-上端)	下端レベル m (道路標高-下端)	断面形	調査日	備考
			上端	下端	上端	下端					
1	SP1	半円	17	-	17	-	-	-	B	2002/10/4	T-1
1	SP2	円	12	-	12	-	-	-	B	2002/10/4	T-1
1	SP3	半円	20	-	20	-	-	-	-	2002/10/4	T-1
1	SP4	円	35	-	35	-	-	-	A	2002/10/4	T-1
1	SP5	半円	25	-	8	-	-	-	-	2002/10/5	T-1
1	SP6	椭円	20	-	16	-	123-121-2	458.92	-	2002/10/5	T-2
1	SP7	円	15	-	15	-	128-115-13	458.87	丸	2002/10/5	T-2
1	SP8	椭円	28	14	24	14	120-117-3	458.95	方	2002/10/5	T-2
1	SP9	円	18	-	18	-	-	-	-	2002/10/5	T-2
1	SP10	椭円	25	-	20	-	116-109-7	458.95	-	2002/10/5	T-2
1	SP11	円	17	-	17	-	115-107-8	458.96	-	2002/10/5	T-2
1	SP01	-	225	175	218	165	-	-	-	2002/10/5	T-1
2	SP12	円	24	-	24	-	-	-	-	2002/10/7	T-3
2	SP13	半円	10	-	5	-	124-116-8	459.32	-	2002/10/8	T-2
2	SP14	円	10	-	10	-	114-107-7	459.42	-	2002/10/8	T-2
2	SP15	半円	21	-	12	-	-	-	-	2002/10/9	T-2
2	SP16	円	19	10	18	10	116-107-9	459.61	-	2002/10/10	T-2
2	SP17	半円	40	19	30	19	118-113-5	459.59	-	2002/10/10	T-2
2	SP18	椭円	20	10	15	5	123-116-7	459.54	-	2002/10/10	T-2
2	SP19	円	13	7	13	5	111-103-8	459.62	-	2002/10/10	T-2
2	SP20	円	20	7	20	7	105-97-8	459.60	-	2002/10/10	T-2
2	SP21	椭円	46	-	30	-	-	-	-	2002/10/11	T-3
3	SP22	円	23	-	23	-	210-194-16	-	-	2002/11/6	T-9
3	SP23	円	23	-	23	-	210-196-14	-	-	2002/11/6	T-9
3	SP24	椭円	22	19	20	18	200-196-4	458.00	方	2002/11/6	T-9
3	SP25	円	18	-	18	-	204-198-6	458.96	-	2002/11/7	T-10
3	SP26	円	18	-	18	-	-	-	-	2002/11/8	T-10
3	SP27	円	16	-	16	-	-	-	-	2002/11/8	T-10
3	SP28	椭円	25	-	20	-	-	-	-	2002/11/8	T-10
4	SP29	半円	-	-	-	-	-	-	-	2002/11/13	T-4

第11表 2002年度上下水道工事に伴う調査構造一覧表(2)

工区	NO	平面形	SP 長径 SD 最大幅 cm		SP 短径 SD 最小幅 cm		深さcm	下端レベル m	断面形	調査日	備考
			上端	下端	上端	下端					
4	SP30	円	21	-	20	-	159-140-19	458.72	方	2002/11/14	T-4
4	SP31	円	17	-	17	-	154-138-16	458.77	-	2002/11/14	T-4
4	SP32	円	24	-	23	-	143-132-11	458.89	方	2002/11/14	T-4
4	SP33	半円	25	-	13	-	129-117-12	459.07	-	2002/11/15	T-5
4	SP34	椭円	37	-	30	-	128-116-12	459.09	方	2002/11/15	T-5
4	SP35	円	30	-	30	-	130-118-12	459.10	-	2002/11/15	T-5
4	SP36	椭円	49	24	30	10	119-104-15	459.30	-	2002/11/16	T-6
4	SP37	椭円	25	12	14	12	119-106-13	459.31	-	2002/11/16	T-6
4	SP38	円	15	-	15	-	123-112-11	459.30	-	2002/11/16	T-6
4	SP39	円	22	-	22	-	137-111-26	459.18	-	2002/11/16	T-6
4	SP40	椭円	20	-	14	-	-	-	-	2002/11/16	T-6
4	SP41	円	18	-	18	-	122-117-5	459.38	-	2002/11/16	T-6
4	SP02	-	109	75	62	37	35	-	-	2002/11/14	T-4
4	SP03	-	225	187	148	115	-	-	-	2002/11/15	T-5
3	SP01	-	96	-	-	-	-	-	-	2002/11/16	T-6
4	SP04	-	355	233	-	-	-	-	-	2002/11/16	T-6
5	SP42	椭円	21	-	18	-	-	-	-	2002/11/18	T-11
5	SP43	半円	43	-	20	-	139-108-12	459.43	-	2002/11/18	T-11
5	SP44	円	10	-	10	-	111-103-8	459.53	-	2002/11/18	T-11
5	SP45	半円	20	-	15	-	102-90-12	459.63	-	2002/11/18	T-11
5	SP46	半円	27	-	18	-	114-106-8	459.53	-	2002/11/18	T-11
5	SP47	半円	19	-	15	-	104-95-9	459.65	-	2002/11/18	T-11
5	SP48	円	26	-	26	-	99-92-7	459.71	-	2002/11/18	T-11
5	SP49	円	10	-	10	-	98-94-4	459.73	-	2002/11/18	T-11
5	SP50	円	8	-	8	-	101-96-5	459.79	-	2002/11/18	T-11
5	SP51	円	32	-	32	-	103-96-7	459.70	方	2002/11/19	T-11
5	SP52	円	22	-	22	-	130-99-31	459.44	-	2002/11/19	T-11
5	SP53	円	35	-	35	-	112-89-23	459.71	-	2002/11/19	T-12
5	SP54	半円	32	-	12	-	96-87-9	459.97	-	2002/11/20	T-12
5	SP55	椭円	44	20	30	15	121(164)-88-33	-	有段	2002/11/21	T-12
5	SP56	半円	22	10	12	7	88-80-8	-	-	2002/11/22	T-13
5	SP57	円	25	-	24	-	95-89-6	460.13	-	2002/11/22	T-13
5	SP58	円	14	-	14	-	98-89-7	460.27	-	2002/11/22	T-14
5	SP59	半円	19	-	14	-	88-80-8	460.42	-	2002/11/22	T-14 重複
5	SP60	円	21	-	20	-	104-91-13	460.36	-	2002/11/22	T-15
5	SP61	円	19	-	17	-	94-89-5	460.48	-	2002/11/22	T-15
5	SP62	円	-	-	-	-	124-108-16	-	-	2002/11/26	T-16
5	SP63	円	23	-	23	-	102-90-12	-	-	2002/11/26	T-16
5	SP64	円	58	-	48	-	25	-	-	2002/11/26	T-12
立会	SP1	円	15	-	15	-	22	-	丸	2002/11/22・25	I 地区①②③
立会	SP2	円	23	-	23	-	14	-	丸	2002/11/22・25	I 地区①②③
立会	SP3	円	29	-	20	-	25	-	丸	2002/11/22・25	I 地区①②③
立会	SP4	円	18	-	18	-	25	-	丸	2002/11/22・25	I 地区①②③
立会	SP5	椭円	26	-	21	-	25	-	方	2002/11/22・25	I 地区①②③
立会	SP6	椭円	35	-	28	-	52	-	丸	2002/11/22・25	I 地区①②③
立会	SP7	円	29	-	20	-	25	-	有段	2002/11/22・25	I 地区①②③
立会	SP8	椭円	24	-	19	-	46	-	丸	2002/11/22・25	I 地区①②③
立会	SP9	円	28	-	28	-	26	-	丸	2002/11/22・25	I 地区①②③
立会	SP10	円	29	-	20	-	18	-	丸	2002/11/22・25	I 地区④⑤⑥
立会	SP11	円	25	-	25	-	22	-	丸	2002/11/22・25	I 地区④⑤⑥
立会	SP12	円	-	-	-	-	-	-	丸	2002/11/22・25	I 地区④⑤⑥

第12表 2002年度上下水道工事に伴う調査遺物一覧表

遺物 番号	地 点 名	層位	種別	分類	剖面	法量 (cm、括弧内は推定)			色調			備考(形態、文様等)	排 出 基 準	
						口径	底径	器高	内面		外面			
									内面	外面	断面			
132	GE502	1区	土師器	黑	口縁部	(12.0)	—	—	にぶい黄褐色 10YR7/3	にぶい黄褐色 10YR7/3	内面ナゲ、口縁外反 T-8型	42	7	
133	GE502	1区 近世	漸戸美濃	すり鉢	体～底部	—	(12.0)	—	暗灰色 30Y3/0	赤褐色 2.5Y4/1	浅黄色 10YR8/3	外曲指オサエ、ナデ 内面ナリ日 内外鐵錆	42	—
134	GE502	1区	珠洲	甕	胴部	—	—	—	灰色 50R6/1	灰色 50R6/1	黄色 2.5Y6/1	外面平行印き	42	—
135	GE502	1区 新褐色土	近世陶器	林	口縁部	(22.4)	—	—	にぶい赤褐色 30Y4/3	にぶい赤褐色 30Y4/3	灰白色 7.5R8/1	内外面鐵錆	42	—
136	GE502	2区 慢丸	漸戸美濃	盃瓶	底部	—	(9.0)	—	オリーブ灰色 10Y6/2	灰白色 10Y7/2	灰白色 2.5Y7/1	内面一部貫入 内外鐵錆、内面一部貫入 古漸戸	42	—
137	GE502	2区	近世陶器	瓶	体～底部	—	(4.4)	—	灰白色 50R6/0	灰白色 50R6/0	灰白色 50R6/0	内外面染付、伊万里焼	42	—
138	GE502	2区 慢丸	近世磁器	そば猪口	口縁～底部	(9.0)	(6.6)	7.0	灰白色 50R6/0	灰白色 50R6/0	灰白色 50R6/0	内外面染付、伊万里焼	42	—
139	GE502	3区 鏡皿茶	近世陶器	盃瓶	底部	—	(12.2)	—	褐色 10Y4/4	オリーブ灰色 10Y4/2	灰白色 2.5Y8/2	外面底部黒青、錆錆 内面黒青、本素窓、19c後半	42	—
140	GE502	慢丸	近世磁器	瓶	口縁～底部	(8.0)	—	—	明緑灰色 7.5G8Y1	灰白色 7.5G8Y1	灰白色 7.5R8/1	内面染付 内外鐵錆 漸戸美濃窓	42	—
141	GE502	慢丸	近世磁器	瓶	口縁～底部	(11.0)	(5.8)	2.4	灰白色 50R6/0	灰白色 50R6/0	灰白色 50R6/0	内外面染付、漸戸美濃窓	42	—
142	GE502	慢丸	近世陶器	すり鉢	底部	—	—	—	灰褐色 50Y4/2	にぶい赤褐色 50Y5/3	浅黄色 10YR8/3	内面ナリ日 内外鐵錆 漸戸美濃窓	42	—
143	GE502	表振	近世陶器	すり鉢	口縁部	—	—	—	暗褐色 7.5H4/3	暗褐色 7.5H4/3	灰白色 50R6/2	内面ナリ日 内外面鐵錆 漸戸美濃窓	42	—

## 第5節 2015年度砂防堰堤に伴う試掘確認調査

### 1 調査の概要

本調査は、神岡町内における寺ナギ、島田洞、柄洞の溪流において計画された砂防堰堤工事に伴う試掘確認調査である。3溪流に対する堰堤のうち、寺ナギは史跡指定地外であり、地表面観察でも急峻な斜面であった。島田洞及び柄洞は史跡指定地内であり、また舌状尾根が位置する。このため、現状変更許可判断のために、2015(平成27)年10月8～14日にかけて試掘確認調査を実施した。10月12日には帝塚山大学教授(当時)宇野隆夫氏に現地指導を受けた。

調査区は、島田洞に堰堤1トレンチ、柄洞に堰堤2トレンチを設定した(第1図)。トレンチは幅1mのT字形とし、地形に合わせて長さを設定した。1トレンチは東西6m×南北4m、2トレンチは東西7m×南北3mである。

### 2 堰堤1トレンチ(第45図)

#### (1) 土層

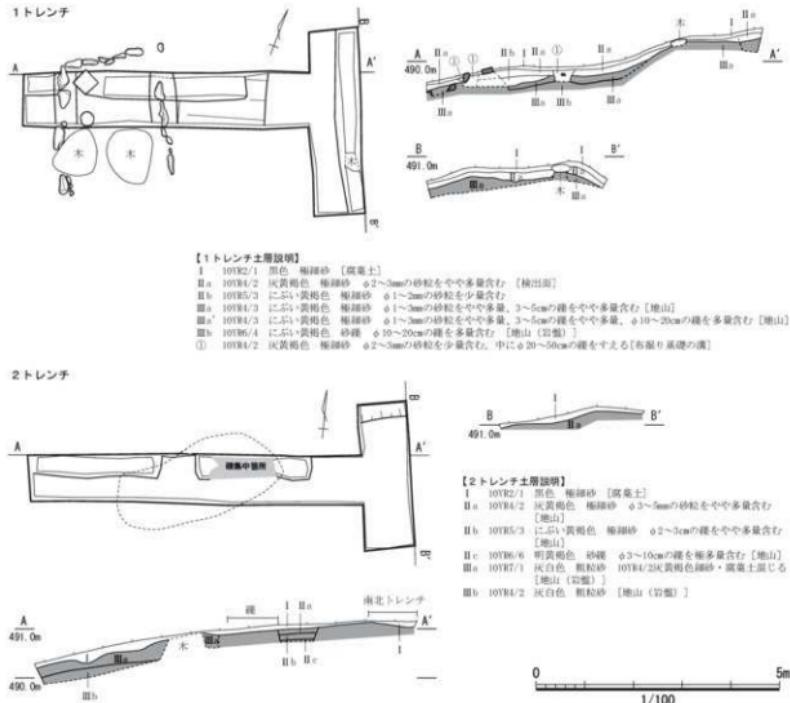
I層は腐葉土で、10cm程度である。II層は灰黄褐色～にぶい黄褐色極細砂で、2層に分かれれる。III

層は地山である。II層と近似し、III a～c の3層に細分できる。III a層はにぶい黄褐色極細砂を基本とし、礫を多く含む。特に、平坦面下段先端部分では極多量の礫を含むためIII a' 層とした。平坦面上段では確認できていないが、平坦面下段では岩盤が確認できたためIII b 層とした。

## (2) 遺構と遺物

堰堤1トレンチでは、現地形において平坦面を2段確認できる。調査区西側の一段下がった平坦面において方形布基礎の石列を検出した。概ね原位置を留めているが、一部は木根によって移動している。石列は地山を溝状に掘削し、その中に石を据える。このことから、布掘り基礎と考えられる。石材は近隣で採取できる船津花崗岩を中心に構成される。

方形布掘り基礎は、平面形状が南北方向に長い長方形を呈し、南北3.0m×東西2.4mを測る。布掘りの規模は幅約45cm、深さ約30cmを測る。石材は20～30cmのものを使用する。方形布掘り基礎



第45図 堰堤に伴う試掘確認調査遺構図

の北西隅に切石と扁平な円礫が出土しており、基礎の上部構造に伴うものの可能性が高い。飛騨地域において切石が使用されるのは近世以降と想定されるため、布掘り基礎も近世以降のものと推察される。また、上下2段の平坦面の間には法面がある。人為的に切られた切岸の可能性もある。

遺物の出土はなかった。

### 3 堀堤2トレンチ（第45図）

#### （1）土層

I層は腐葉土で、10cm程度である。II層は地山である。平坦面に堆積し、3層に分かれる。地表下約30cmで礫層が確認できる。平坦面先端付近に礫が集中してみられるのはこの礫層が露出したものと推測される。平坦面先端から西方向への緩傾斜面では腐葉土の下に砂層が堆積する。砂層は下層へいくほど混入物のない均質な砂となる。約20～30cmは腐葉土や根の影響により変色がみられ、もともとは同一層と考えられるが、ここでは2層に分けた。この砂層は平坦面先端の礫層の下へもぐっていいる。

#### （2）遺構と遺物

堀堤2トレンチでは、現地形において平坦面を2段確認できる。上段の先端付近に人頭大の自然礫が集中しているが、調査の結果、下層の礫が露出していると考えられた。2トレンチでは遺構・遺物を確認できず、トレンチ北側にサブトレンチを設定し、下層確認を行った。下層は砂層であり、砂層の上層20～30cmは根などの影響により茶色く変色し、根の影響のない部分では白色砂層となる。島田洞の堀堤1トレンチと同様に2段の平坦面で構成されることから、切岸の有無を確認するためサブトレンチで断面観察を行ったが、人為的な痕跡は見られず、自然地形と考えられた。

調査区の西側は丘陵先端に位置し、所々に道状の平坦面を確認できた。

### 4 所見

1トレンチでは方形布掘り基礎を確認し、その年代を切石の存在から、近世以降と考えた。また、2段の平坦面の傾斜については人為的に削平された可能性もあると考えることができた。これが切岸とすれば、中世期に上段の平坦面には何らかの施設があった可能性も想定できよう。

2トレンチでは、山城に関する確実な遺構・遺物を確認することはできなかった。

以上のように、今回の試掘確認調査では明確な山城遺構の確認には至らなかったが、1トレンチの2段の平坦面が、山城における何らかの施設であった可能性を想定することができた。今後の現状変更の際には、今回の調査成果を元に調整を行う必要がある。

## 第4章 下館跡周辺の空間構造

下館跡の中心区画については、1994（平成6）～2010（平成22）年度の史跡整備のための発掘調査により、遺跡の全体像が明らかとなっている（神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室1995～1997、神岡町教育委員会1998・2001、飛騨市教育委員会2010）。しかしながら、高原諫訪城跡や周辺の遺跡については、存在が知られるものの詳細な報告はなされていない（飛騨市教育委員会2019b）。ここでは、発掘調査成果を考えるために、高原諫訪城跡及び周辺の関連遺跡である岩ヶ平城跡、殿坂口遺跡において、地表面観察から認識できる遺構配置を確認しておきたい（第46図）。

### 第1節 高原諫訪城跡

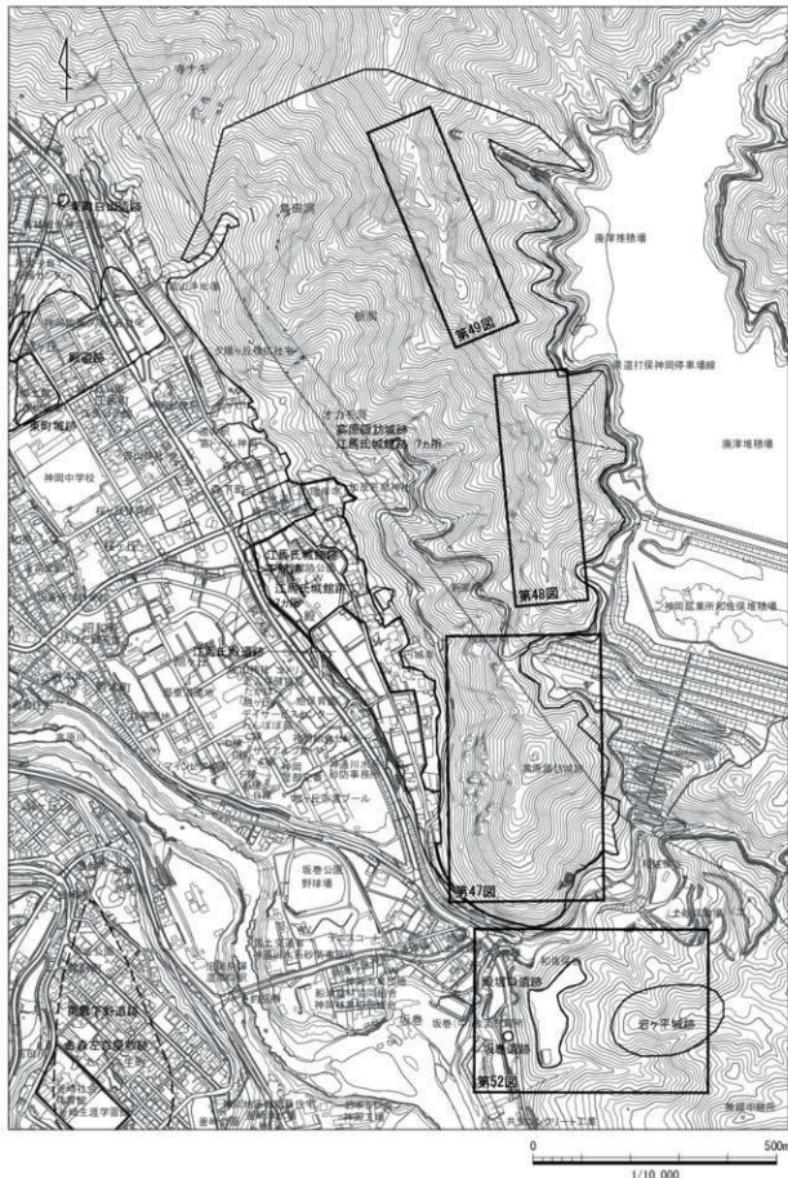
#### 1 環境と既往の調査成果

**地理的環境** 高原諫訪城跡は、中世高原郷の中心地である殿段丘を見下ろす。下館跡の背後に立地し、その立地から江馬氏の本城と伝わる。また、同一段丘の北東端に位置する東町城跡、遠くは高原川対岸の越中街道まで眺望が利く立地である。本城として神岡町内の中心盆地に立地するが、眺望が利かない街道や他の江馬氏の山城も多い。これらとの連絡については、西側に位置する傘松城跡を通じて行っていたものと考えられる。

**歴史的環境** 高原諫訪城跡に関する文献で最も著名なのは、寿楽寺所蔵の岐阜県重要文化財「紙本墨書大般若經」である。江馬輝盛が姉小路（三木）自綱に敗れた際に、小島城主の小島時光がこの大般若經を高原諫訪城跡から持ち帰ったと裏書きされている。それ以前の状況については、大下永により傘松城跡の調査の際に検討されている（大下2019）。それによると、江馬氏と古川町の勢力である姉小路氏一族の古川家とは、1516（永正13）には対立が表面化している。その後、南飛騨から進出した三木氏が1560（永禄3）年に姉小路氏古川家の名跡を繼ぎ、江馬氏と度々対立する。さらに、1564（永禄7）年に甲斐・信濃方面から武田勢が飛騨に侵攻して、高原郷も戦場になったとされる。このような状況からは、政治的緊張が高まった16世紀中ごろ以降には高原諫訪城跡も城郭として機能していたものと推測される。

**既往の調査研究** 城跡の存在は江戸時代の地誌『飛州志』にはすでに掲載される（岡村編1909）。そこには、現在は主郭と理解される曲輪、腰曲輪、麓まで続く堀切などが記される。また、明治刊行の『斐太後風土記』にも江馬氏が高原諫訪城を築城した記述が見られる（富田編1915）。これらからは古くから城跡として認識されていたことが分かる。

詳細な測量図を作成したのは、旧神岡町教育委員会である（神岡町教育委員会1979）。下館跡の発掘調査成果の位置から推定して、主郭から北側に連続する尾根を踏査し、数ヶ所の曲輪を発見し、測量図を提示した。当時の測量調査成果は大きく3つである。1つ目は、主郭周辺に曲輪だけでなく土塁や堀切などの遺構が多く発見したことである。2つ目は、北尾根において稜線上の尾根が四方から集まる頂上部分で、見張所か連絡所と推定される3か所の遺構を発見したことである。3つ目は、北尾根の北端の遺構が「南端の本丸、出丸に匹敵する規模」であり、「両隅に二ヶ所東西に堅堀を設けている」ことである。この詳細測量により広大な城域を認識できるようになった。



第46図 遺跡位置及び平面分割図

縄張りのあり方から、初めて城郭遺構と年代観を理解しようと試みたのは千田嘉博である。千田は、主郭周辺の縄張りを図示し、「16世紀半ばを中心一部後年にかけて改修されたと想定」した。また、北尾根に連続する城郭遺構を「高位の権力による遠見を目的とした砦」と理解して「個別の機能を持った城」と評価し、南北朝期まで築城が遡る可能性に言及した（千田 1995）。

岐阜県中世城館跡総合調査では、佐伯哲也が担当し、「堀切と堅堀のセットの使用」などのあり方から主郭周辺を「戦国末期に構築された」と考えた（岐阜県教育委員会 2005）。また、佐伯は連続する北尾根の遺構を「高原諏訪城跡上部遺構（仮称）」として縄張り図とともに記し、遺構の理解を試みた。佐伯は「上部遺構と高原諏訪城との親密性」がうかがえるが、「上部遺構は高原諏訪城より一世代古い遺構」と想定している。さらに近年検討を進め、主郭周辺は「江馬下館が廃絶した16世紀中ごろに構築された可能性」を示し、それが山麓居館から山上居住への画期と重なると考えている（佐伯 2018）。「高原諏訪城跡上部遺構」については、他の城郭遺構との比較から16世紀前半に下館跡の詰城として築城されたと考えた。なお、最も広い主郭とその南側に位置する曲輪について詳細な縄張り検討を行い、虎口構造や計画的な通路設定等に差異を見出している。その理由を、居住目的か軍事目的かという機能の違い、もしくは時期差の違いを示している可能性を想定している。廃城の時期については、石垣など金森氏による明らかな改修の痕跡が見いだせないため、1582（天正 10）年の江馬氏の敗戦とともに廃城になったと考えた。

飛騨市教育委員会では、2018年度に「江馬氏関連の城館跡の適切な保存活用を今後推進するため、詳細測量図を作成する」とし、微地形表現図と共に作成している（飛騨市教育委員会 2019a・b）。

## 2 高原諏訪城跡の構造

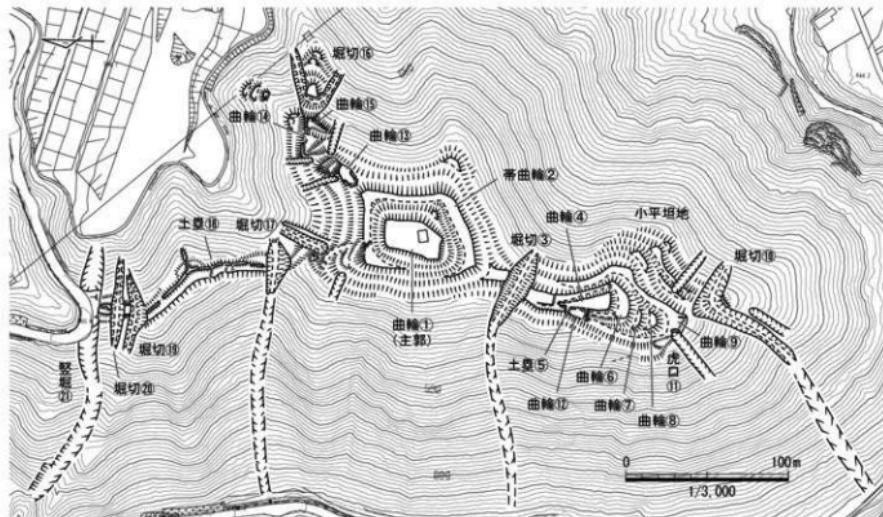
以上のような先行研究に学びつつ、飛騨市教育委員会が公開している赤色立体図と測量図をもとに現地踏査を実施し、遺構配置の理解につとめた。これまでの研究でも明らかにされているように、主郭周辺とそれに連続する北尾根とで遺構のまとまりが異なるため、主郭地区と北尾根地区に区分して詳述する。踏査は、2019年4月18日・2020年1月27日に行った。なお、2017年6月5日には江馬氏城館跡整備委員会で現地指導を受けており、その直前の2017年4月5日には同委員会委員の中井均氏（滋賀県立大学教授）から現地指導を受けた。

### （1）主郭地区（第47図）

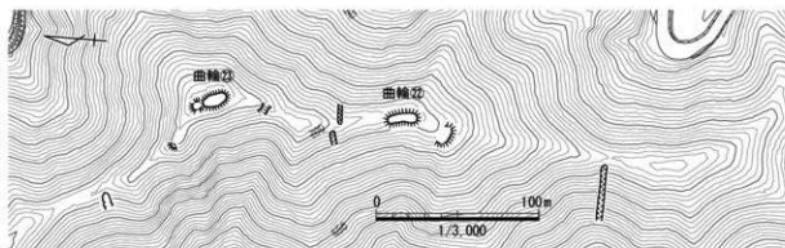
曲輪①は南北30m×東西16mを測る最も広い平坦地であり、主郭と考えられる。主郭の北・南・東には帯曲輪②が巡る。西側はつながっておらず南北で高低差も生じる。曲輪①と帯曲輪②の比高差は最大20mを測り、南東側の切岸中段に小平坦地の曲輪が存在する。

南側尾根には、比高差6mを測る堀切③を越えた南側に、主郭の次に広い平坦地である曲輪④がある。曲輪④へは横堀状を呈する通路が設定され、土壘⑤から曲輪④へ入るルートが想定できる。これが曲輪①（主郭）から曲輪④へのルート設定であろうが、堀切③で遮断されたため連続性は低い。

曲輪④の南側には、曲輪⑥～⑨の4段が連続する。それらの東側を通って曲輪④へ至るルートが設定されており、常に通路を監視できる構造である。そのさらに南側はV字状の堀切⑩とそれに伴う土壘及び堀切に沿った3本の堅堀により遮断する。西側の斜面には入口になると想定される虎口⑪が位置する。城下へ通じる登城道があった可能性があるものの、現状では確認できない。虎口⑪から北の通路へ入って曲輪④の西側に向かった場合、人の背丈より高い切岸に囲まれる狭小な曲輪⑫に取り付



第47図 高原譲訪城跡遺構配置図（1）



第48図 高原譲訪城跡遺構配置図（2）



第49図 高原譲訪城跡遺構配置図（3）

き、遮断される。東側斜面には堅堀の左右に小規模な平坦地が連続する。

主郭から東側は2本の尾根が派生し、南側尾根は1つの曲輪のみで谷筋に近い北側尾根に曲輪⑬～⑯を配置する。曲輪には3本の堅堀が伴い、先端に堀切⑯を設ける。曲輪⑬からはさらに2つの小さい尾根に分かれ、それぞれの尾根の先端にも小曲輪を配置する。この曲輪⑬～⑯は全て土塁で囲まれている。曲輪の平坦地も狭小なため、横堀状に通路を規定する意識があつた可能性も想定される。

主郭北側は、現状存在するつづら折れの通路に沿った小規模な曲輪と2本の堅堀を経て、堀切⑰で遮断する。東側の堅堀は西側より規模が大きく土塁が伴い、斜面の横移動をさらに制限する。堀切⑰の北側尾根に連続する小曲輪の東側に沿って土塁⑯を設ける。尾根が東へ延びる箇所は土塁を突出させ、T字状となる。これらは東側を警戒している。最も北に2重の堀切⑯・⑰と両堅堀⑰を配置し、主郭地区全体の防衛とする。それぞれの間には小さい平坦地を設け、堀切⑰と⑯の間の平坦地には東側に土塁が認められる。なお、⑰を堀切ではなく両方向の堅堀と判断した理由は、地元の方々より「現在の県道ができる前は尾根上を渡っていた」という聞き取りがあつたためである。

主郭地区の堀切のうち、堀切③・⑩・⑯・⑰は山麓まで延びているように観察できる。これらの性格を現状では把握できず、城郭遺構として認定できるかは今後の課題である。

以上のように、主郭地区は、最大規模の曲輪①（主郭）を中心に北・南・東の尾根に曲輪・堀切・堅堀・土塁等を配置し、それぞれの最も外側を堀切⑰・⑯及び両堅堀⑰で遮断する様相が明らかとなった。主郭自体も堀切⑰・⑯で区画されている状況であり、それぞれの曲輪の連続性は失われている状況であった（第50図）。

## （2）北尾根地区（第48・49図）

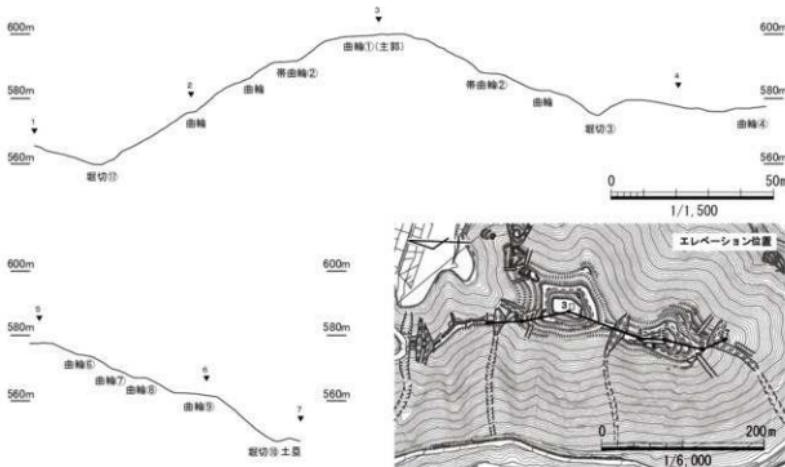
主郭地区の北側尾根に小規模な城郭遺構が連続する。主郭地区北端から450mほど離れて小規模な曲輪②・⑤が配置され、その前後に堅堀や堀切が位置する。さらにそこから650mほど北へ離れて小規模な曲輪⑧～⑩が断続的に続く。曲輪⑧・⑩は削平が甘い。曲輪⑨の北側に小規模な堀切が接続する。曲輪⑨の北側には明確な堀切⑪を設ける。堀切⑪の規模は主郭地区と遜色なく、東側は堅堀状に落ちる。堀切⑪より北側には城郭遺構の確認はできなかったため、曲輪⑨とその北側に取り付く堀切⑪が城域の最北端を区画するものである。

いずれも曲輪と堀切を組み合わせたもので、主郭地区に比べて単純な遺構配置となる。また、尾根北側には明確な遮断をするものの、主郭地区側には明確な遮断遺構はない。このため北尾根地区は主郭地区と親和性が高いと認識できる。このことは、既往の調査研究で指摘があるように、主郭地区と北尾根地区の城郭構造の違いは築城や改修の有無と時期差を示し、親和性の高さは同時期に使用していることを示している可能性がある。しかし、今回の調査で明らかにすることはできず、今後の課題としている。なお、曲輪⑨・⑩・⑪に取り付く東西の支尾根を踏査したが、急峻な斜面であり、城郭遺構を認識することはできなかった。

## 3 遺構配置と年代観

### （1）遺構配置

これまで見てきたように、高原諿訪城跡は主郭を拠点として3方向の尾根に城郭遺構が展開する。主郭の南側には堀切③、主郭に次ぐ広い曲輪④、堅堀、小規模平坦地を配置し、最南端には巨大な堀切⑯を設ける。東側には堅堀と土塁を伴う曲輪⑬～⑯を配置し、最東端に巨大な堀切⑰と小規模曲輪



第50図 主郭地区エレベーション図

を設ける。北側には堀切⑪、堅堀、土壘⑮を伴う通路を配置し、最北端に堀切⑯・⑰と両堅堀⑮を設ける。主郭自体も堀切⑬・⑰で区画されている状況であった。

これら3方向の遺構配置は、南側尾根では東側斜面に小平坦地群、東側尾根では土壘を伴う曲輪⑬～⑯、北側尾根では通路となる曲輪東側の80mもの土壘⑮等、全て東方向へ重きが置かれている。一方、西側には明確な城郭遺構を配置していない。西側は眼下に下館跡を見下ろし、正面の傘松城跡、同一段丘の北東端に位置する東町城跡まで眺望が利く立地である。これらのことから、高原諜訪城跡の西側は自身の領地と認識して城郭遺構を配置させず、越中方面から領地への防御を意識して城郭遺構を配置したものと考えられる。

また、北尾根地区にも小規模曲輪⑭～⑯が点在しており、それらは切岸や堀切と接続した単純なものであった。北尾根地区の主郭側に明確な遮断遺構が確認できないため、主郭地区と同時期に使用している可能性が想定される。

今回明らかにできなかった課題として、登城道がある。城郭遺構としては虎口⑪が存在し、そこに取り付く道を想定したが、遺構としては認識できなかった。しかしながら、虎口⑪の眼下には水道工事に伴って柱穴を多く確認した調査区が広がる。このため、山麓の集落から登った道を想定し、今後も調査を継続したい。ここで、眼下の下館跡及び江馬氏殿遺跡と高原諜訪城跡の立地を整理する。曲輪①(主郭)及び曲輪④の山麓には、発掘調査で柱穴を確認した水道工事に伴う調査地点がある。また、北尾根地区的南側の山麓には下館跡が位置し、北尾根地区的最北端では江馬氏殿遺跡の北端からも大きく外れる位置となる。このように第3章で報告した中世の遺構・遺物を確認した地点の山頂には、城郭遺構が存在することになる。登城道が明確にはなっていないが、山麓集落のどこからでも城郭遺構に達することができる状況が想定される。

## (2) 年代観

第2項で見たように、それぞれの尾根から曲輪①（主郭）に至るまでに幾重にも曲輪や堀切を巡らせており、各曲輪の連絡よりも主郭に攻めにくい構造を重視した遺構配置が認められた。このような通路設定等のあり方は、傘松城跡と近似する構造である。このため、高原諏訪城跡は江馬氏の最終段階である16世紀後半まで使用していたものと推定される。これは「大般若經」の奥書きとも一致する。石垣等の遺構がないため、金森期の改修ではなく、廃城となったと考えられる。

他方、現在地表面観察で確認できる遺構は最終段階のものである。主郭地区から北尾根地区までは南北方向で1.6kmにわたる広大なものであり、城郭遺構の構造も主郭地区が複雑なのに対し、北尾根地区は曲輪と堀切の単純なものである。この差異が年代差を示している可能性はあるが、改修によるものか築城によるものかについては、どちらの可能性もある。また、主郭地区内で佐伯が指摘したように改修にも時期差がある可能性がある（佐伯 2018）。

このように幾つかの可能性が想定される状況ではあるが、高原諏訪城跡の立地や周辺環境から築城及び改修の時期を推測する。まず、下館跡を包含する江馬氏殿跡が眼下に広がる状況からは、山麓との親和性が高い。ここからは、下館跡の整備された時期に築城された可能性が想定される。館としての整備は14世紀末の下館II A期である（飛騨市教育委員会 2010）。このため、高原諏訪城跡も同時期に築城された可能性を指摘しておきたい。また、歴史的環境に記した傘松城跡の検討では、16世紀中ごろに入ってから戦国期の城郭として十分に機能したと考えている。高原諏訪城跡と傘松城跡の遺構配置と近似したことからは、政治的緊張が高まった16世紀中ごろの改修の可能性を想定しておきたい。

## 第2節 殿坂口遺跡・岩ヶ平城跡

### 1 立地・歴史的環境と調査経過

殿坂口遺跡は飛騨市神岡町殿字坂口に所在し、高原川と支流・和佐保川の合流点付近の河岸段丘上、国道471号から約30mの比高差の地点に存在する。岩ヶ平城跡は字岩ヶ平に所在し、殿坂口遺跡から比高差約80mの東側尾根上に存在する。この2遺跡は和佐保川を挟んで北岸に江馬氏の本城と伝わる高原諏訪城跡が存在するため、江馬氏との関連が想定される。また、遺跡の西側段丘下には主要街道である越中東街道と有峰街道とを結ぶ上宝道が通っている。更に和佐保川北岸には越中・有峰まで続く山之村道が通り、北西段丘下の和佐保川北岸には上宝道・山之村道や古川・高山方面に続く脇街道の分岐点を間近に望んでおり、交通の要所に位置している。

当遺跡に関する中世以前の記録は確認できない。岩ヶ平城跡は近世以降の伝承も確認できないが、殿坂口遺跡は寺院跡と伝わっている。『神岡町史 資料編・別巻』（神岡町 1980）に所載の1870（明治3）年、結城梓著『殿村後風土記』に「山寺之古跡」という伝承地の記載があり、以下に引用する。

「山寺之古跡 本村ノ午方山ノ半腹に在リ、西面ニシテ後ハ山ヲ覆ヒ、此ノ山ノ峯ヲ駒立場ト云、左ニ深キ渓ヲ控ヘ、右ニ隣村和佐保村ノ渡渓渓在リ。西ハ高原川ノ流レ岸高ク又往来ノ通路有リ、上坡ハ東西六十六歩、南北二百九十二歩二坡ヲ下坊ト云、此地東西六十歩、南北二百九十五歩平地ナリ。愛ニ末寺坊舎在リト見エタリ。上坡ハ本坊ナリ屋舎地ト見ユル也。向宗何寺ト云フ事詳ナラズ、五ノ蓮華座残レリ。五ノ木鉢一ツ有リ、高サ四尺余リ環リハ改

不見、此ノ近辺ノ石ニアラズ、遠方ヨリ持來ルト見エタリ。屋舎ノ裏ノ山根ニ一森有リテ今小社有リ。所祭神名不知、村民山ノ神ト云伝エタリ、按ズルニ大山祇ノ神ヲ祭タル者ナルベキナ。又其傍ニ古墓ノ五輪石多く在リ、是ニ構ヘバ必ず崇リ有リ、寺号宗派何カ寺其外庵地ノ年曆等曾テ不伝、此下モ坊ノ地ニ百姓ニ軒住居セリ。元和年中ニ此二軒共ニ此地退散シテ船津町村ニ移リ居住セリ・・・(略)・・・。此地一面ニ畠トナリテ土地能ク穀物ヲ熟シテ山寺ノ畠下モ坊ノ畠ト字號レリ」

内容から殿坂口遺跡に関する記録と推定され、近世末期から明治初期ごろの当遺跡の様子を詳細に記載している。前半の立地的環境に関する記載は現状とほぼ一致し、上塙に位置する本坊・屋敷跡伝承地の「山寺」と末寺・坊舎伝承地の「下モ坊」の存在を伝えている。山寺は宗派・寺号・寺院名が不明で現地には石の蓮台座や石の水鉢が存在し、裏の山根に神名不明の社と五輪塔の石が多く存在していると伝えている。大正初期ごろの『殿村加茂若宮神社明細帳』(神岡町 1980)に加茂若宮神社の境内社として「山神神社 祭神 大山祇神」とあり、由緒として「字山寺」の地にあった天台宗寺院の鎮護山神で、1582(天正 10)年の諏訪城の落城時には既に荒廃して神社のみ残っていたという古老子の口伝を伝えている。この記録から、遺跡内に存在した社が明治末までに加茂若宮神社に合祀されたことが分かる。

その他、『神岡町史 資料編・下巻』(神岡町 1976)に所載の当遺跡付近の近世の記録を確認すると、1727(享保 12)年『飛騨国吉城郡御林山帳』には御林山として「岩ヶ平山」が確認できる。また 1844(天保 15)年に作成された『殿村御山内取調箇所附帳』には「岩ヶ平」のうちに「小字駒立場」「小字山寺」「小字下モ方」が確認できる。「駒立場」は柴草立て殿村より八丁の距離、孫字として「大峠」「岩ヶ平」を含むとある。「山寺」は草山で殿村より六丁の距離、「下モ方」は草山で殿村より六丁の距離とある。現状ではこれが「山寺」「下モ方(坊)」という地名が確認できる最も古い記録で、これらの小字名は明治 3 年の地名と対応している。少なくとも天保年間にはこの付近が「山寺」と呼称され、地元ではこの付近が山寺跡と伝わっていたと推測される。近世この地に寺社が存在したという記録は見えないため、伝承通りの山寺跡とすると中世に遡る遺跡と考えられる。なお、過去には下館跡周辺の検討に関わって 1694(元禄 7)年の殿村の検地帳を確認しているが(神岡町教委・富山大学 1996)、今回実見は叶わなかった。

このように山寺跡と伝わってきた殿坂口遺跡も、岩ヶ平城跡と一体の城館跡として認識されていた時期を経て(飛騨市教委 2010)、近年は遺跡の様相から別遺跡として認識されている。佐伯哲也は岩ヶ平城跡よりも前に営まれた山寺とし、縄張り図とともに紹介している(佐伯 2018)。また、当遺跡では複数の遺物(縄文土器・須恵器・青磁器・瀬戸美濃焼・珠洲焼)が採取され、三好清超が分析を試みている(三好 2016)。それによると、ミガキが施された縄文土器から縄文後期~晩期の遺跡が元々存在し、須恵器片から 9 世紀前半代になって当地で人の生活が営まれたと推定している。その後、遺物量が急増する中世には生活用具である珠洲焼に加え、江馬氏下館跡の出土遺物と遙かない輸入陶磁器の青磁等から下館と同時期に営まれつつ、五輪塔の下から採取された藏骨器の可能性のある瀬戸美濃焼の有筋の壺瓶類から中世以降墓域があった可能性を挙げ、中世寺院の存在を想定している。飛騨市の詳細分布調査においても、当遺跡は縄文時代・古代・中世の散布地と推定されている(飛騨市教委 2019a)。

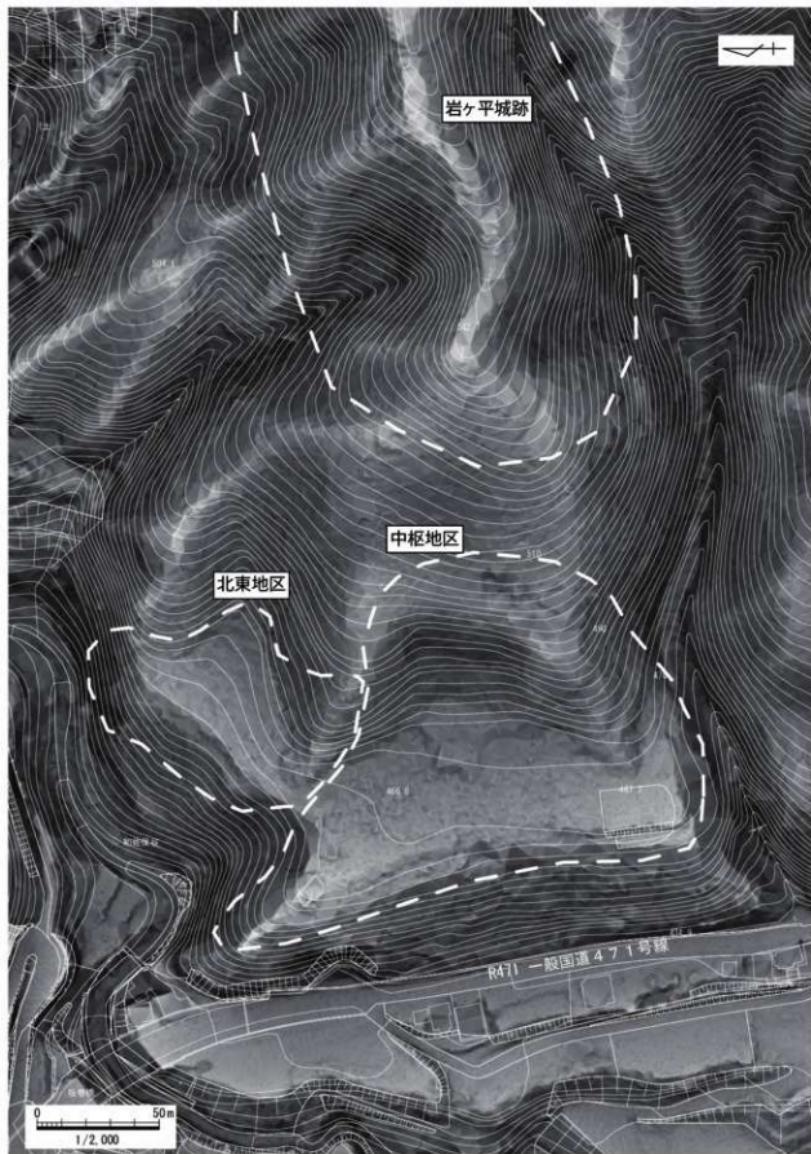
このように殿坂口遺跡は中世の寺院跡として伝わり、近年は様々な研究がなされて江馬氏関連の重

要な遺跡としても認識されつつあるが、山寺の遺跡としての構造を詳細に検討した研究は無い。そのため、遺跡の実態解明と江馬氏城館跡との関連を明らかにするために略測図を作成して空間構造を検討することとした。調査は、飛騨市が所有する周辺の赤色立体図をもとに平成31年4月18日に現地踏査を行い、順次略測図の図化作業を行った。同時に可能な限り古い時代の土地の状況を把握するために明治期に作成された旧公園（飛騨市保管）をもとに遺跡周辺の合成図を作成し、合わせて検討を行った。

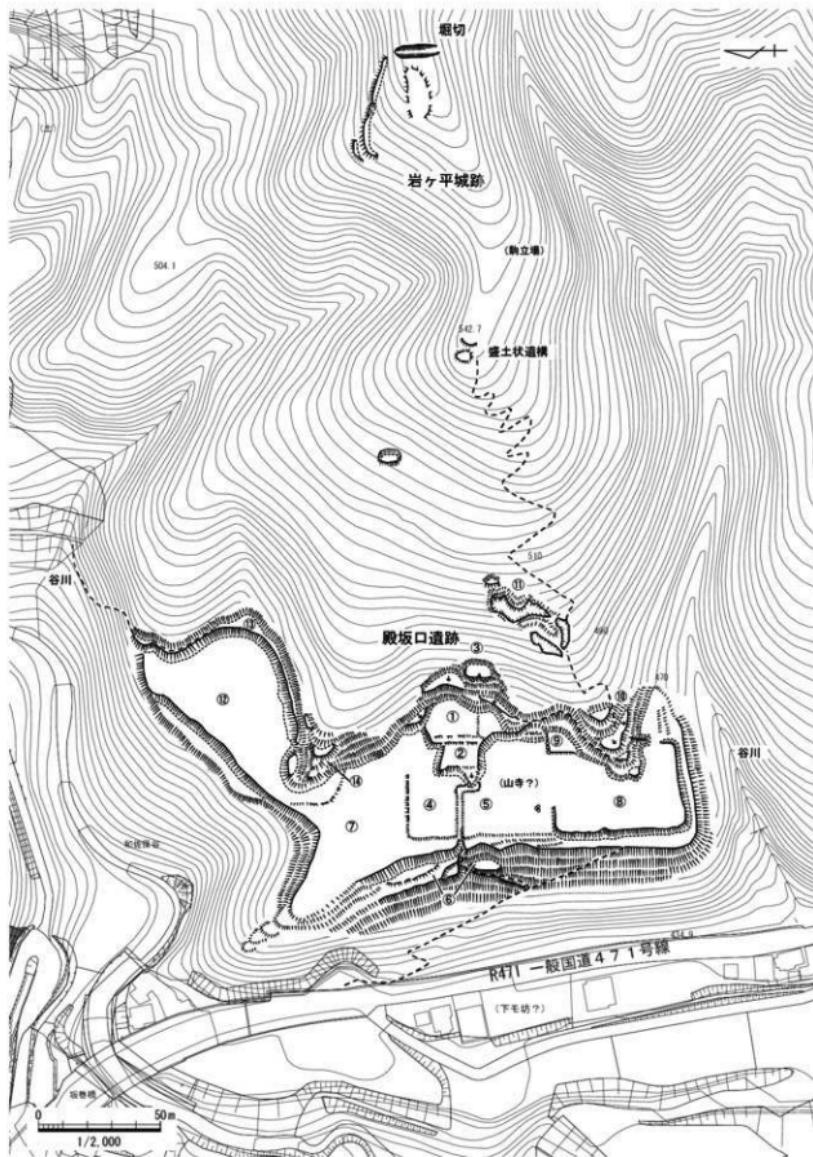
## 2 遺跡の状況

当遺跡は、岩ヶ平山の尾根及び山腹の河岸段丘上に位置する。殿坂口遺跡は高原川を望む西側の巨大な長方形の平坦地を中心とする地区（以下、「中枢地区」と、支流の和佐保川を望む北東側の地区（以下、「北東地区」）で構成される。また、「岩ヶ平城跡」も同一山腹の東側尾根伝いに位置する。この3地区に区分しつつ（第51図）、作成した略測図をもとに現況を整理した（第52図）。なお、「下モ坊」については記録類の内容から現在国道が通る殿坂口遺跡の一段下の段丘と推定されるが、宅地造成や国道開発によって遺跡としての確認は困難なため、旧公園による検討に留めた。

**中枢地区** 中枢地区的南北中央部の東側山際に一段高い土段の区画①・②が存在する。西側の段丘崖をつづら折れに登る山道が段丘面直下で屈曲し、段丘面においては10～20cm程度盛土された幅約2mの通路状遺構となって東側に直進し、クランクして①②に至る。この通路状遺構はそのまま南側の山際に続いている。①は東西約17m・南北42mの規模があり、西側斜面は方形を意識した直線で、東側は山の斜面によって不定形となっている。僅かな段差によって南北に区分されるが、②との取り付けからこのうち北側に中心的な施設が存在したと想定される。②との間には南北方向の通路と考えられる幅2m程度の段差が存在する。②は東西11m・南北15m規模の方形で、西側の通路状遺構に続くスロープ状の遺構が取り付いている。①②のうち、①は平面的な規模が大きく奥側に位置しているため、当遺跡で最も象徴的な場と推定される。周辺には礎石に使用可能な川原石が点在しているが建物としての並びは現状確認できない。また、①・②の土壇を構成する斜面の各所に石材が並んで確認できる箇所が複数存在するため、中心部の斜面は石積みが存在したと考えられる。①の東側上段の斜面途中に数段の小規模な平坦地が確認できる。特に平坦地③はよく削平され、西側斜面を中心に石積みが確認できる。平坦面の規模は東西5m・南北10mを測り、西側中央部に進入用の入口が確認できる。②の西側通路沿いには区画④⑤が南北に展開している。高低差は僅かであるが、それぞれ方形の区画割りが意識されている。区画④は東西25m・南北20mの方形で、西側は段差によって区画されるが東側の境界は不明である。④の南側と西側境界付近に図示はしていないが20cm程度の深さの溝状の窪みが認められる。区画⑤は東西38m・南北36mの規模を測り、北側と西側の境界は僅かな段差によって直線の区画が意識されている。東側は①②の斜面まで続き、南側も⑧⑨の土壇で区画されている。⑤の南部には礎石の使用が想定される大きさの扁平な川原石の集積が認められ、後世の耕地開発による移動と考えられる。④⑤の西側斜面直下の通路両脇にも小規模な平坦地⑥が存在する。通路を挟んで南側は東西4m・南北10mの規模がある。通路北側は東西8m・南北37mの規模があり、平坦地の北側部分は削平が甘い斜面となって上段の平坦地に取り付いている。平坦地⑥は通路との取り付きから門やそれに類する小規模な建物等の施設が想定され、北側の平坦地は上段に登る協道が存在した可能性がある。なお、⑥北側平坦地と通路の境界や、区画⑤と参道との境界付近には60～80cm程度の石



第51図 殿坂口遺跡・岩ヶ平城跡 地区区分図（ベース図：赤色立体図）



第52図 殿坂口遺跡・岩ヶ平城跡 略測図

を配した石列が確認できる。区画④の北側には区画⑦が存在し、東西最大 50m・南北最大 40m の不定形のプランである。南側は④の僅かな段差で区画され、西・東・北側は山の地形に沿ったものである。西側については平坦地と斜面との境界も明確ではない。また、⑦の東側の山裾は④でも見られるような溝状の窪みが確認でき、排水溝等が存在した可能性がある。

中枢地区の南側には東西 34m・南北 52m の規模がある巨大な方形の区画⑧が存在する。西・北・南側は方形の区割りがされており、東側は背後の尾根に取り付いている。また、⑧の西側から南側にかけて幅 2 ~ 5m 程度の通路状の平坦地が取り巻いている。⑧は僅かな高低差であるが⑤と明確に区画されているため、①～⑤等の中央部とは別個の性格を持った施設が存在したと想定できる。なお、当遺跡で採取された遺物は五輪塔下の壺片を除いて、すべて⑧の烟地から発見されている。この⑧東側山際には小規模な平坦地⑨が存在する。東西方向の区割りから⑧に伴うものと推測され、北側境界付近には石列が認められる。⑧の東側の尾根上にも平坦地群⑩が存在し、岩ヶ平城跡に到る山道が続いている。尾根付近には不定形の造成痕⑪が認められる。詳細は不明だが道跡である可能性や、直下の平坦地に雨水が流れないように流路を調整した可能性が考えられる。

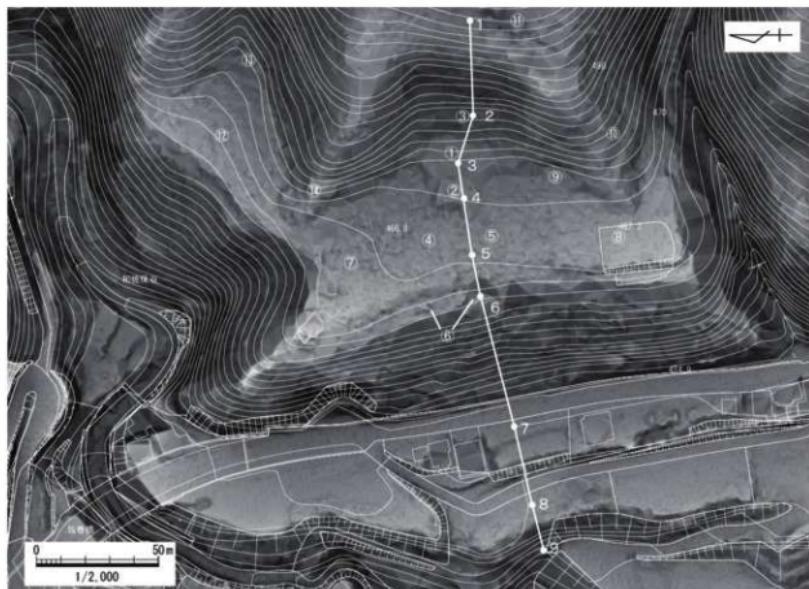
**北東地区** 北東地区は中枢地区と尾根の稜線を挟んだ北東側の山腹に位置する地区で、高原川支流の和佐保川を望んでいる。全体的に北面しているため中枢地区と比較すると日当たりが悪いが、和佐保川対岸に存在する高原諏訪城とともに、越中方面の山之村道を見下ろしている。

地区的中心となるのは地形に沿った半円形の巨大な平坦地⑫で凡そ 80m × 40m の規模がある。⑫内には明確な区割りは見当たらないが、南側の山の斜面約 1m 高い位置に通路状の平坦地⑬が確認でき、⑫の北側斜面にも削平が甘い通路状の平坦地が認められる。中枢地区との境付近の尾根上に小平坦地群⑭がある。⑭周辺には集石が点在し、斜面には部分的に石積みが認められる。南側（山際）の通路状の平坦地⑮は谷川に降りる道から登り、中枢地区と隣接する⑯付近まで取り付いている。谷川から確保した淨水を通路⑬を通じて平坦地⑫に降りずに直接中枢地区まで運ぶことが可能になっていている。この通路⑬の所々には川原石が認められるため、下部の斜面を護岸していた可能性がある。神岡町史編纂に関わる 2001 年 7 月 4 日の現地踏査記録（飛騨市保管）によると、⑯付近で集石とともに五輪塔を確認している。そのため、『殿村後風土記』にある「古墓ノ五輪石」という記載は、この平坦地群⑭を指している可能性がある。ただし、現状では五輪塔は確認できない。また、過去には通路⑬の南東側の谷地形の広い場所でも石積みを報告しているが（三好 2016）、現状では確認できず下部斜面の護岸石が数石認められる。

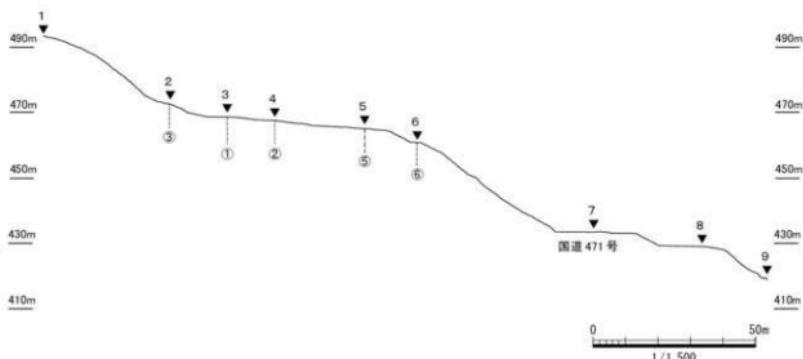
**岩ヶ平城跡** 岩ヶ平城跡は殿坂口遺跡の東背後の尾根続きに立地する。殿坂口遺跡の中心部①②を貫通する通路は平坦地⑮付近を通り、岩ヶ平城跡方面に登る尾根伝いの山道に続いている。よって、この平坦地を貫通する通路と尾根上の山道が、麓から山城へ至る主要な動線と想定される。平坦地⑮から東側尾根伝いに約 180m・比高差約 70 m 付近から岩ヶ平城跡の城域とされ（飛騨市 2018）、尾根筋が西に向かって分岐する地形で麓の集落・街道を見渡すことができる。明治 3 年『殿村後風土記』記載の「山ノ峯ヲ駒立場」という内容からこの尾根付近を「駒立場」と呼称したと考えられ、天保 15 年『殿村御山内取調箇所附帳』にある「小字駒立場」もこの付近を指すものと考えられる。この地点の尾根上に盛土状遺構が認められる。さらに東側尾根伝いに約 100m・比高差約 20m の地点には、なだらかな自然地形に近い平坦な場所があり、この平坦地の東側背後の尾根上に幅約 5m・高さ約 2m の堀切が設けられている。堀切は南側に向かって堅堀状となっている。この堀切の北側斜面には細長

い通路状の平坦地が数段確認できる。

岩ヶ平城跡の構造は単純ではあるが尾根伝いに来襲する敵に備えつつ北西部で合流する主要な街道を監視し、下館や高原諏訪城を中心とする江馬氏本拠との連絡を意識したものとなっている。曲輪の成型は自然地形に近く常住性は低い。そのため中世城館跡総合調査で示されているように（岐阜県教委 2005）、緊張が高まつた時期に臨時に使用された山城と考えられる。なお、西側突端の盛土状遺構は城郭構造との関連が判然とせず、下段の寺院との親和性が高い中世墓等の可能性がある。西側に



第53図 殿坂口遺跡 断面位置図（ベース図：赤色立体図）



第54図 殿坂口遺跡 断面図

取り付いている尾根上の山道も西側斜面下の殿坂口遺跡と接続している。堀切についても周辺の山城と比較すると小規模で殿坂口遺跡の存在を鑑みると寺域を区切る結界に類する遺構であった可能性も考えられる。このように岩ヶ平城跡は、先行する寺院関連の遺構や構造を継承しつつ、山城に転用した可能性が想定される。

**殿坂口遺跡の地形と平坦地の関連** 殿坂口遺跡について、遺跡の地形や段差の規模を確認するため、遺跡地の断面図を作成し分析した。断面位置は遺跡の中枢地区のうち、もっとも中心的な場と推定される①②の上部斜面から主要な平坦地を通って段丘下の街道まで設定した（第53・54図）。地点1は、主要な平坦面の東側斜面上である。地点2は主要な平坦地①②の上段に位置する平坦地③にあたり、地点3との比高差は約4mである。地点3および4は、それぞれ主要な平坦地①と②である。①②は石積みで護岸された土壇によって下段と区画していることが地表面観察より分かるが、全体的な地形を確認すると西側に向かってなだらかに傾斜する段丘面の自然地形を利用している。地点5は②の西側に隣接する通路沿いの区画⑤付近である。⑤も西側になだらかに傾斜する段丘面の地形に沿っている。⑤の通路北側に存在する区画④には西側と南側に溝状の窪みが存在し、傾斜する段丘面に沿って北西方向に排水するための遺構であった可能性が想定される。地点6は⑤の西側直下の平坦地⑥付近である。小規模な段丘崖と段丘面を利用して主要な段丘面の入口付近を区画していたと想定される。略測図を確認すると⑥よりも高い地点であるが南側の区画⑧にも通路状の細い平坦地が取り巻いている。赤色立体図も合わせて確認すると、地形の形状から主要な平坦地西側に取り付く小規模な平坦地は、元来存在した直下の低位段丘を利用して造成された可能性が考えられる。地点6とその下段の地点7は約30mの比高差の段丘崖となっている。地点7と8は「下モ坊」と推定される場所で、7と8は比高差5m程度の2段の段丘によって形成されている。地点9は下館方面から和佐保川を北岸から渡って信州方面へと続く上宝道にあたり、地点8と約10mの比高差がある。周辺の地形から地点2～6・7・8の段丘は大規模な隆起や高原川の下刻作用によって形成され、9は和佐保川の合流に伴って形成された扇状地と推定される。通行しやすい高原川沿いの扇状地を街道として利用しつつ、氾濫の可能性が低い高位の段丘面を継続的に土地利用してきた状況が推定できる。

### 3 旧公園による検討

飛騨市は2004（平成16）年の合併前の旧町村単位で1888（明治21）年頃作成の旧公園を行政資料として保管している。旧神岡町分についても大字ごとにまとめて保管している。これらは1885（明治18）年以降の岐阜県内における地籍編纂事業によって地籍帳とともに作成された地図であると考えられる（飯沼2017）。旧公園の保管状況は合併前の自治体によって異なるが、旧神岡町分は概ね2種類の公園が保管されている。一つは「全図」で一枚の紙に大字をすべて書き入れた村限の図であり、基本的には字境と官有道・水路のみが記されている。もう一つは「字絵図」で小字毎に一枚の紙（対象となる字の広さによっては複数枚）に描かれ、大字境・小字境・道・水路の他に土地境界や地番・地目が記されている。また、一筆の地目毎に色分けされている。一般的に道は赤色、河川・水路は水色、宅地は桃色、原野・芝地・山林を薄緑色、寺社地・墓地を茶色で部分的に彩色し、田畠は彩色していない。今回、主として使用するのはこの「字絵図」である。更に同じ地区の「字絵図」についても2種類確認できる。一つは薄い和紙に描かれたもので、厚紙の表紙・裏表紙を用いた45×31cmサイズの冊子に大字（組）ごとに綴じられている。今回対象地の般組の場合は「明治廿一年十月調／吉城郡

阿曾布村殿組字絵図」と表紙に記されている。内容の特徴としては後年の加筆は非常に少ないことが挙げられる。もう一種類は厚手の和紙に描かれたもので、布地厚紙の表紙・裏表紙を用いた 46 × 29 cm サイズの冊子に綴じられている。表紙には殿組の場合「神岡町大字殿絵図」という題紙が貼られている。こちらの公図は土地境や地目の等について度々加筆した形跡があり、料紙自体が劣化している場合も多いため、新たな公図が作成されるまで修正を加えながら継続的に使用されたものと考えられる。この 2 種類の公図は大枠の大字・小字境の記載は共通しているが、前者の方が修正の痕跡が少なく、より古い土地の様子を復元する目的として最適である。そのため、合成図の元資料として前者の使用を優先とした。なお今回直接の関係は無いが、例えば大字麻生野は前者の図面が確認できないものがあり、確認できる大字内でもすべての小字分は揃っていない場合もある。

江馬氏の城館跡については、小島道裕が旧公図を用いて下館跡と東町城跡の検討を行っている（神岡町教委 1995）。同様に今回、殿坂口遺跡・岩ヶ平城跡周辺の旧公図をトレースし、現地形と重ね合わせた図を作成し検討した（第 55 図）。図化の際は字同士で不整合が生じてしまうため、地形図に合わせながら適宜修正・変形を加えている。特に山林部分は精度が低いため、稜線や谷地形に合わせて地割線を引き直している。なお分析にあたって遺跡の地区割や平坦地番号等は全項の区分を踏襲した。

殿坂口遺跡は現在も一部が耕作地として利用されており、地表部は明治期以降の土地利用の影響を受けていると考えられるが、全体的な地形の状況は旧公図の様相と一致している。字坂口に位置する中枢地区と北東地区は大半が畠地であり、東側の山際に字岩ヶ平と接する。畠地は略測図で区分した場所ごとに観察すると概ね 2 ~ 3 区画に分割され、段丘縁辺部にある平坦地⑥は上部の畠地と合わせた地割となっている。北東地区から中枢地区にかけての山際に段丘崖には細長い芝地が取り巻いており、南部の区画⑧も西・南・東側にかけて細長いコの字状の山林が存在する。これらは現在も通路状の細長い平坦地や斜面上の小規模な平坦地として認められる。南側尾根付近には墓地が存在し、現状も同様である。字岩ヶ平は大半が山林であるが、字坂口の境界付近に一部芝地が認められる。山際は地表面観察で小規模な平坦地が確認できるため、その状況を示している。また、西側の字坂口に接する部分の山林は細かく割地されている。これは殿坂口遺跡の利用状況に影響を受けているものと考えられる。

特徴的のは道のあり方である。麓の下モ坊伝承地から段丘崖をつづら折れに登り、段丘面直下で屈曲し、段丘面に至ると東西方向のやや斜めの直線通路となり、L 字の芝地付近でクランクして中心部を貫通して南側の山際へと続いている。これらの道の様相は地表面観察の状況とほぼ符号し、もともとの山寺の参道を廃絶後も継続的に使用した状況が読み取れる。ただし、現在は⑧東側尾根上の岩ヶ平城跡方面の山道や段丘崖の途中から分岐して南側の⑧下部の通路状の平坦地に取り付く道が存在するが、旧公図では認められない。尾根上の山道は官有道として認定されず、そもそも旧公図に図示されていない場合が多いと推測されるが、段丘崖中の分岐した道は 1888 (明治 21) 年以後に開削された可能性が高い。

下モ坊推定地の西側段丘面は和佐保川の岸に宅地 2 筆と墓地 1 筆認められる他は、主に耕地として利用されている。殿坂口遺跡に登る道の南北に存在する畠地の区割りは、上段と同じく方形が意識されており、山寺に関連した院坊や屋敷等の施設の存在が推定できる。殿坂口遺跡に登る道は段丘崖の間際で大きく屈曲し、段丘面中部付近で二股に分かれて高原川沿いを南北に通過する上宝道にそれぞれ合流している。道のあり方は寺院中心部までの明確な通路設定とともに、主要街道との接続を意識

した構造となっている。また、道の周辺に展開する平坦地の区画は、上段と寺院中枢部のあり方と一致する。

更に周辺に目を向けると、殿坂口遺跡の和佐保川を挟んで対岸には山之村道が通り、北東側の対岸付近で上宝道と古川・高山方面への道に合流している。和佐保川は潜入蛇行しながら高原川に合流し

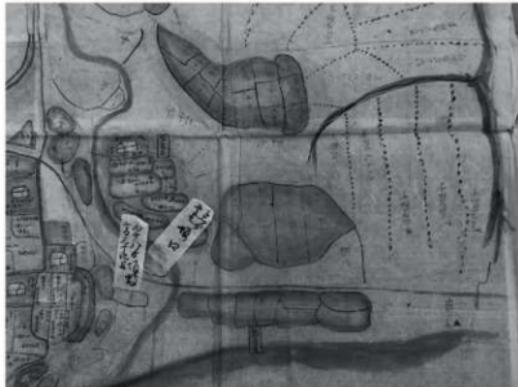


第55図 殿坂口遺跡・岩ヶ平城跡周辺 旧公園合成図

ており、川の各カーブ付近には段丘面が形成され、明治期にも川沿いの段丘面を利用した耕地が点在している。

遺跡地より古い様相を確認するため、1876（明治9）年作成『改正地引帳』及び1877（明治10）年作成『殿組地引絵図』（ともに神岡町史編纂室所蔵）を確認した。地引絵図は明治21年作成の字絵図と比較すると地図としての精度は低いが、地引帳と対照することで明治9～10年時点での土地の形状と利用状況を把握できる。今回の確認結果として、平坦地部分は耕地として、山の斜面は山林として利用され、土地の形状や利用状況が明治21年の情報と概ね一致した。そのため、明治10年～21年の間に大きな土地改変は無く、土地の状況は近世以前に遡る可能性が高い（第56図）。なお、相違する点として北西斜面下の宅地付近は孫字として「家ノ前」とあり、上宝道の通る高原川沿いの段丘は「字上川原」とある。

以上の遺跡周辺における旧公図の検討から、当遺跡の明治期の様相は現在と大きな変化は無く、遺跡の残存状況は非常に良好であることを確認した。西侧下段の下モ坊推定地は開発によって現状は遺跡としての確認はできない。しかし、旧公図からは川沿いに上宝道が通る様相や、街道への接続を意識した寺院の参道とその周辺に展開する寺院関連施設の存在が想定できる。



第56図 殿組地引絵図 殿坂口遺跡周辺

#### 4 殿坂口遺跡・岩ヶ平城跡の空間構造と歴史的考察

これまでの現状の観察と旧公図の検討を踏まえ、遺跡の構造について殿坂口遺跡を中心として考察したい。殿坂口遺跡は街道から遺跡中心部に至る明確な通路設定や仏堂の配置が想定される整然とした配列の複数の土壇の存在から、伝承や先行研究で推測される通りの山寺跡の様相を呈している。そのため、殿坂口遺跡を中世の山寺跡と仮定し、飛騨地方に所在する中世山寺の空間構造に関する論考（大下 2018）を基準としながら、山寺としての空間構造を検討したい。この論考では飛騨地方に所在する大威徳寺跡（下呂市御厩野）・千光寺（高山市丹生川町）・清峰寺跡（高山市国府町）・光寿庵跡（高山市国府町）・安寧寺跡（高山市国府町）・来迎寺跡（高山市江名子町）等の主要な山寺やその遺跡の略測図を作成し、様々な要素を以下のように比較検討している。

- (1) 機能の配置・・・一段の平坦地に諸要素が集中する寺院（大威徳寺）と複数の平坦地に要素が分散する寺院がある（清峰寺・千光寺・光寿庵・安寧寺）。
- (2) 神社信仰の場・・・境内に神社信仰の場が存在する寺院が多い（大威徳寺・清峰寺・千光寺）。その位置は中心となる仏堂の背後かつ上段に存在している。
- (3) 墓域・・・寺院の中心部やその周辺に墓域が存在する寺院が多い（大威徳寺・清峰寺・千光寺・

光寿庵)。その位置は中心となる仏堂から向かって左袖の奥まった場所に存在している。

- (4) 池の存在・・・中心となる仏堂の付近に池が存在する寺院が多い(大威徳寺・千光寺・光寿庵・安寧寺)。
- (5) 石積みの使用・・・中枢部の斜面や基壇等に使用している事例がある(大威徳寺・清峰寺・光寿庵)。
- (6) 参道と通路設定・・・麓から寺院中心部に至る参道は、例外なく地形に則した山道である。ただし、寺院中心部の参道は、山道とほぼ変わらないもの(清峰寺・光寿庵等)と、「山門+直線通路」がセットで存在するもの(大威徳寺・千光寺)という2類型がある。

この(1)~(6)の要素について殿坂口遺跡について以下の通り分析した。

- (1) 機能の配置・・・基本的にレベル差が殆どない一段の平坦地に諸要素が集中する大威徳寺に近い様相である。
- (2) 神社信仰の場・・・他の山寺の例から類推すると、中心となる仏堂①の背後かつ上段に平坦地③が存在する。また位置は異なるが、明治3年時点には墓域の付近に社があったと記録されている。
- (3) 墓域・・・周辺に集石遺構が集中し、中世墓等の可能性がある。過去には五輪塔も確認している。この周辺を墓域と仮定した場合、他の山寺と同様に中心となる仏堂から向かって左袖の奥まった場所に存在している。岩ヶ平城跡にも中世墓と想定できる盛土状遺構が存在する。
- (4) 池の存在・・・確認できない。
- (5) 石積みの使用・・・寺院の中中枢部①②③の斜面、④の一部に使用が認められる。⑦東側の山際にも一部認められる。⑥の参道沿いや⑨には石列が認められる。
- (6) 参道と通路設定・・・麓から寺院中心部に至る参道は、他の山寺と同様に地形に則した山道である。明確に山門は確認できないものの平坦地⑥付近に想定され、①②に向かって直線通路を志向したものとなっている。②に至る直前でクランクし、②①を通じて山上部へ至る尾根上の山道に接続している。その他、北東地区では谷川から中枢地区まで通じる山際の通路状の平坦地⑩が認められる。

以上から、遺跡内部の各地区的構造を検討したい。中枢地区は西向きで直下の上宝道を望んでいる。①②は中枢地区上段の奥まった場所に位置し、麓から参道が直結する様相から当遺跡の中で最も中心的な場所で本堂等の施設が想定される。並びに確認できないが、礎石に使用可能な川原石が①②付近に点在することから、建物は礎石建ちであった可能性がある。その上段に位置する平坦地③は石積みで護岸され正面に出入り口を設けている。平坦地③は丁寧な造成や精緻な構造に加え、中心となる仏堂の上段に神社信仰の場を配置するという飛騨地方の他の山寺の事例から推定し、同様に神社信仰の場であった可能性が考えられる。②に至る参道両脇の区画④⑤は①②正面の重要性が高い地区と考えられ、礎石状の石も点在することから、寺院の中中枢に近い性格を帯びた中心的坊院群の一部である可能性が考えられる。段丘縁辺部に位置する平坦地⑥は遺跡全体の入口と捉えられるため、山門等の施設が想定できる。中央部南側の区画⑧⑨については、整然とした方形プランを持ちながら、生活の痕跡がある遺物が出土していることや南側の谷の水場に近いことから、より生活の色彩が強い僧坊等の施設が想定される。中枢地区内の北側に位置する平坦地⑦については、墓域に近くプランも不定形の

ため、その性格は断定し難い。

北東地区は、墓域と推定される⑩を挟んで中枢地区と区画されている。支流の和佐保川を望み、谷川を挟んだ対向には高原諏訪城跡と越中方面に続く山之村道が存在する。北東地区からは和佐保川へ下る道も確認できる。この地区の中心を成す平坦地⑫は地形に則した不定形であり、中枢地区的平坦地群と比較すると区画に規則性が無い。更に中枢地区とは遺跡の向きが相違する上に墓域を挟むことから、明らかに様相が異なる。この地区的性格として3種類の性格が推定される。一つは寺院を営む人々の耕地としての機能(a)、一つは高原諏訪城と対になって街道を監視する機能(b)、一つは中枢の寺内組織とは別の勢力がこの場に存在したという可能性(c)である。(a)はこの地区は日当たりが悪く中枢地区と比較すると常住性が低いことから生産拠点として利用したという想定で、(b)は高原諏訪城との位置関係や主要河川・街道の見通し等、立地的な条件から想定される。(c)は別方向の参道設定や平坦地群が認められる場合、寺内に中枢とは別個の組織体制が存在したことが近江の事例で指摘されていること(藤岡2012)から可能性として考えられるが、他の飛騨の山寺ではそのような事例は確認できること(大下2018)や、当遺跡に関する史料が皆無であることから詳細は不明である。

なお、飛騨の山寺の多くは谷地形の湧水地等を利用して中心区画の近接地に池を造成している場合が多いが、当遺跡には見当たらない。遺跡内は水はけが良く湧水する場所が無いことや、南北両側の谷川から浄水を得ることが容易であったことが、池が存在しない要因と考えられる。

殿坂口遺跡の参道設定については、麓から中心部の平坦地に至るまでは段丘崖の斜面をつづら折れに登る山道を踏襲したもので、飛騨地方の他の山寺と同様である。この山道は途中から分岐して中心部方面の⑥に至るものと、平坦地⑧の東側に至る道が存在するが、旧公園には⑧東側に至る道は見当たらない。旧公園でも確認できる⑥に繋がる山道は、段丘縁辺部の⑥に差し掛かった付近で東に屈曲し、④⑤の間を通って②付近まで直進する通路設定がなされており、平坦地②付近でクランクしている。そこからスロープを登って中心となる仏堂①を通過して③下段の斜面途中を南進し、平坦地⑧東側の尾根に取りつく。この尾根から東側(岩ヶ平城跡)方面と西・南方向に派生している。岩ヶ平城跡に登るルートと、西・南方向に延びる土星状の通路によって⑧に降りるルートが想定できる。なお、⑧の南側と西側には通路状の平坦地が取り巻き、⑧の方形の区画を際立たせている。特に⑥から②に至る部分の直進を意識した通路設定は、大威徳寺や千光寺で認められるもので、飛騨地方の山寺においては珍しい例である。この2寺はいずれも寺内に複数の子院を持つ大規模な山寺であった。このような計画的な通路設定やそれを基軸とした子院群の展開がある場合は中央権力を志向したより発展した形態と捉えることができるため(大下2018)、当遺跡の運営主体についても中央権力を志向する相当規模の寺院勢力であった可能性がある。なお、上記のような主たる参道の他に、北東地区には南側山際を通る道が存在し、北東側の谷川に降りることができる。谷川の浄水を得事が可能で、なおかつ北東地区的平坦地⑫に降りずに中枢地区に至ることができる。同様に中枢地区①②の南側の通路も山際の一段高い場所に存在している。このように地区間を繋ぐ通路が山際の一段高い場所に設定されていることは、当遺跡の特徴的要素と言える。

次に当遺跡の寺域について検討する。岩ヶ平城跡の堀切は東側の寺域境界を示した遺構を転用した可能性が考えられ、南側は大字麻生野との境の尾根の稜線までが想定される。北側は和佐保川までが、西側は下モ坊推定地や上宝道を取り込んだ高原川沿いまでを最大の寺域と想定できる。なお、寺院中

心部の平面的な規模については東西約130m・南北200mの範囲がある。飛騨地方の他の山寺と比較すると約200m四方規模の大威徳寺や千光寺には及ばないものの、約100m四方前後の光寿庵や安寧寺より大きく、約200m×100mの清峰寺と同規模である。清峰寺は複数の子院を持つ寺院であったことが知られるため、殿坂口遺跡に所在したと推定される山寺も相当規模の寺院であったと推測される。

なお、当遺跡の中世期の年代について、採取遺物の分析から13世紀後半から15世紀前半ごろと推定される（三好 2016）。発掘調査から推定される江馬氏下館の存続年代が13世紀後半から16世紀前葉（飛騨市教委 2019b）であるため、殿坂口遺跡に存在した山寺と江馬氏の下館は同時期に営まれつつ約1世紀早く山寺が廃絶したという理解となる。該当年代において飛騨地方の山寺に関する記録と対照すると、14世紀には、正和2（1313）年に清峰寺の子院である長光院・長藏院・長谷院において大般若經が写経されている（『九津八幡神社藏大般若經』）。15世紀になると永享8（1436）年に「向上庵（光寿庵）地蔵堂」の額口が作成され、嘉吉元（1441）年に清峰寺・白山権現の額口が作成されている（国府町史刊行委員会 2007）。これらの寺院に関する記録は以降の年代には確認できなくなり、主要な山寺では千光寺と大威徳寺に関する記録のみしか確認できない。殿坂口遺跡に存在した山寺も山地に立地するという点で密教系の寺院であった可能性が高いと考えられるが、遺物から推定される廃絶年代が多くて密教系寺院の活動が見えなくなる15世紀前半で一致することは、飛騨地方における密教系寺院の衰退時期を示している可能性がある。なお、江馬氏の菩提寺と伝わる禅宗の瑞岸寺や圓城寺はそれぞれ下館周辺の集落内に存在している。殿坂口遺跡に存在した山寺が廃絶したと推定される15世紀前半から下館が廃絶する約1世紀の間について、周辺地域を含めた寺院の移り変わりを検討することは、飛騨地方における宗教勢力の変遷や支配勢力との関係性を考える上で重要と考えられる。

岩ヶ平城跡については、江馬氏の下館から直接視認できない越中方面の山之村道を押さえ、上宝道・山之村道や古川・高山方面に続く脇街道の分岐点を押さえる極めて重要な地点に立地している。山城としての構造の単純さからこれまでに指摘される通り（岐阜県教委 2005）、緊張が高まった時期に臨時に使用されたと想定される。よって、飛騨国内の政治的緊張が史料上に現れる15世紀後半以降から江馬氏が滅亡する16世紀後半までのいざれかの時期に（飛騨市教委 2019a）、高原諏訪城に付随する拠点として江馬氏によって使用されたと推測できる。また、尾根道や盛土遺構・堀切等の様相から元々寺院に関する遺構であった可能性が想定され、その場合廃絶した山寺の遺構に大きな変化を加えることなく継承して再利用したと理解できる。しかし、下段の殿坂口遺跡の地表面観察の状況からは寺院としての構造が読み取れるが、城郭としての利用状況は確認できないため、全山を含む再利用時の形態については今後の検討課題と言える。

以上のように、殿坂口遺跡は地表面観察や旧公団から理解できる構造から、相当規模の中世山寺の存在が想定される。立地としても江馬氏本拠の下館から直接望むことができない街道やその分岐点を監視することができる重要な地点に存在する。このような重要な立地条件であったことが、寺院廃絶後に岩ヶ平城跡が築かれた要因になったと考えられ、遺物から推測される年代からも江馬氏との関連が推測される。殿坂口遺跡は下高原郷内において稀な中世山寺の遺跡である可能性が高く、岩ヶ平城跡とともに江馬氏関連の信仰的な要素及び城郭遺構を含む重層的な要素として、重要な遺跡と位置付けられる。

## 第5章 総括

史跡江馬氏城館跡の居館跡は、1973（昭和48）年から実施された緊急調査により徐々に遺構が残存している状況が明らかとなり、1976（昭和51）年からの発掘調査で庭園を持つ館であることが判明した。その際の成果を受け、館だけでなく江馬氏の伝承が残る6ヶ所の山城とともに1980（昭和55）年3月に史跡指定された。館中心部については、1994（平成6）～2010（平成22）年度の史跡整備のための発掘調査を経て、3方向を堀と塀で囲み、堀の内郭に礎石建物4棟と南西隅に庭園を持つ館の姿が復元されている。

一方、館周辺に位置する住宅地等では、史跡指定を機に現状変更に伴う立会などで調査を継続してきたが、その成果を公開できずにいた。さらに下館跡と密接な関係にある高原諏訪城跡を初めてとした山城も未調査の状況であった。このような現状を受け、飛騨市教育委員会では「継続的な調査研究を実施し、史跡等の全容解明を推進する」としている（飛騨市教育委員会2019b）。これが本報告書作成の背景であり、ここで現段階の調査成果を総括する。

**下館跡と同一段丘に広がる遺構の年代観** まず、これまでの調査で明らかとなっている下館跡の変遷を整理する。この地の利用が始まったのは13世紀後半の下館Ⅰ期である。館の成立は下館ⅡA期の14世紀末で、その後の下館ⅡB期の15世紀末～16世紀初めに建替えを行う。16世紀中ごろの下館Ⅲ期には館の機能を他所に移したと考えられる（飛騨市教育委員会2010）。

次に、下館跡周辺では、建物建設に伴う試掘確認調査、水道工事に伴う試掘確認調査及び工事立会から、中世期の遺構と遺物、近世期の遺物が存在する状況が明らかとなった。特に、建物建設に伴う調査では、第3・10地点で中世遺構、第3～9・11・12地点で中世遺物を確認した。水道工事に伴う調査では、第4工区で多くの柱穴を確認した。遺構の全体像を把握することはできないが、酒器である土師器皿、食器具である瀬戸美濃焼平碗、調理具である珠洲焼すり鉢など館の出土遺物と同時期のものが出土するため、館に集住する人々が生活を営んでいたものと考えられる。遺物の年代観を検討できるものとしては3点挙げられる。第4地点で出土したNo.14珠洲焼すり鉢が珠洲V期、第11地点で出土したNo.85瀬戸美濃焼天目茶碗が古瀬戸戸口Ⅰ期、No.86瀬戸美濃焼折縁深皿が古瀬戸Ⅲ期である。これらの年代観から下館跡周辺に広がる遺構は下館ⅡA期には成立していたものと考えられる。

また、かつて殿段丘の近世村落の復元では、段丘の四至に安置された神社、館の北東に安置された寺院が下館に属する諸施設と考えられている（神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室1997）。その範囲は今回遺構と遺物を確認した範囲と重複しており、歴史地理的調査と考古学的調査の成果が整合したと言える。

さらに、発掘調査等で近世期の遺物が出土していることから、下館Ⅲ期以降も集落は存続していたものと考えられる。砂防堰堤に伴う試掘確認調査でも、高原諏訪城跡の位置する山稜の支尾根先端で、近世期の石列を検出した。なお、出土した近世陶磁器類は瀬戸美濃産の割合が高く、越中瀬戸産の可能性があるものはNo.27しかなかった。このため、近世期の飛騨地域は、瀬戸美濃産陶磁器類の流通圏であったと推定される。

以上のように、今回の発掘調査成果からは、館成立時と同時に段丘上には人々が集住して集落を形成し、館廃絶後の近世期にも集落は存続したと考えられる。

**高原諫訪城跡と殿坂口遺跡・岩ヶ平城跡の年代観** 高原諫訪城跡の築城年代については下館を整備した下館II A期の可能性が高いと考えた。また主郭周辺の遺構配置のあり方から、16世紀中ごろの改修、16世紀後半に廃絶と考えた。改修は、城郭遺構の構造と文献の検討から、16世紀中ごろに韋松城跡と同時期に実施したと考えた。なお、16世紀中ごろの下館III期には館を他所に移したとされる。移転先について、「河川筋の商工業者をより強固に統制」するため東町城跡とする考え（神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1997）と、戦国期を迎えての統治政策のために高原諫訪城跡とする考え方（佐伯 2018）がある。

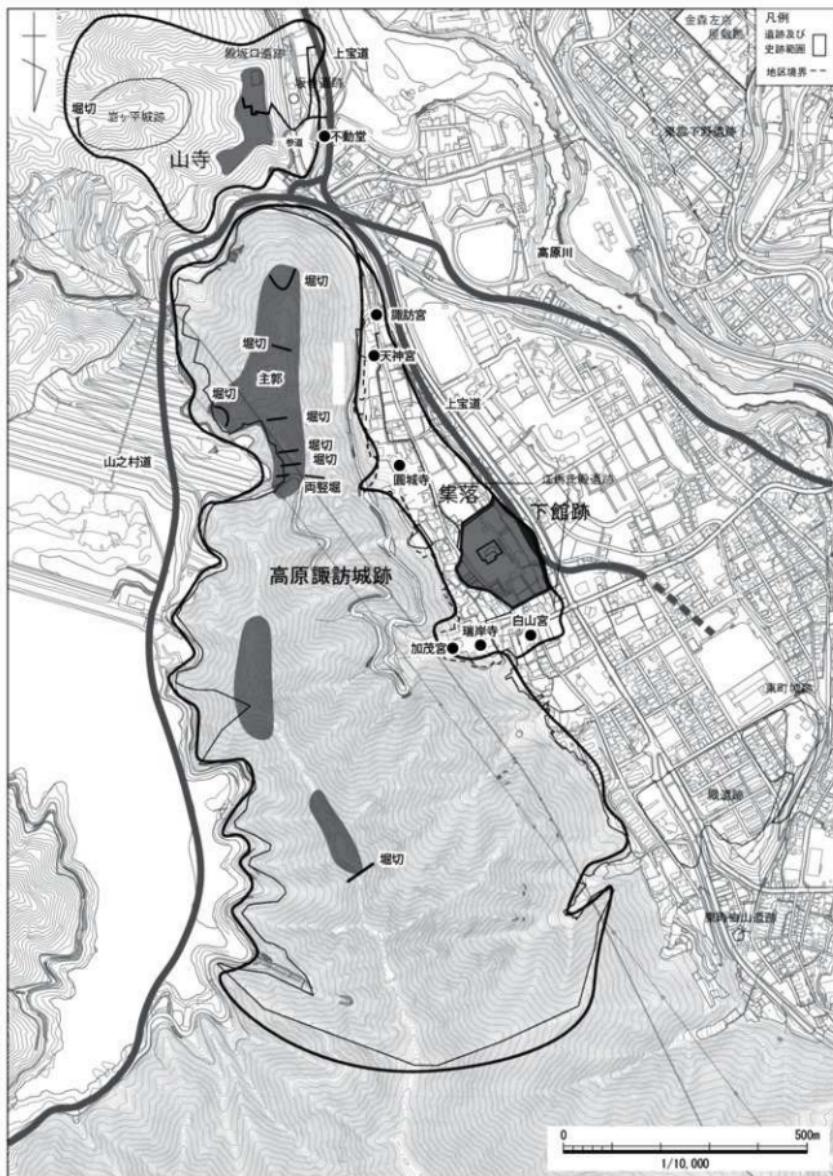
殿坂口遺跡と岩ヶ平城跡は、高原諫訪城跡南側の和佐保川を挟んだ山稜に位置する。殿坂口遺跡は、平坦地や通路のあり方から山寺と考えられる遺跡である。遺物からは、13世紀後半から15世紀前半の存続期間を想定している（三好 2016）。15世紀前半の時期は、飛騨地域で密教系寺院の記録が見られなくなる時期と一致する。他方、下館跡周辺には近世村落の復元から中世期まで遡る可能性がある瑞岸寺及び圓城寺が位置する。殿坂口遺跡に存在した山寺の廃絶と、江馬氏の菩提寺と伝わる瑞岸寺や圓城寺との関係は判然としないが、ここには地域の宗教勢力の変遷や支配勢力との関係性を検討できる空間が存在している。

岩ヶ平城跡は、下館跡から直接視認できない越中方面への山之村道を見下ろし、高原諫訪城跡からも比高差があつて視認しにくい山之村道・上宝道や古川・高山方面に続く脇街道の分岐点を押さえる立地である。単純な遺構配置であるため、高原諫訪城跡に付属する拠点として、殿坂口遺跡の廃絶後に政治的緊張を受けて臨時に設けられたと考えられた。

**下館跡周辺の中世遺跡の変遷** 最後に、下館成立期の一帯の景観を考えたい。まず、下館が成立した14世紀末に、館周辺にも集落が形成されたと考えられる。その範囲は殿段丘全体であり、四至に神社を配置した範囲と重複する。高原諫訪城もその頃には築城していた可能性を想定した。また、殿段丘から和佐保谷を挟んだ殿坂口遺跡に山寺が存在した。これらの遺跡は、下館跡と江馬氏殿遺跡、殿坂口遺跡は遺物から、高原諫訪城跡は立地から、江馬氏間連の遺跡として、14世紀末の下館II A期に同時に存在していたと考えた（第57図）。

下館が機能を他所に移した16世紀中ごろの下館III期には、高原諫訪城跡が改修され、現在の地表面観察で確認できる遺構配置となった。また殿坂口遺跡の山寺は廃絶しており、尾根上に岩ヶ平城跡が築城されていた。これは高原郷の政治的緊張を背景としたものであった。さらに近世期の遺物の出土から、江馬III期以降も集落は存続していたと考えられる。

以上が今回の調査で明らかとなった下館跡周辺の中世遺跡の変遷である。館の成立や廃絶と周辺の集落や山城、寺社の成立が連動している様子が明らかとなった。しかし、今回の結論は考古資料だけではなく立地状況などから想定している部分も多い。このため、下館跡周辺は館跡と山城跡の詳細な状況と広域的な関係性について検討余地のある地域であることを認識し、今後も調査研究を継続する必要がある。



第57図 下館跡周辺の諸要素位置図

## 引用・参考文献

- 愛知県 2007『愛知県史』別編 窯業2 中世・近世 濱戸系
- 飯沼健悟 2017「岐阜県の地積編製作業と構図との関係」2017年度日本地理学会秋季学術大会要旨
- 上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 大下永 2018「飛騨における中世山寺の空間構造について」『斐太紀』平成30年秋季号
- 大下永 2019「第3章第1節史跡江馬氏城館跡と韋松城跡の位置づけ」『飛騨市遺跡詳細分布調査報告  
—古川町・神岡町一』飛騨市教育委員会
- 岡村利平編 1909『飛州志』(長谷川忠崇編『飛州志』(享保年間))
- 神岡町 1976『神岡町史 資料編 下巻』
- 神岡町 1980『神岡町史 資料編 別巻』
- 神岡町教育委員会 1979『江馬氏城館跡発掘調査概報』
- 神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1995『江馬氏城館跡』下館跡発掘調査報告書I
- 神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1996『江馬氏城館跡II』
- 神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1997『江馬氏城館跡III』
- 神岡町教育委員会 1998『江馬氏城館跡IV』
- 神岡町教育委員会 2001『江馬氏城館跡V』
- 岐阜県教育委員会 2005『岐阜県中世城館跡総合調査報告書』第4集(飛騨地区・補遺)
- 葛谷彦彦 1970『中世江馬氏の研究』
- 国府町史刊行委員会 2007『国府町史 考古・指定文化財編』
- 小島道裕 1996「江馬氏下館と江馬氏一文献史料による考察ー」『江馬氏城館跡II』神岡町教育委員会・  
富山大学人文学部考古研究室
- 小島道裕 1998「文献史料による考察(補足)」『江馬氏城館跡IV』神岡町教育委員会
- 小島道裕 2003「江馬氏館と江馬氏一室町期国人領主と館ー」『国立歴史民俗博物館研究報告』第104  
集 国立歴史民俗博物館
- 佐伯哲也 2018『飛騨中世城郭図面集』桂書房
- 佐藤基次郎 1983「明治前期の地籍図」『新地理』30卷4号 日本地理教育学会
- 千田嘉博 1995「江馬氏の山城」『江馬氏城館跡』神岡町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室
- 高岡徹 1990『富山県大山町中世城館調査報告書』大山町教育委員会
- 高岡徹 1998「佐々成政の飛騨高原郷侵攻について」『飛騨春秋』450
- 富田礼彦編 1915『大日本地誌体系 斐太後風土記』雄山閣(富田礼彦『斐太後風土記』(明治6年))
- 飛騨市教育委員会 2010『江馬氏城館跡VI』
- 飛騨市教育委員会 2018『飛騨市遺跡地図』
- 飛騨市教育委員会 2019a『飛騨市遺跡詳細分布調査報告ー古川町・神岡町一』
- 飛騨市教育委員会 2019b『史跡江馬氏城館跡・名勝江馬氏館跡庭園 保存活用計画書』
- 藤岡英礼 2012「山寺の空間」『季刊考古学』第121号 雄山閣
- 藤澤良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院
- 三好清超 2016「飛騨市神岡町殿宇坂口における中世遺跡について」『飛騨の中世』第7号
- 吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館



江馬氏城館跡下館跡・高原諏訪城跡、江馬氏殿遺跡、殿坂口遺跡の遠景（北西から）

図版2



江馬氏城館跡下館跡、江馬氏殿造跡遠景（西から）



江馬氏城館跡下館跡、江馬氏殿造跡遠景（北西から）



建物建設に伴う試掘確認調査第3地点 遺構完掘状況（北から）

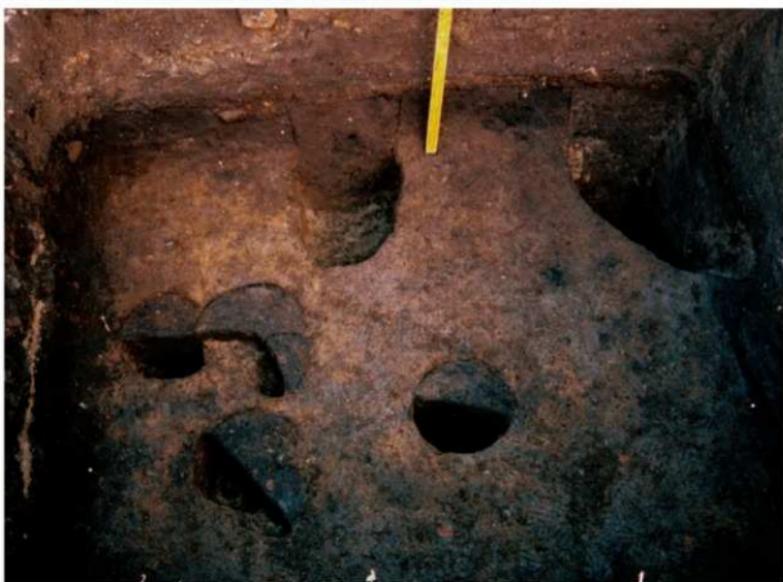


建物建設に伴う試掘確認調査第8地点 トレンチ全景（東から）

図版 4



上下水道工事に伴う試掘確認調査①地区北半分 遺構半截状況（南東から）



上下水道工事に伴う試掘確認調査②地区東半分（南から）

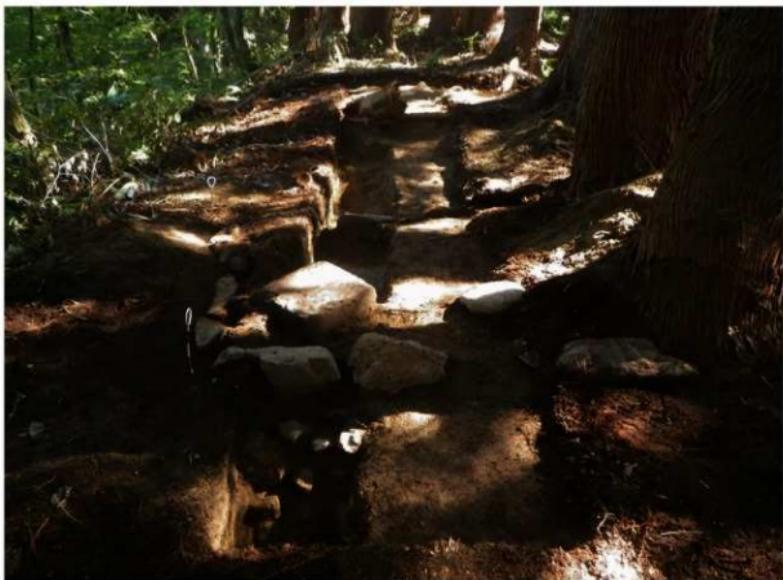


上下水道工事に伴う免掘調査 1 工区 柱穴 SP 3 調査状況（南から）



上下水道工事に伴う工事立会 I 地区トレンチ① 柱穴 SP 8・9・10 調査状況（西から）

図版 6



堰堤に伴う試掘確認調査 1 トレンチ 調査終了状況（西から）



堰堤に伴う試掘確認調査 2 トレンチ 調査終了状況（東から）

図版 7



土器器



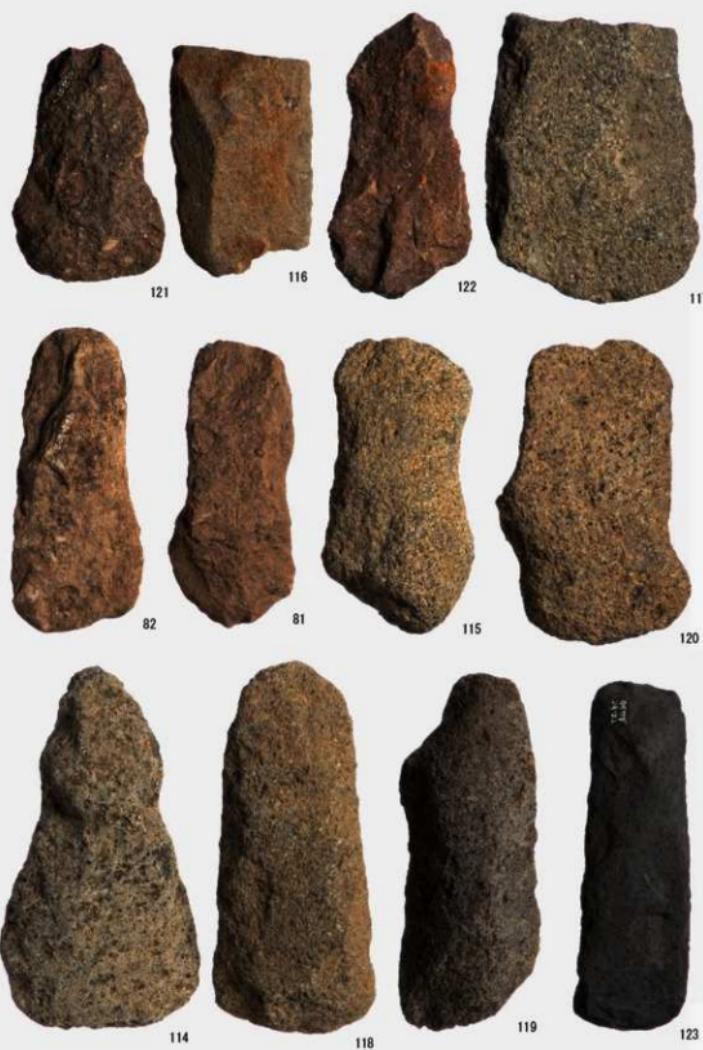
瀬戸美濃焼

青磁



珠洲焼

圖版 8



打製石斧

報告書抄録

飛騨市文化財調査報告書 第15集  
江馬氏城館跡調査報告書 第8集

## 江馬氏城館跡 7 江馬氏殿遺跡

発行日 令和2（2020）年3月13日

編集・発行 飛騨市教育委員会

〒509-4292 岐阜県飛騨市古川町本町2番22号

TEL 0577-73-7496 FAX 0577-73-7497

印刷・製本 有限会社 毛野考古学研究所 富山支所

〒939-0351 富山県射水市戸磯1679番地3  
太閤山老舗館A号室

TEL/FAX 0766-57-1618

毎日印刷社

〒506-1161 岐阜県飛騨市神岡町船津1152番地1

TEL 0578-82-0447 FAX 0578-82-5101